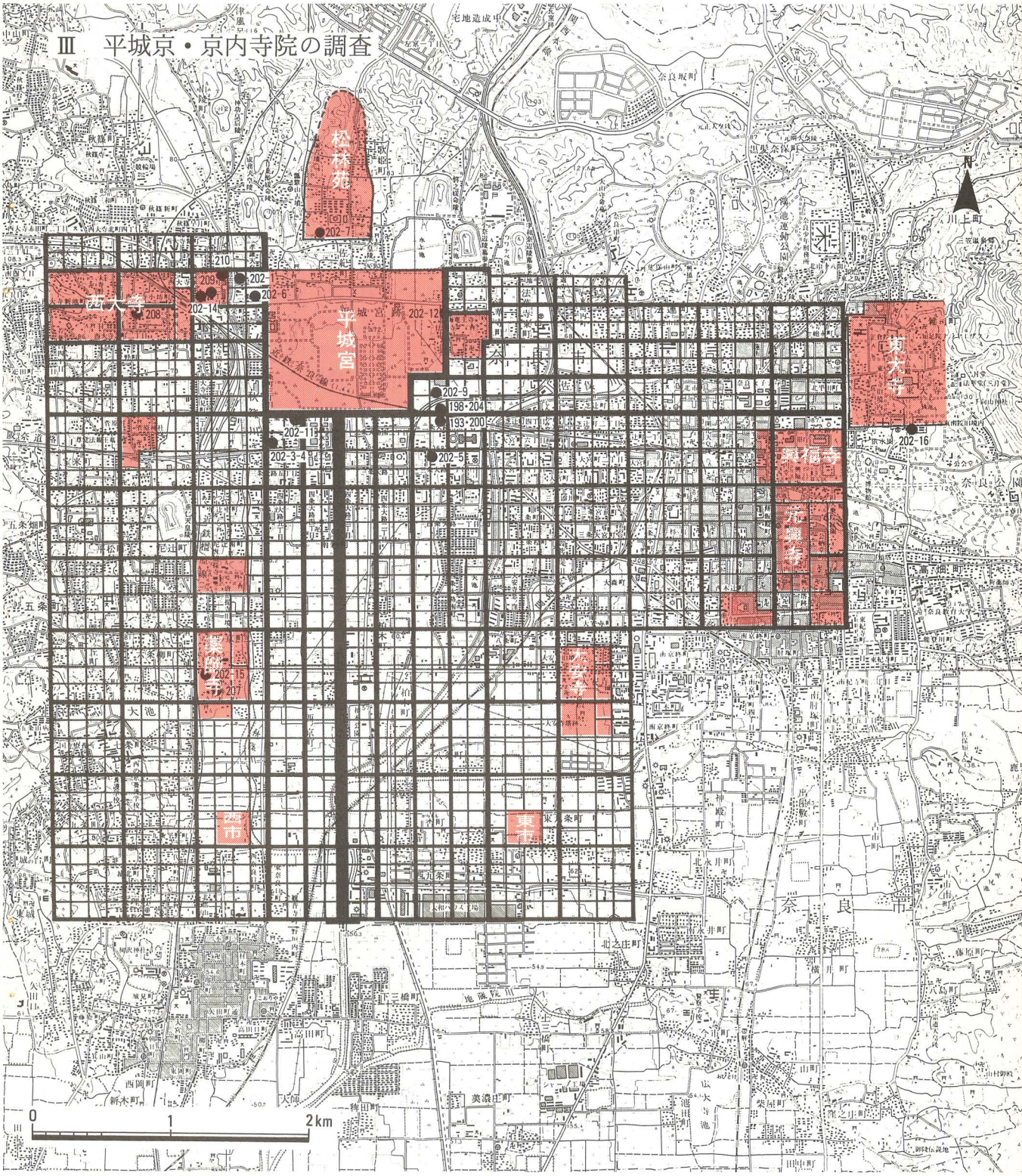


図26　1989年度平城京・京内寺院発掘調査位置図

表5　1989年度　平城京・京内寺院発掘調査地一覧（1989. 4. 1 ～ 1990. 3. 9）

調査次数	調査地区	地区名	面積(㎡)	調査期間	調査担当者	備考	掲載頁
193 F	左京三条二坊八坪	6AFI	55	5.16～ 5.29	小池　伸彦	そごう建設地	67
198 B	左京二条二坊五坪	6AFF	880	4. 1～ 5.16	小池　伸彦	そごう建設地	37
198 C	左京三条二坊八坪	6AFI	40	5. 8～ 5.15	田辺　征夫	そごう建設地	
200 補	左京三条二坊八坪	6AFI	40	7.11～ 7.15	毛利光俊彦	そごう建設地	
204	左京二条二坊五坪	6AFF	870	7.25～ 9. 6	高瀬　要一	そごう建設地	
207	薬師寺東面回廊	6BYS	1,213	7. 3～ 9.30	井上　和人	伽藍復興	78
208	西大寺境内	6BSD	300	8. 7～10. 3	毛利光俊彦	防災工事	97
209	西隆寺旧境内	6BSR	1,800	9.28～11.29	島田　敏男	奈良ファミリー建設地	100
210	西隆寺旧境内	6BSR 6AGA	560	11.20～12.12	巽　淳一郎	奈良ファミリー建設地	106
202−1	右京一条二坊八坪	6AGA	80	4.24～ 5. 9	小野　健吉	福田善子宅	
202−3	右京三条一坊十五坪	6AGF	192	5.15～ 6. 8	小野　健吉	集合住宅建設地	71
202−4	右京三条一坊十五坪	6AGF	257	5.22～ 6.29	小池　伸彦	給油所建設地	71
202−5	左京三条二坊六坪	6AFI	215	6. 7～ 7. 7	田辺　征夫	集合住宅建設地	68
202−6	右京一条二坊二坪	6AGA	50	6. 9～ 6.17	上野　邦一	城本　勲宅	
202−9	左京二条二坊五坪	6AFF	75	9.16～10. 2	浅川　滋男	木下守人宅	64
202−11	右京三条一坊九坪	6AGF	230	11.27～12.18	寺崎　保広	平城宮跡(国有地)水路付替工事	76
202−12	法華寺旧境内	6BFO	15	1. 9～ 1.11	小林　謙一	川崎政雄宅	109
202−13	左京二条二坊五坪	6AFF	180	1.29～ 3. 3	綾村　宏	駐車場建設地	61
202−14	西隆寺旧境内	6BSR	130	2.20～ 3. 9	森本　晋	三和住宅㈱	
202−15	薬師寺北門推定地	6BYS	9.4	8.25～ 8.28	井上　和人	下水道工事	
202−16	東大寺南大門	6BTD	15	1.16～ 2. 4	本中　真	金剛力士像解体修理	110

（カットは第204次出土墨画を合成）

1　平城京左京二条二坊五坪と二条大路の調査

第198次Ｂ・Ｃ区、200次補足、204次

1　はじめに

この調査は、後述する第193次Ｆ区調査とともに、百貨店建設に関連する発掘調査である（図27）。百貨店建設に関連する調査は、２年半の計画で1986年９月30日から継続してきたが、第204次調査を最後として、1989年９月６日に終了した。これまでに実施した調査は10次にわたり、期間は２年10ケ月、総面積は31,400㎡に及ぶ。

一連の調査のうち、昨年度までは、おもに平城京左京三条二坊一・二・七・八坪にまたがる範囲について調査を行ってきた（『昭和63年度平城宮跡発掘調査概報』）が、今年度は主としてその北方、左京二条二坊五坪および二条大路北半部にあたる範囲について1,800㎡あまりを調査した（図28）。このうち第198次調

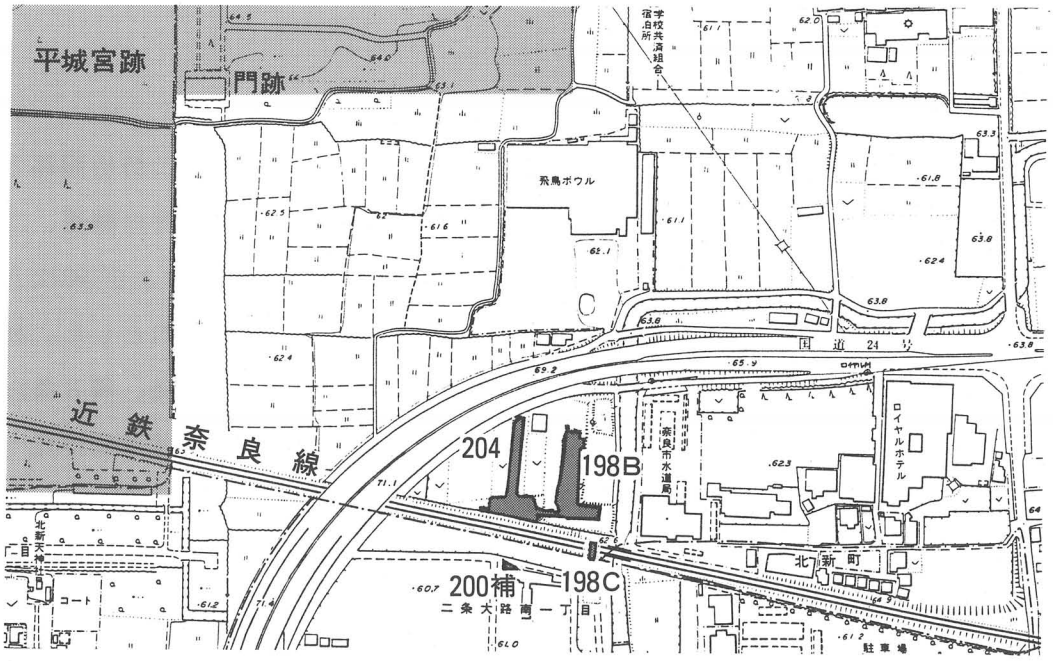


図27　調査位置図（１：5000）

査は、国道24号線バイパスから菰川右岸沿いに百貨店東側に通ずる奈良市市道の建設にともなう事前調査であり、第204次調査は近鉄線路北側の駐車場造成にともなう事前調査である。なお、第200次補足調査は近鉄線路よりも南の調査区であり、二条大路の南半部にあたる。

中心となる調査地は、平城宮東院南方遺跡として従来から平城宮との関連が注目されてきた重要な場所の一郭である。また、二条大路と東二坊坊間路の交差点付近にあたり、平城京の条坊を復元する上で重要な位置にあたる。そこで調査は、東院南方遺跡の性格を明らかにすること、条坊関連遺構の調査、および1988年度の調査で見つかった二条大路路面上の東西大溝（二条大路東西大溝）の調査を目的とした。これまで、五坪については奈良市教育委員会による調査（第156次、『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報』）がある。また、坊間路西側溝については1980年に第123－27次調査が行われ、1989年に第198次調査（Ａ区）が行われた。さらに今年度は第202－９次調査（五坪北辺）および第202－13次調査（坊間路）を実施した。これらの調査成果もふまえて、以下、考察を進める。

2　調査の概要

第198次調査

Ｂ区　198次Ａ区の北に接し、一部Ａ区と重なる。二条大路と東二坊坊間路との交差点から西、および五坪の東南隅にあたる。面積は880㎡。五坪の調査、二条大路北側溝と東二坊坊間路西側溝の関係を明らかにすること、および198次Ａ区調査で見つかった二条大路路面上の東西大溝SD5300の調査を目的とした。検出した遺構は、奈良時代以降の掘立柱建物６棟、築地１条、道路２条、溝８条以上、橋１基、土坑などである。調査の結果、京内では最長級の南北棟建物が見つかり、二条大路北側溝は三段階の変遷をたどることが明かとなった。また、SD5300は、二条大路北側溝の南にあり、東二坊坊間路西側溝の手前で途切れており、その位置、形態、堆積土、出土遺物、出土した木簡の内容などから、二条大路南側溝の北にあるSD5100（同上『平城概報』にいうSD160）と同じ性格の溝であることがわかった。SD5300からは木簡をはじめとする豊富な遺物が出土し、

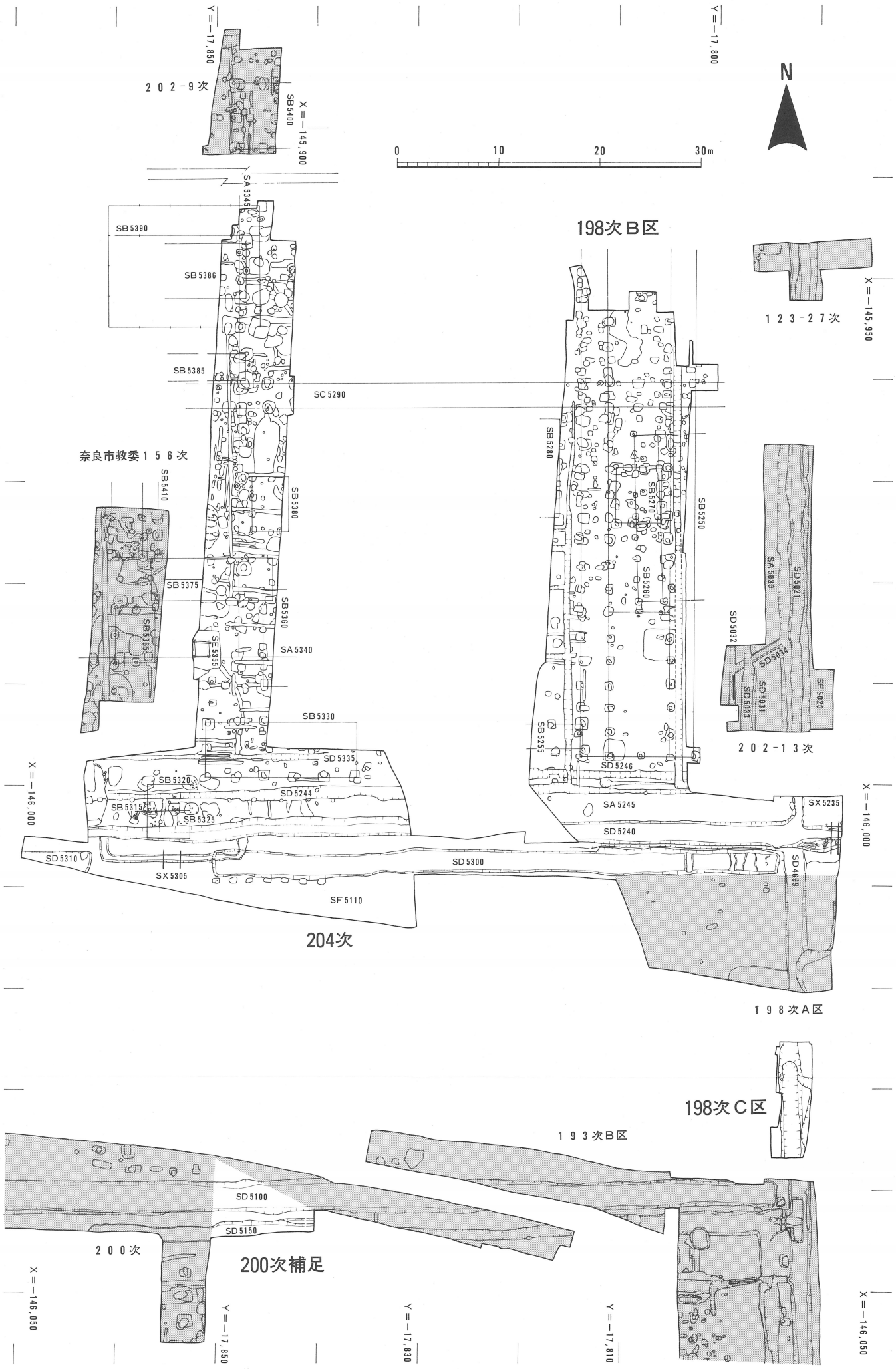

N
0
10
20
30m
Y=−17,850
Y=−17,800
X=−145,900
X=−145,950
X=−146,000
X=−146,050
Y=−17,830
Y=−17,810
202-9次
SB5400
SA5345
SB5390
SB5386
SB5385
SC5290
奈良市教委156次
SB5410
SB5365
SB5375
SB5380
SE5355
SA5340
SB5330
SD5335
SB5320
SB5315
SB5325
SD5244
SD5310
SX5305
SF5110
204次
198次B区
SB5280
SB5270
SB5260
SB5250
SB5255
SD5246
SA5245
SD5240
SX5235
SD5300
SD4699
198次A区
123-27次
SA5030
SD5021
SD5032
SD5034
SD5031
SD5033
SF5020
202-13次
198次C区
193次B区
SD5100
SD5150
200次
200次補足

図28　遺構図（1：500）

また二条大路北側溝（新段階）からは瑞雲双鸞八花鏡が見つかった。

C区　198次A区と193次B区の間に設定した調査区。面積は40㎡。近鉄線路直下にあたり、菰川の西に接する。東二坊坊間路西側溝の調査を目的とした。検出した遺構は奈良時代以降の溝3条以上である。

第200次補足調査

昨年度の200次調査において、デパート建築工事事務所下にあったため残った未掘部分の調査である。面積は40㎡。条坊関連遺構の調査と二条大路南側溝の北にある東西大溝SD5100の完掘、および木簡を始めとする遺物の取り上げを目的とした。SD5100は、市道下にあって発掘不可能な約30㎡分を残して、ほぼ完掘した。SD5100の発掘では、木簡が多く埋没する木屑層を土ごと取り上げており、その量はSD5100全体でプラスチックコンテナ約3000箱にのぼる。

第204次調査

五坪の南北中軸線に沿って、逆「T」字形に調査区を設定した。調査区東南部は198次B区に接する。面積は870㎡。五坪と条坪関連遺構の調査、およびSD5300の調査を目的とした。検出した遺構は奈良時代以降の掘立柱建物8棟以上、礎石建物（門）1棟、塀4条、築地1条、道路1条、溝8条以上、井戸1基、橋1基、土坑などである。

SD5300は204次調査区内に延びており、五坪中央の門の手前で途切れる。そして門の西では東西大溝SD5310が西へ延びていることが明かとなった。このSD5310は約6m分しか調査できなかったが、二条大路北側溝の南にあり、その位置、形態、堆積土、出土遺物、出土木簡の内容などからSD5300・5100と同じ性格の溝であることがわかった。SD5300・5310の堆積土は4層に分かれるが、上から3層目の木屑層が木簡を多量に含んでいた。発掘では、この木屑層を土ごと取り上げており、その量はプラスチックコンテナ約2000箱にのぼる。（小池伸彦）

3　遺構の変遷

左京二条二坊五坪は、奈良時代を通じて、少なくとも1坪分全体を敷地として利用しており、名時期ごとに建物を大きく作り替えているのが特徴である。二条

大路の北側溝と南側溝は、東二坊坊間路西側溝とともに大きく２度の作り替えがあり、また二条大路も、一時的ではあるが、東西大溝SD5100・5300・5310のために路面幅が狭くなる時期があった。このような五坪と二条大路の変遷は、遺構の重複関係や配置、出土遺物などからＡ～Ｇ期の７時期に分かれる（図29）。

Ａ期

五坪の南面に築地塀SA5245があり、築地から約３ｍ北に築地雨落溝SD5246がある。また、五坪の中央東寄りの位置に掘立柱建物SB5270・5280がある。SB5270は梁行５尺、桁行が６尺あり、倉庫風の建物である。SB5280は東妻４間分のみを検出し、その柱間寸法は８尺である。

二条大路では、北側溝SD5240、南側溝SD5150が東へ流れ、東二坊坊間路東側溝SD4701に注ぐ。西側溝SD5021はSD5240に合流するが、それ以南には延びない。また、SD5021の南端部は、長さ２～３ｍにわたり大型の石を用いて護岸している。

Ｂ期

五坪の建物に変化はないが、二条大路と東二坊坊間路の各側溝が作り替えられ、築地塀には軒瓦が葺かれる。西側溝は、SD5240の南にSD4699が新設され、SD5021と一体となる。そして北側溝SD5240、南側溝SD5150は、SD4699以東を埋め立てる。

Ａ・Ｂ期の五坪の建物は次に述べるＣ期に比較して小型であるが、この時期の中心となる建物が未発見であり、単純な比較による、Ａ・Ｂ期の五坪の性格付けはできない。

Ｃ期

五坪内の建物を大きく改変し、大型の建物を整然と配置する。また、遅くともこの時期には、五坪南面築地塀の中央に、掘立柱の一間門が二条大路に開く。このほか、二条大路北・南側溝、坊間路西側溝は前期を踏襲する。

五坪内では、中央北寄りにSB5400を、東辺部に長大な南北棟建物SB5250を配置する。また、門SB5315の東北に建物SB5330を配置し、築地塀の北雨落溝

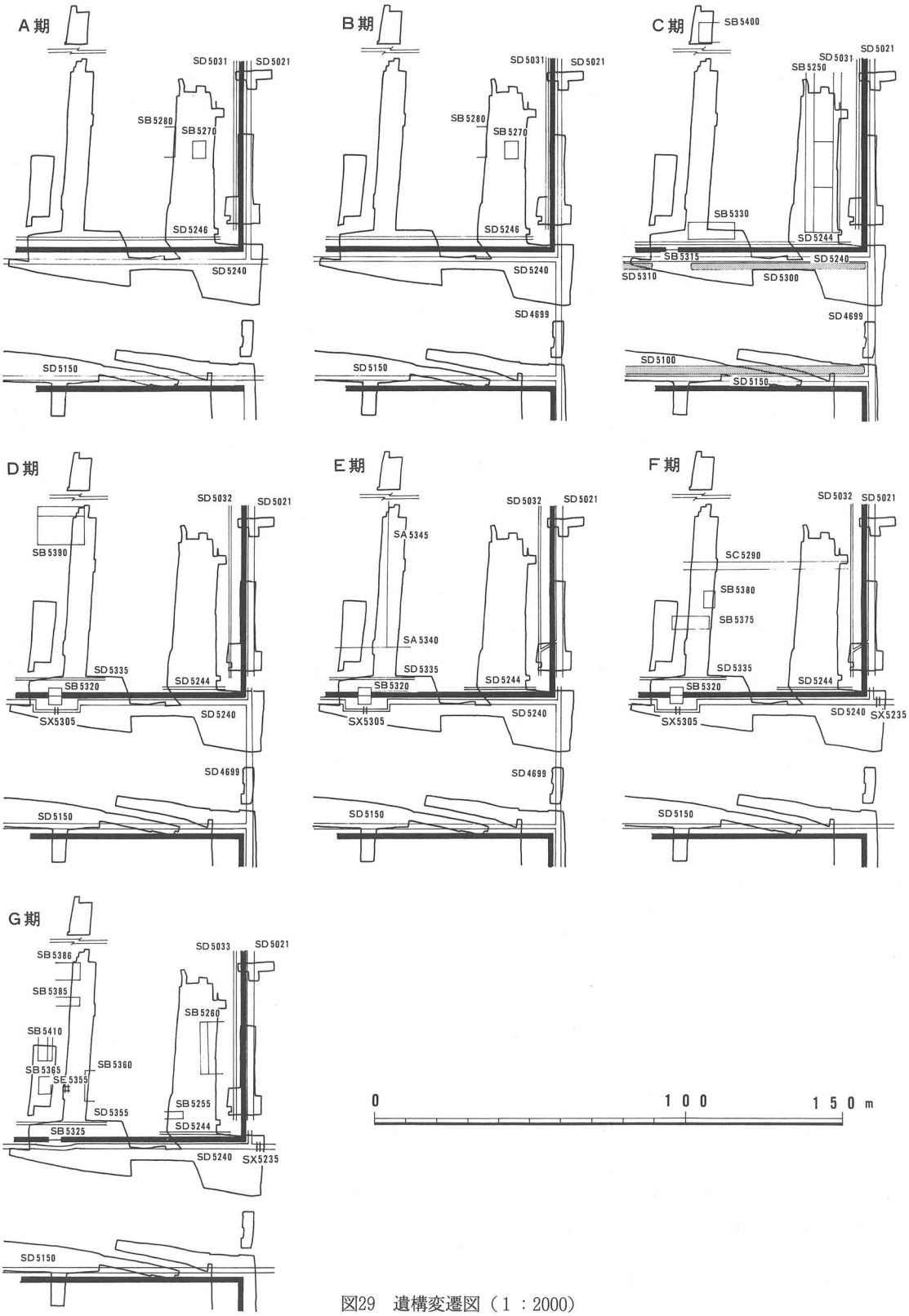


図29　遺構変遷図（1：2000）

をSD5244につけかえる。全体として官衙風の建物配置となる。SB5250は梁行4間、桁行20間以上あり、東西両面に庇をともない、南妻から数えて6間目と12間目に間仕切りをもつ。柱間寸法は、身舎の梁行が10尺、桁行が8尺で、庇の出は東が8尺、西が9尺である。柱には礎板を伴うものが多い。この建物は京内では最長級の掘立柱建物であり、規模だけからいえば、平城宮内の官衙（例えば馬寮のSB6175）に匹敵する。SB5300は梁行2間、桁行5間の東西棟で、柱間寸法は桁行が10尺、梁行が9尺である。門SB5315は柱間寸法が13尺である。SB5400は桁行2間以上、梁行2間の東西棟で、柱間寸法は桁行が10尺、梁行が10.5尺である。

この期の終わり頃、二条大路の南・北の路肩に沿って、両側溝の内側に東西大溝SD5100・5300・5310が掘られ、大路の幅は約29mとなる。SD5100は幅2.6m、深さ0.9m、長さ120mあり、SD4699と長屋王邸の北門の手前で途切れる。SD5300は幅2～2.3m、深さ1～1.3m、長さ約56mあり、SD4699と門SB5315の手前で途切れる。門の西からは、SD5300とほぼ同じ幅、深さのSD5310が西へのびる。SD5300の西端とSD5310の東端は、門の中軸からそれぞれ約6mのところにある。これらの溝は、木屑層内に木簡のほか土器、瓦、木製品などを大量に含み、その出土状況は遺物が一括して捨てられたことを示す。出土木簡から天平12年（740）前後に掘られたとみられ、木簡などが大量に捨てられ、短期間の内に埋没したらしい。

D期

C期の大型建物を撤去するとともに整地を行い、敷地内の建物を一新する。築地塀の軒瓦も葺き替えた可能性がある。

五坪の中央に大規模、かつ堅固な建物SB5390を配置する。また、五坪南面築地の門を礎石建ちの門SB5320に作り替え、門の北の雨落溝をSD5335に作り替える。門SB5320は桁行1間14尺、梁行2間9尺等間と推定される。SB5390は東妻部の1間分が調査区内にかかっていると考え、五坪南北中軸線を想定し西へ折り返すと桁行5間、梁行4間の東西棟建物となる。ただし、身舎は3間であ

り、北側にのみ庇がつく。柱間寸法は桁行、梁行とも10尺。身舎部の柱掘形は一辺1.5～2.0mもあり、いずれも底に板材を十字形もしくは一文字に据えた礎板を有する。これ以外では、この期に属する建物は未発見である。

SD5240は門を迂回して「コ」字形につけ替え、そこには簡単な橋を架ける。SD5021は石組の護岸部より北側で、幅を広く作り替える。ただし、護岸部と幅の広くなったSD5021との連接部分は調査区外にあるため状況が不明。SD5150は変わらない。

E期

三たび敷地内を大きく改変し、築地塀の軒瓦も葺き替える。前期の建物は撤去し、敷地内を新たに区画する。門SB5320および雨落溝SD5355・5244は変わらない。また、SD5240・5021・4699も前期のままである。

南北塀SA5345は五坪の南北中軸から東20尺の位置にあり、門の北50尺の位置で東西塀SA5340に接続する。いずれも柱間寸法は10尺。門を入ってSA5340につきあたるところに入口があるとみてよかろう。

F期

五坪内を四たび大きく改変する。敷地内では、東西に延びる単廊SC5290が坪を南北に二分し、小型の建物SB5380、SB5375がその南に配置される。SD5335・5244は変わらない。SC5290の柱間寸法は桁行が9尺、梁行が8尺で、残存する柱掘形は浅い。SB5380は桁行2間以上、梁行3間の東西棟建物の西半部で、柱間寸法は桁行、梁行とも6尺。SB5375は南面築地の北70尺の位置にあり、桁行6間、梁行2間の南北棟建物。柱間寸法は梁行が7尺であるが、桁行については総長40尺を6間に等分しており、1間は約6尺7寸となる。

条坊関連遺構では、E期の終わりか、この期の始め頃、SD5240・5150を東へのばし、東二坊坊間路東側溝に接続するともに、SD4699を埋め立てる。そして、SD5240には、SD5021との合流点のすぐ東に橋が架けられる。SD5021は変わらない。

G期

敷地内で最後の大きな改変が行われる。北側溝SD5240は門の前面の張り出しが弱くなり、緩やかに屈曲しながら流れる。SD5335・5244・5021は変わらない。

敷地内では単廊を撤去して区画を変える。坪の中央部と東辺部にやや大型の建物SB5386・5260を配置し、周辺に小型の建物数棟を配置する。礎石建の門は撤去され、一間門となる。また、門の北50尺の位置に大型の井戸SE5355がある。五坪の中心建物となるSB5386・5385は、十字形に組んだ礎板を柱根元に据えた強固な造りの建物である。SB5386・5385の4基の柱穴がいずれも礎板を据え、柱筋が揃うことから、これらが1棟の建物を構成するとの見方もあるが、そのような構造の建物は考え難いため、ここでは2棟の建物に分けておく。SB5386は東妻柱が調査区内にかかっており、桁行は不明であるが、梁行が2間で柱間寸法は9尺である。隅柱穴に礎板がある。SB5385はSB5386の18尺南にあり、東西棟建物の東半部と思われるが、東妻1間分が調査区内にかかっているのみで全体の規模や構造は不明。梁行の柱間寸法は9尺。SB5260は桁行8間、梁行3間以上の南北棟建物で、西に庇がつく。柱間寸法は桁行が7尺、身舎の梁行が9尺、庇の出が8尺である。SB5255は桁行1間以上、梁行1間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行が10尺、梁行が9尺である。あるいは1間×1間の建物か。SB5360は井戸の東にある南北棟建物で、西側柱列のみ検出。桁行は5間で、柱間寸法は6.5尺。SB5410は桁行2間以上、梁行3間の南北棟建物で、東に庇がつく。柱間寸法は桁行が6.5尺、梁行が5尺。SB5365は桁行、梁行とも2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行が9尺、梁行が6.5尺である。SB5410とSB5365は東側柱筋をそろえる。井戸SE5355の井戸枠は2段に分かれ、上段が横板組み隅柱の方形枠（1辺1.3m）、下段が縦板組み円筒形の枠（直径1.5m）である。方形の枠は下1段が残り、高さ約0.6m、縦板は総数37枚あり、長さは1.7m前後である。井戸枠内から平城宮V期の土器が出土。

以上の名時期の年代は、A・B期が奈良時代初頭、C期が奈良時代前半から中頃、D期が奈良時代中頃、E・F期が奈良時代後半、G期が奈良時代末と推定している。

（高瀬要一・小池伸彦）

4　遺　　物

二条大路東西大溝、二条大路北側溝、東二坊坊間路西側溝、柱抜取り穴、井戸、土坑、包含層などから多量の瓦、土器、木製品、木簡、種子類などが出土し、そのほか少量ながら金属製品、鋳造関連遺物、なども出土した。とくに二条大路東西大溝SD5300からは瓦や土器に混じって木製品、木簡が多量に見つかった。これらは、比較的短時間の内に一括して捨てたものである。木製品には最古の絵馬や楼閣山水図など注目すべきものが少なくない。また、木簡では、後述するように藤原麻呂に関わる可能性の強い木簡群などが見つかり、五坪の性格を知る上で重要な手がかりを得た。

瓦塼類

出土した軒瓦は軒丸瓦199点、軒平瓦162点であり、軒瓦の他に多量の丸・平瓦および刻印瓦（204次出土）が2点ある。また、SD5100とSD5300出土瓦のうち、両者で接合する例がある。調査区ごとの出土量は、表6に示したとおりである。また、主要な軒瓦を図30・31に掲げておく。

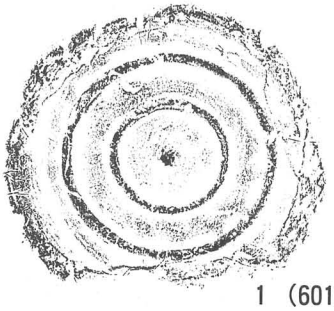
今回は、調査地内に築地を含むとはいえ、調査面積に比較して出土量が多いといえる。全体的な出土傾向をみると、平城宮出土軒瓦編年第Ⅰ期のものが少なく、第Ⅱ期以降に急増する。今回、新たに設定した型式として6138型式L種（以下、「型式」・「種」を省略）、6444A、6641P、6682F、6700A、6754Aがあり、他に新型式の軒平瓦1点（図31－21）がある。また、SD5100木屑層出土の6225Aは、この型式の瓦の製作開始の年代を考える上で重要な資料である。

土　器

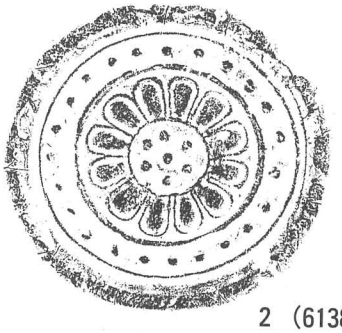
SD5100・5300・5310から出土した土器は完形品が多く、平城宮Ⅱ期とⅢ期のものである。注目すべき土器として、「兵部卿宅」と墨書した土師器皿（底部片）がある。これはSD5300木屑層から木簡とともに出土したもので、五坪南面の門よりの位置に捨てられたものである。後述する木簡群の分布では北A区にあたる。

木製品

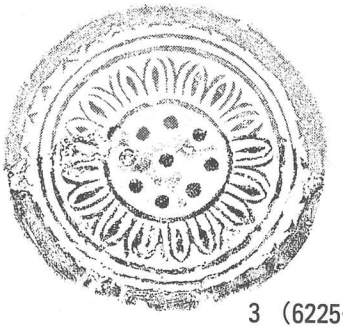
木製品は、工具、紡織具、服飾具、容器、籠編物、食事具、文房具、遊戯具、



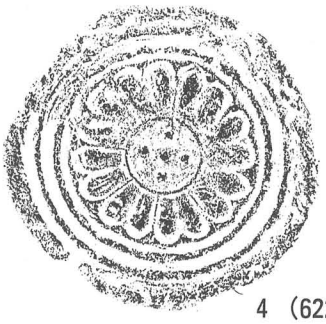
1（6010—A）



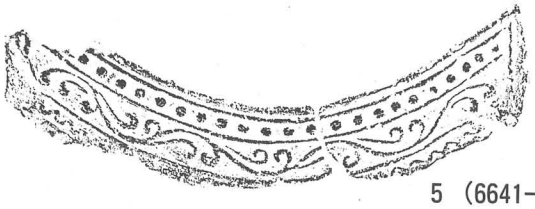
2（6138—L）



3（6225—A）

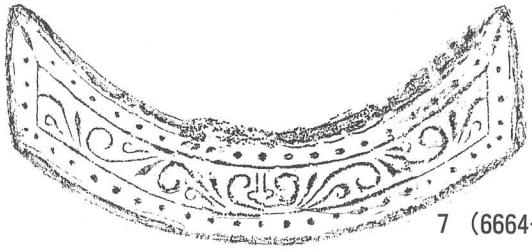


4（6229—B）

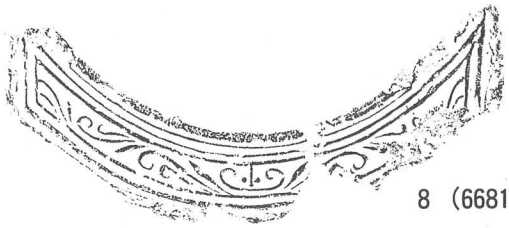


5（6641—P）

6（6663—F）

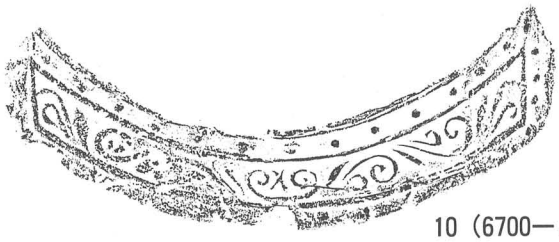


7（6664—F）



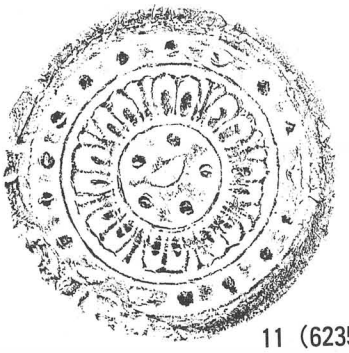
8（6681—B）

9（6682—A）

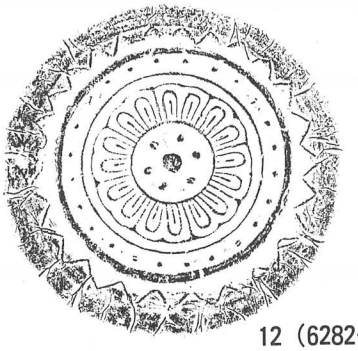


10（6700—A）

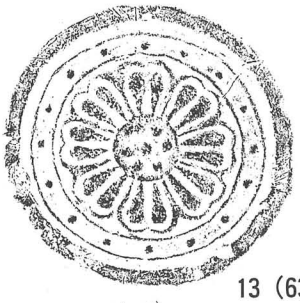
図30　出土軒瓦Ⅰ（1：4）



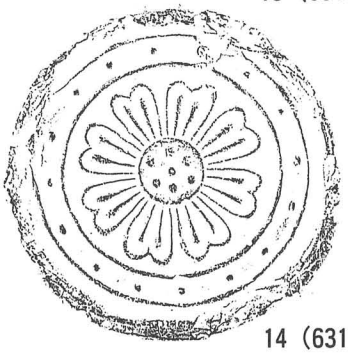
11（6235—B）



12（6282—Ga）

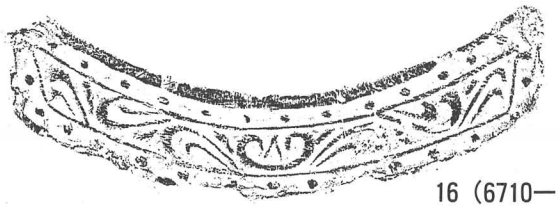


13（6316—G）

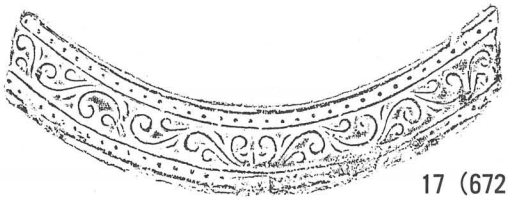


14（6316—H）

15（6444—A）



16（6710—C）

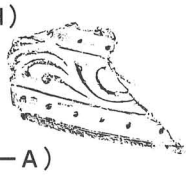


17（6721—Ga）

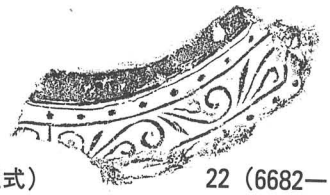
18（6732—A）

19（6754—A）

20（6802—B）



21（新型式）



22（6682—F）

図31　出土軒瓦Ⅱ（1：4）

表6　次数別軒瓦集計表

軒丸瓦							軒平瓦						
編年	型式＼次数	198B	204	198C	200補	計	編年	型式＼次数	198B	204	198C	200補	計
	藤原宮式	3				3		6561		1			1
Ⅰ	6272	1		1		2	Ⅰ	藤原宮式	3				3
	6278	1				1		6664C	1				1
期	6284	3				3	期	6667		2			2
	6304		1			1							
	6010	1	1			2		6663A	3	4			7
	6135	2				2		6664D・F	3	3			6
Ⅱ	6138B		2			2	Ⅱ	6681	5	1		1	7
	6285	1				1		6682	3	5	1		9
	6291	1				1		6685	10	5	1		16
	6301		1			1		6688		1			1
	6307	1		1		2		6689		1			1
	6308	6	7	2		15							
期	6311	4	10	1		15	期						
	6313	11	2			13							
	6314		1			1							
	6131	1				1		6663		2			2
Ⅲ	6225	6	4		1	11	Ⅲ	6691	2	4			6
	6226	1				1		6710	7				7
期	6282	16	15			31	期	6711	1				1
	6316E・G	12	3			15		6721	5	12		1	18
	6133	1	2			3		6663F・J	4	13		1	18
	6134	1	1			2		6702A		2			2
Ⅳ	6138H・L		3			3	Ⅳ	6732	2	13			15
	6144	1				1		6760B		1			1
	6151	2				2		6763	1	4			5
	6227		1			1		6802B	3				3
期	6229	4			1	5	期						
	6235	2	16			18							
	6316C・D・H	12	3	1		16							
Ⅴ	6316	4				4	Ⅴ	6663		5			5
	6320		1			1		6700	1	3			4
期	6444	1				1	期	6737A	2	1			3
								6754A		1			1
不明	不　明	10	7		1	18	不明	不　明	7	10			17
	計	109	81	6	3	199		計	63	94	2	3	162

祭祀具、雑具、棒状品など種類が豊富であるが、ほとんどが二条大路東西大溝SD5100・5300・5310から出土したもので、他の遺構からの出土量は少ない。なお表7に、これまでの百貨店建設に関連する調査で出土した木製品の点数を、おもな遺構ごとに示した。既に述べたように、二条大路東西大溝の木屑層は多量の木簡を含んでいたため、土層ごと採取して持ち帰り、現在その水洗作業を継続中である。そのため、SD5300・5310については木製品がまだ十分な点数に達していないため表から省いた。SD5100についても水洗が完了しておらず、なお不十分ではあるが、この表から二条大路東西大溝の木製品について、およその傾向はつかめるものと思う。

二条大路東西大溝では、全体として木製品の保存が比較的よく、その出土状況はこれらが一括して廃棄され短期間に埋没したことを物語っている。今回見つかった木製品をみると、絵馬、楼閣山水図板絵習書、人物などを絵巻物風に墨画した板、特殊な漆器、陰刻のある曲物、刳りぬき箱など注目すべき製品が数多くあり、墨画したものがかなりの数出土した点に特徴がある。このほかに、へら、刷毛、糸巻、紡輪、横櫛、留針、檜扇、曲物、大小の円形の蓋板、挽物、匙形木器、杓子形木器、算木、琴柱（墨画のあるものを含む）、人形、鳥形、斎串などがある。また、台形に近い半円形を呈する用途不明の板が一括して出土した。

棒状品や半円形板以外の木製品の構成比率に付いてみると、SD5100では曲物容器と蓋板の割合が最も高く、匙形・杓子形木器がそれに次ぐ。祭祀具の割合はやや低く、中でも斎串の割合が極端に低い。このような構成比率は、長屋王家木簡溝のそれによく似ていると、今のところ言える。

その他の遺構では、東二坊坊間路西側溝SD4699から漆沙冠が出土した。これは従来の出土例に比べて残りがよく、貴重な資料といえる。

絵馬　SD5300の木屑層から出土したもの（写真6）。五坪の門寄りの位置で出土しており、天平8～10年銘の木簡を伴出。横27.2cm、縦19.6cm、厚さ0.6～0.9cmのヒノキの柾目板に墨で描く。板材の表面は横に荒く削って仕上げ、裏面は割れ面を残したままである。現状では、掛紐を通す孔は認められない。馬は右

表７　遺構別木器集計表

木器名	SD5100		SD4750		SD4699		SK4770		井戸 (32)		土坑 (7)	
へら	3	3	9	6	10	8	3	12	3	2	1	8
刷毛	3	3	3	2								
木釘			1	1								
楔			6	4			4	16	2	1		
刀子					1	1			4	3		
手斧柄					1	1						
工具	6	6	19	13	12	10	7	28	9	6	1	8
糸巻	2	2	2	1	5	4	1	4	1	1		
紡輪	2	2	4	3	3	3						
紡織具	4	4	6	4	8	7	1	4	1	1		
曲物	20	21	23	15	24	20	8	8	35	24	5	42
挽物	2	2	4	3	4	3			3	2		
蓋	18	19	22	15	11	9			2	1	3	25
容器	40	42	49	33	39	33	8	32	40	27	8	67
杓子・匙	15	16	30	20	10	8			7	5	1	8
琴柱	1	1	3	2	1	1						
こま					1	1	1	4				
サイコロ					1	1						
遊戯具	1	1	3	2	3	3	1	4				
留針	2	2	8	5	3	3						
檜扇	3	3							2	1		
漆沙冠	1	1							1	1		
横櫛	2	2	2	1	3	3	1	4	16	11	1	
木履			2	1								
服飾具	8	8	12	8	6	5	1	4	19	13	1	8
人形	3	3	7	5	20	17	2	8	2	1		
斎串	3	3	2	1	13	11	3	12	68	46	1	
刀・刀子形	3	3	5	3	1	1	1	4				
陽物形	1	1					1	4				
鳥形	2	2	1	1	1	1						
馬形			1	1								
牛形	1	1										
車輪形	1	1										
鏃形					1	1						
舟形	1	1	1	1								
祭祀具	15	16	17	11	36	31	7	28	70	48	1	8
刳りぬき箱	2	2	14	9	1	1						
漆器	4	4			3	3			1	1		
計	95点	99%	150点	100%	118点	101%	25点	100%	147点	101%	12点	99%

※1990年３月末現在の集計
※ＳＤ5100：二条大路東西大溝（南）
ＳＤ4750：「長屋王家木簡」溝
ＳＤ4699：東二坊坊間路西側溝
ＳＫ4770：「長屋皇宮」木簡出土土坑
井戸・土坑：左京三条二坊一・二・七・八坪内の奈良時代に属する井戸32基、及び土坑７基を一括した。
※数字の左が点数、右が割合（%）

向きで、巧みな筆使いにより、筋肉の動きや表情などリアルに表現しており、鬣と尾の毛は繊細な平行線で１本、１本丁寧に描き分けている。馬具は鞍、障浜、轡、面繋、手綱、胸繋、尻繋、壺鐙などが表現されている。馬の体部には赤色のベンガラを塗り、障泥には白色土を施す。障泥には、装飾痕跡が15カ所見られ、その部分は材が炭化黒変している。伴出木簡から737年前後の絵馬とみられ、年輪年代測定では728年を遡らないという結果を得ている。本例はこれまでで最古、かつ奈良時代のもので最大の絵馬であるとともに、技巧的にも優れており、考古資料および絵画資料として貴重なものである。

楼閣山水図板絵習書　廃品となった折敷の底板の内外面を習書、墨画に使用したもので、その後さらに縦に割れており、もとの製品の約⅓が残る（写真７・８）。長さ61.3cm、現存幅10.8cm、厚さ0.8cm前後。SD5300の五坪の門寄りの位置で、木屑層から出土。楼閣山水図は、滝の流れ落ちる山を背に７棟の建物と４棟の塀および池を描く。建物の配置は楼閣を中心にしてその両脇に２棟、右奥に１棟、左手前に１棟あり、後方には山を取り囲む築地塀がめぐり、建物群と山全体を囲む築地塀が前方にある。築地塀にはそれぞれ門が開き、中心楼閣と前方の門の間に池が配置される。池には樹木の植えられた中島がある。建物には組物が表現され、微細な部分まで写実的に表現したところがある。手前の築地塀は、壁面を花文で飾った彫牆である。習書はこの楼閣山水図の下部にあり、上下両方向からと底板の中心から外に向かって書かれ、一部は字が判読不能なほど密に習書している。習書には、「阿刀酒主」「河内国」「千字文」「天地玄黄　宇宙洪荒　日月□□」などがある。一方、底板の内側には、２名の人物の全身像、人の顔、器物などの墨画と習書がある。人物像は、笏を手にし冠帽を被った役人風の男性と、その下に両腕を胸の前に上げ、足を前後に開く童女らしき人物の後姿が描かれる。このほかに、冠帽を着けた人の頭部と髷を結った人の頭部（破損のため表情は不明）がある。習書には、「勅符比来間取出家人等者」「主稲」「露結」などがある。

楼閣山水図は、伴出した木簡から天平８～10年頃ものであり、この種の絵画としては最古のものである。この図は、正倉院文書や東大寺献物帳に記載のある中

国伝来の山水画などを写したものと推定される。年代が確実にわかり、その絵画資料、建造物関連資料としての価値は極めて高い。

金属製品・土製品・石製品

金属製品、鍛冶関係の土製品や鉱滓などが出土したが、今回は調査範囲が限られていることもあり、その量は少ない。金属製品は鉄製品が12点、銅製品が5点、銅銭が17点ある。鉄製品には刀子、手斧、釘、楔などがある。銅製品では、瑞雲双鸞八花鏡が出土しており、五坪では整地土から鋳竿が出土した。

土製品は、鞴の羽口や坩堝の破片（土師器の甕を転用した坩堝1点を含む）が二条大路東西大溝や五坪の整地土から鉱滓とともに出土した。これらは鋳竿とともに、五坪において銅製品の鋳造が行われていたことを示している。石製品は、砥石がほとんどである。

瑞雲双鸞八花鏡　二条大路北側溝SD5240上層から1点が出土した（写真5）。いわゆる唐式鏡。完形品で保存はよく、くすんだ赤銅色を呈する。鈕は、鈕孔が左右方向にあく。文様の表出はややあまく、右の鸞の左足の蹴爪が消失し羽毛や顔が不鮮明であり、下方の蔓草の左端が欠失している。また、花文と雲文の一部も不鮮明である。面径11.5cm、高さ0.75cm、外縁の厚さ0.45cm、界圏の径7.4cm、重さ221g。瑞雲双鸞八花鏡は、これまでに全国で15例が知られており（杉山洋「唐式鏡の生産と流通」1989）、奈良県内でも明日香村坂田寺跡から1面、五条市霊安寺跡から2面が出土しているが、平城京内からは本例が初出である。

（小池伸彦）

木　簡

木簡が出土した遺構と点数は表8の通りである（200次調査は1988年度の調査であるが、同じ遺構の遺物であるので参考のために掲げた。なお、202－13次調査におけるSD5021出土木簡については、同調査の項を参照されたい）。ここではこのうちの3～5について述べる。

表8　遺構別木簡集計表（点数は概数）

遺　　構　　名	発掘次数	点　数
1，ＳＤ 4699（東二坊坊間路西側溝の二条大路以南）	198 C	10点
2，ＳＤ 5021（東二坊坊間路西側溝の二条大路より北）	198 B	20点
3，ＳＤ 5100（二条大路南路肩の東西溝＝東西大溝南）	200 200補	850点 40点
4，ＳＤ 5300（二条大路北路肩の東西溝＝東西大溝北）	198 B 204	240点 300点
5，ＳＤ 5310（二条大路北路肩の東西溝＝東西大溝北）	204	10点
6，ＳＤ 5240（二条大路北側溝）	198 B	5点

二条大路木簡　東西大溝南SD5100（193次Ｂ・197次・200次・200次補）、東西大溝北SD5300（198次Ｂ・204次）・5310（204次）、これら３つの遺構から出土した木簡は、いずれも天平８年前後の年紀をもつものを主とし、内容的にも強い連関がみられるので、合わせて「二条大路木簡」と仮称している。これまでに確認済みのものは約2200点であるが、目下継続中の水洗い・選別の進行に伴い、今後相当数の増加が見込まれる。

SD5100出土木簡　１は行幸の荷物の運搬人の手配依頼で、続日本紀にみえる天平８年６月27日からの聖武天皇の吉野行幸の際のもの。２はその行幸終了後、未使用の貫簀に付けられた付札で、使用したものに付けられた３と対になるものであろう。４は東大寺の前身の金鐘山房からの解で、皇后宮職との関わりを考えさせる。５は京職からの槐花の進上状で、条単位の進上が注目される。６は意保御田からの瓜の進上状、７は供奉の人数を書き上げた木簡である。８は出典不明の七言絶句を記すもので、官人の習作かも知れない。

SD5300・5310出土木簡　9は鷹の餌となる鼠等の進上状で、右京職のものも確認されている。10はその鷹を飼っていた機構の担当者名を列記したもの。11は下級官人に対する銭の出挙の帳簿であろう。12は中宮職が兵部省卿宅政所に対して19人の舎人の考文銭等の支払いを請求する木簡で、SD5100・5300・5310から出土した木簡の中で唯一明確な宛先をもつ。当時の兵部卿は藤原不比等の第四子、麻呂である。13はその家政機関内の宿直者を書き上げたもの。14はその構成員に対する食料支給に関わる木簡。20は岡本宅からその家政機関宛ての進上状、15は同じく酒を請求する木簡で、これを見ながら習書したと思われる墨書土器がほぼ同じ地区から出土している。SD5300西端からは、13・14・20と同じタイプの木簡、及び16のような近江国坂田郡上坂(田)郷の庸米の荷札がまとまって出土している。17は国郡から個人（右大臣藤原武智麻呂か）に宛てた類例の少ない荷札の一つである。18は身分の異動を坊令に連絡せよ、という内容の木簡。19は門の警備に関わるもので、他に一門・三門・南門・北門などがみえる。

「二条大路木簡」の特徴　第一に、坪の敷地内ではなく、二条大路上というかつて例をみない遺構から出土したという点、第二に「長屋王家木簡」に勝るとも劣らない質・量の豊かさ、第三に、木簡の内容によって、出土場所にかなり顕著な偏りがみられること、以上三点が挙げられる。確かに、遺構の状況や遺物の内容には共通する点が多く、3つの溝はほぼ同じ埋没状況を示す。しかし、木簡についていえば、これらの溝からは同じタイプの木簡が多数出土しているものの、内容ごとに整理してみると、その出土地点にはかなり顕著な偏りが認められる。

主要なタイプの木簡の出土分布　便宜的にSD5100・5300・5310を図32のように区分して説明する。南A区（SD5100西端25m）、南B区（同中央部西より25m）、南C区（同中央部中央25m）、南D区（同中央部東より20m）、南E区（同東端25m）。北A区（SD5300西端5m）、北B区（同中央部）、北C区（同東端25m）、北A′区（SD5310の既掘部分6m）。なお、SD5100出土木簡の出土地点の詳細等については『平城宮発掘調査出土木簡概報』22を参照されたい。

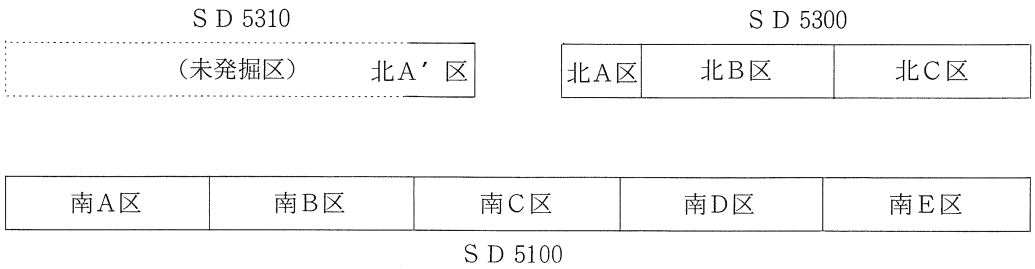


図32　木簡出土遺構区分模式図

①続日本紀に記事のある天平８年６～７月の聖武天皇の吉野行幸に関わる木簡（１～３）が北Ａ区、及びこれに向かい合う南Ｃ区に集中する。北Ｂ区にも若干みられる。

②京職に関わる木簡（５・９・18、88年度概報16）は南Ａ・Ｃ区、北Ｃ区に多い。

③意保御田の進上状（６）は南Ａ区に集中する。

④供奉の木簡（７）は南Ａ区に多く、南Ｂ区にも若干みられる。

⑤宿直木簡（13）と食料支給木簡（14）は北Ａ区に集中し、南Ｃ区にも多いが、北Ｂ区や南Ｅ区にも分布する。

⑥荷札木簡はSD5100・5300・5310のほぼ全域にみられるが、特に顕著な参河・駿河・伊豆・安房・若狭・隠岐の荷札（88年度概報13～15）は南Ａ区から集中的に出土した。ついで南Ｅ区に多く、これと向かい合う北Ｃ区にもかなりみられる。但し、近江国の庸米の荷札（16）だけは北Ａ区に集中する。17も北Ａ区から出土した。

⑦門の警備に関わる木簡（19、88年度概報17）は北Ｂ・Ｃ区、南Ｅ区に多い。

⑧岡本宅の進上状（20）は、北Ａ′区の他、北Ａ区に集中するが、南Ｅ区にも分布している。15も北Ａ区から出土した。

２つの木簡群　以上の出土傾向からみて、「二条大路木簡」は２つに大別できそうである。

第一は、北Ａ区とそれに向かい合う南Ｃ区から出土したもの、具体的には、近

江国坂田郡上坂(田)郷の庸米の荷札、岡本宅からの進上状、京職関係の木簡のうち槐花の進上状、吉野行幸関係の木簡、宿直木簡や食料支給木簡などがこれにあたる。これらは左京二条二坊五坪南面中央の門と密接に関連する出土のしかたをしており、この門の内側すなわち五坪内で使用された木簡である可能性が強い。

第二は、南A区に集中する木簡である。ここに顕著なのは、伊豆・駿河・安房・若狭・隠岐の荷札、および宮内では天皇と密接に関わる地域のみから出土してきた参河国播豆郡の贄の荷札、意保御田の進上状、京職関係の木簡のうち鼠等の進上状、供奉木簡などである。同じ地区には大命と記すものや大膳職のものと考えられる木簡、東大寺の前身の金鐘山房からの解なども含まれ、聖武天皇や光明皇后との関わりの深い木簡群といえよう。第二の木簡群と同じ南A区、及び南E区、北B区、また東二坊坊間路西側溝からは、中衛府・左右兵衛府に関わる墨書土器がみつかっており、門の警備に関わる木簡も第二の木簡群の一部である可能性が強い。これらは長屋王邸に駐屯した軍隊に関わるものと考えられるので、第二の木簡群は、SD5100の南にあたる長屋王邸跡地の左京三条二坊八坪から投棄された可能性があり、長屋王没後の跡地利用を考える材料となると思われる。ただ、性格解明の決め手となるような木簡は、これまでのところみつかっていない。

藤原麻呂に関わる木簡群　このうち第一の木簡群は、北A区から木簡12や「兵部卿宅」と書かれた墨書土器が出土していることから考えて、当時の兵部卿藤原麻呂の家政機関に関わるものである可能性が強い。宿直木簡や食料支給木簡にみえる人名をたどっていくと、中宮職から兵部卿宅に出向中の19人を含めて100人にも及ぶ兵部卿宅の家政機関の構成員が復原でき、家令・書吏・資人・奴・婢などの職員の他、政所・膳所・鷹所・酒司などの機構、大殿・器殿・東器殿・西瓦蓋殿(坊)・北檜蓋殿・南細殿・西坊・御厩・東門・西門などの建物の存在も確認できる。さらに第一の木簡群は、前述のように左京二条二坊五坪から投棄された可能性が強いので、東院南方遺跡の一角に、天平初年、兵部卿藤原麻呂の邸宅の存在を想定できよう。分析がさらに進めば、兵部卿宅の家政機関の実態がさらに明らかになることが期待される。

「二条大路木簡」の問題点　ここで問題となるのは、第一の木簡群と第二の木簡群の関係である。全く性格の異なる２つの場所からもたらされたものなのか、それとも一括される木簡群の中の傾向の違いに過ぎないのか。南Ａ区、及び北Ａ・南Ｃ区のように顕著な偏りを示す地区がある一方、北Ｂ・Ｃ区や南Ｅ区のように双方の木簡が混在する地区もあるので、にわかには判断できない。「二条大路木簡」の性格付けは、第二の木簡群の分析にかかっているといえようが、今後公道である二条大路上に掘られた遺構の性格という未解決の問題も含め、「二条大路木簡」の全貌が明らかになった時点で、文字資料だけでなく木器・土器・瓦など他の遺物の詳細な検討とともに総合的に結論付けるべき課題となろう。

（渡辺晃宏）

SD5100出土木簡※

1・内膳司解　申請荷持丁事　二人持十荷 / 一人持廿荷　合卅荷

・　右為今月廿六日御幸行供奉料件荷持右如　290・43・6　011

2・芳野幸行貫簀　不用

・　天平八年七月十五日　135・24・3　032

3・芳野幸行用貫簀

・　天平八年七月十五日　141・23・3　032

4・山房解　申返抄米二斗菜一櫃　返上　袋一口 / 櫃一合

・丁壬生部己麻付　注状進如解 / 天平七年閏月廿－日　僧延福　275・27・2　011

5・左京五條進槐花一斗八升「坊監中臣君足 / □小子五人功銭十五文〔拾ヵ〕〔功別ヵ〕□□五升」（「──」は合点。以下同じ）

・　天平八年六月十四日坊令大初位下刑部舎人造国麻呂　（262）・31・3　011

6・従意保御田進上瓜一荷　納瓜員九十五果

・持越仕丁　天平八年七月廿五日国足　224・30・3　011

7・供奉卅六人　司一人　奴六人　直丁十人
宮人五人　婢十四人

・　九月五日　258・32・6　011

〔山ヵ〕
8・山東□南落葉錦
巌上巌下白雲深
独対他郷菊花酒
破涙漸慰失侶心

・　□
明明白白
□白諸諸
□ □　124・73・7　011

※200次補足調査出土は3•5のみ。1・2・4・7（200次）、6（197次）、8（193次B）は1988年度の調査に関わるが、一連の遺構の遺物であるので、ここで報告しておく。

SD5300出土木簡

9・（孔）左京職 進　鶏一隻　馬宍三村
雀二隻　鼠一十六頭

・（孔）　天平八年四月十四日
従六位上行少進勲十二等百済王「全福」　199・35・4　011

10・鷹所　薗部伊賀麻呂　雪牛養
凡人足　鳥取咋麻呂

・　雲国足　并五人　202・32・4　032

古斐卅七文
11・出挙銭数　美濃麻呂七文
若佐五文
船五文
・沙美五文　天平五年二月九日
魚麻呂四文　合六十二文　145・48・4　011

12・中宮職移兵部省卿宅政所　「池辺波利　「大鳥高国　「八多徳足　「史戸廣山
太宿奈万呂「川内馬飼夷万呂「村国□万呂「大荒木事判
「杖部廣国「日下部乙万呂「東代東人「太屋主
「秦金積　太東人　「山村大立「陽候吉足

・「狭井石楯　右十九口舎人等考文銭人別三文成選六文又官仰給智
「馬国人　識銭人別一文件銭今早速進来勿怠緩
「他田神□
大属
少進　天平八年八月二日付舎人刑部望麻呂　261・42・3　011

13・直資人十一人　大石毛野　志貴子老　伯祢大魚　佐本乙万呂
田部諸君　荒田公万呂　秦真葛　狛安徳　（孔）
太乙万呂　屋形諸魚　佐伯古万呂

・宿資人三人　志貴子老　六
伯祢大魚　天平八年五月三日田部諸公　（孔）
狛安徳　〃　311・45・2　011

14・十一日不食米一斗一升六合　土師石前八合　阿刀真公八合　日下部海子八合
土師嶋村八合　家令一升四合　豊国廣虫八合
田辺僧万呂八合　忍坂乙万呂八合　丸部武蔵一升　＝
尋津福万呂八合　赤染秋足八□　佐味梶取六合
〔合〕
阿刀飯主六合
＝　丸部田主七合　（孔）
上虎万呂七合
・　天平八年五月十一日　苅田孔足　「□□」（孔）
365・38・6　011

15・岡本宅謹　申請酒五升　右為水葱撰雇女
・□給料　天平八年七月廿五日六人部諸人　256・（24）・4　011

16・近江国坂田郡上坂郷戸主藪
・　田虫麻呂戸庸六斗　147・17・5　033

17　石見国那賀郡右大殿御物海藻一籠□□連　天平七年六月　335・40・6　031

18・右京七條二坊戸主勲十二等台忌寸千嶋之戸口千人　年十六
・右人所盗依豎子放依状注坊令等宣令知　八年十月廿九日　330・35・6　011

19・二門 佐伯 大伴 皇后宮 雪 丈 少山田 土部 画師 参河

合一十二人依数入奉□　　(161)・24・2　019

SD5310出土木簡

20・岡本宅　上進青角豆十把

・　　天平八年七月廿日　田辺久世万呂　　250・37・5　011

5　まとめ

今回の調査で、左京二条二坊五坪では奈良時代を通じて1町以上の敷地を利用しており、C期以降、二条大路に門が開いていたことが明かとなった。奈良時代前半については、SD5100等の出土木簡などの分析から、五坪は藤原麻呂の邸宅として利用された可能性が強く、奈良時代後半では、建物や出土瓦などの分析から、五坪はより役所に近い性格をもつものと考えられる。

調査範囲が狭いにもかかわらず軒瓦の出土点数が多いこと、宮内の役所に匹敵する桁行20間以上の長大な規模の掘立柱建物があることなどは、この一郭を含む平城宮東院南方遺跡が一般の京内宅地とは性格を異にすることを示している。しかし、今回は東院南方遺跡のごく一部を調査したにすぎず、その全体の性格究明、平城宮との関連などは今後の調査に待つところが大きい。

条坊関連遺構では、二条大路北側溝、東二坊坊間路西側溝が大きく3段階の変遷をたどることが判明した。また、二条大路では路面上に長大な溝が掘られ、「二条大路木簡」をはじめとする多くの遺物が得られた。この溝がどの様な経緯で掘られたのかなど、「二条大路木簡」溝の性格については不明な点が多い。出土した大量の土器、瓦、木製品、木簡などの整理はまだ緒についたばかりであり、それらの分析を待ってあらためて検討すべき課題である。また、このような溝がここ以外の道路にも掘られたのかどうかは、今回の五坪ばかりでなく左京三条二坊一・二・七・八坪の性格にも関わる問題であり、今後の京内の調査において注意すべき点である。　　(小池伸彦)

2　左京二条二坊五坪東辺の調査　　第202－13次

1　はじめに

駐車場造成に関わる調査である。左京二条二坊五坪の東限築地とその東を南流する東二坊坊間路西側溝がかかる地域である。198次調査Ａ区に東隣し、198次調査Ｂ区に北隣する。南北７ｍ、東西11ｍの調査区に、そのほぼ中央部で西側溝想定位置に幅4.5ｍで北へ22ｍ調査区を延ばし、調査面積は約180㎡である。土層は、盛土40cm下、耕土10cm・床土20cm・遺物包含層（暗褐土）20cmとあり、遺構検出面となる。

2　遺　　構

検出遺構は、東二坊坊間路西側溝、五坪東面築地およびその西雨落溝、雨落溝のすぐ西にある木樋とそれに西側溝から水を取り入れている斜行溝等である。築地は、築土は残存しない。西側溝西肩・雨落溝東肩間は2.5ｍある。部分的に断ち割ったが下層の掘立柱塀は確認で

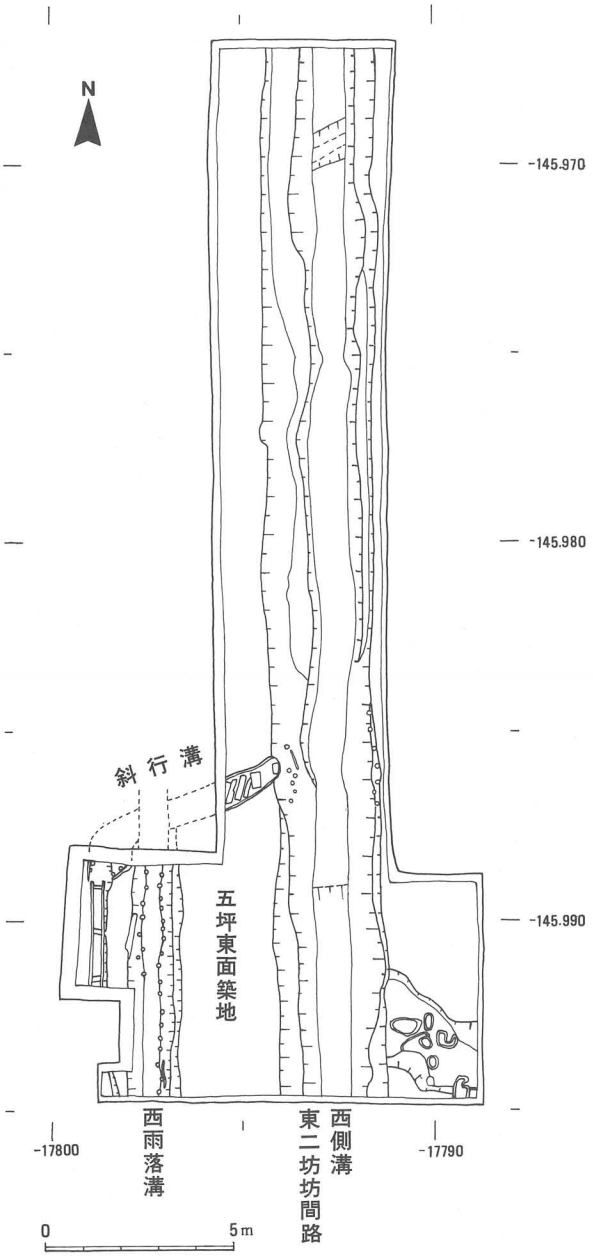


図33　第202－13次調査遺構図（１：200）

きなかった。

西側溝は、幅約2.5mの素掘溝で深さ0.9～1.1mである。上部は幅広く、底から0.35mで溝中央部が段をつけた形でさらに深くなっている。したがって、西側溝は当初幅が比較的狭く掘削された（最下層－埋土砂混黒灰粘土）が、その溝は一旦ある深さまで埋まり、その後にやや幅が広げられたものと考えられる。幅広くなったのちに、二時期の流れ（下層・上層－ともに砂混灰色粘土）がある。最上層は灰色粘土で埋まり、その上を暗褐土が覆っている。西側溝には、調査区のほぼ中央付近で、両岸に８～10本の杭が残存する。ここに堰が設けられていたと思われ、西岸には杭で支持された板材が残り、水の取入れ口が設けられていたことを示す。西側溝底で斜行する旧流路２条を検出した。

築地のすぐ西に、雨落溝がある。幅1.0m、深さ0.6mで、両岸には千鳥状に杭が打たれており、原位置はとどめていないが板材も残っていることからみて、千鳥状に打ち込まれた杭の間に横板を置いて護岸していたものと思われる。

さらに、その西に木樋がある。木樋は、幅0.4m、深さ0.25mであり、側板は長さ３m、厚さ10cmである。側板には下部は北端・中央・南端の３カ所に枕木を置き、また上部は北端・南端の２カ所に支え木をかましている。この木樋への水の取り入れは、先にふれた西側溝の水取り入れ口から築地を斜めに横切る斜行溝によった。斜行溝は幅0.6mで両岸に部分的に杭が残存している。築地部分には蓋板と思われる材が残存し、その部分は暗渠であったと思われる。

以上の遺構の時期変遷は、奈良時代当初には、西側溝・築地・築地内雨落溝が造築されたが、早い時期に、西側溝に堰と水取り入れ口が設けられ、築地部分の暗渠を通って西側溝から築地内木樋に水を取り入れる施設が設けられた。ところが奈良時代後半になると木樋は機能しなくなり、再び築地内雨落溝が杭等の護岸を設けてつくられたものと考えられる。

3　遺　　物

瓦塼類は、暗褐土・西側溝・築地内雨落溝等から出土している。暗褐土出土には、築地内側

図34　新型式軒平瓦6737－A

から軒丸瓦6313Ａ型式が３点出土している。西側溝では、軒丸瓦は最下層からの出土はなく、下層から6282Ｄｂ・6308型式、上層から6282Ｂａ・6308Ａ・6313Ａａ・6316Ｄｂ型式、東岸壁面の灰黒粘土から6316Ｈ型式が出土し、軒平瓦は、最下層から6666Ａ・6681Ａ型式、下層から6685Ａ・6719Ａ型式、上層から6644Ａ・6691Ａ型式、最上層から6663Ｃ型式、東岸の灰黒粘土から6685Ａ型式が出土しており、下層・上層に、平城宮出土軒瓦編年第Ⅱ～Ⅴ期の軒瓦が混在している。また築地内雨落溝から軒丸瓦6282Ｂａ、軒平瓦6681Ａ型式が、南東隅の土坑から軒丸瓦6313Ａ、軒平瓦6721Ｇａ型式が出土している。さらに新型式の軒平瓦6737Ａ型式が遺物包含層（暗褐土等）から出土している。

土器類は、暗褐土・西側溝・築地内雨落溝等から出土している。西側溝は最下層からは、降っても天平初年の平城Ⅱが出土し、下層・上層はともに平城Ⅱ～Ⅴの土器が混在している。西側溝から墨書土器「坏女」「菓」「水」「大」や、蹄脚硯・円面硯が出土している。

木簡は西側溝から49点（最下層22点、下層23点等）の出土が確認されているが、さらに増える可能性がある。主なものをあげると、

(1)・請銭一貫　大都保一口并□〔用カ〕　□直百文
　　白　　漆一升三合直六百文
　　□　　□　　合別五十文

・遺銭卌文　(290)・30・5　011

(2)　□井郷布□□六斗　223・28・8　051

(3)　長門国美祢郡「調綿壱伯屯　天平十九年九月」　410・37・7　031

(4)・上番従八位上御立史足国

・上番従八位上御立史足国　115・16・3　011

(5)・左太臣官交□〔易カ〕

・□田古宅米　(82)・19・4　019

などである。(1)は上層、(2)(3)は下層、(4)(5)は最下層出土である。紀年木簡は(3)のみで、この木簡は調綿以下が別筆である。　（綾村　宏）

3　左京二条二坊五坪北辺の調査　　第202－9次

1　はじめに

本調査は住宅建設に伴う事前調査である。調査地は、既述した第204次調査区のほぼ真北にあり、第198・204次と同じ左京二条二坊五坪の北端に位置する。発掘区は、やや不整形だが、約7×11mの南北トレンチである。基本層序は、上から耕土・床土・暗灰褐砂質土（遺物包含層）・黄灰白粘土（地山）の順で、地山面は西が高く東が低い。

2　遺　　構

上記のように、発掘面積は80㎡弱と小規模だが、平城宮に近接する一等地であるためか、以下の4時期の変遷がたどれる多数の遺構が検出された（図35）。

A期　奈良時代初期。発掘区のほぼ中央を南北にとおる掘立柱塀SA5465とそれに伴う南北溝SD5461、さらに掘立柱の東西塀SA5466によって構成される。SA5465・SA5466はともに6尺等間で、前者は北端の3間分、後者は西端の1間分のみが検出された。この直行する2つの塀はその交点で接し合い、ひとつの区画を形成していた可能性もある。なお、SA5466の2柱穴には、ともに柱根（直径約17cm）が残っていた。

B期　奈良時代前半。掘立柱建物SB5469が建ち、その雨落溝SD5462・SD5463が、発掘区のほぼ中央を南北に流れる。溝はSD5463が上層、SD5642が下層である。SB5469の2柱穴は、SB5471（D期）の妻側柱

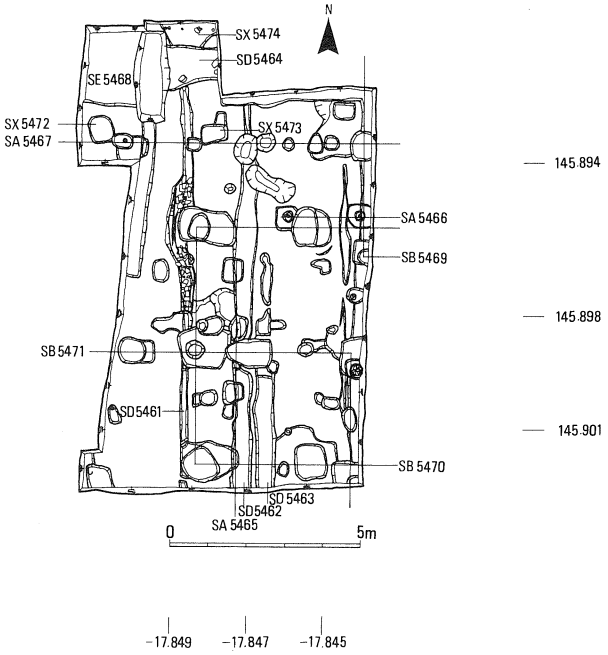


図35　第202－9次調査遺構図

穴と柱筋がほぼ一致しており、当初は一体の建物かとも思われた。しかし、断割り調査によると、SB5469は地山面から、SB5471は遺物包含層の上面から柱穴を掘り込んでおり、両者は時期の異なる建物であることが明らかになった。

C期　奈良時代前半～奈良時代中頃。桁行・梁行ともに10尺等間の東西棟SB5470が建つ。SB5470は、旧建築材を転用した角材を多数埋め込んだ礎盤が、すべての柱穴の底に残っている。たとえば、西北隅の柱穴で16本、妻中央の柱穴では14本の板材・角材が埋められていた。また、これらの柱穴からは、平城宮土器Ⅱ～Ⅲの破片が出土している。

D期　奈良時代後半。やはり桁行・梁行ともに10尺等間の東西棟SB5471が建つ。建物東北隅の柱穴には直径21cmの柱根が残り、その南隣の柱穴では、底に平たい自然石を利用した礎盤がみられた。この掘立柱建物の約5.5m北側には、6尺等間の東西塀SA5467とそれに伴う東西溝SD5464を設けている。5坪と6坪の坪境小路南側溝の有無を確認するために拡張された地区で、SD5464はごく部分的にだが検出された。溝の幅は60～100cmで、本発掘区の他の溝と比べると、規模はかなり大きい。また、この拡張区の1mほど北側には、南側溝の遺存地割ともみなせる稲田用水路が流れている。しかし、坪境小路両側溝の心々間距離を、かりに大きめにみて20大尺（約7.1m）と仮定しても、SD5464の心は推定南側溝心の国土座標値（X＝145,886.3）から、さらに5.5mも南側に位置する。したがって、SD5464を坪境小路の南側溝とみなすことはできない。なお、このSD5464の埋土を掘り込んだ井戸SE5468の抜取り穴も、拡張区の西北隅で検出された。この井戸は、奈良時代末期以降の遺構と考えられる。

3　遺物

出土遺物は、瓦塼類が大半を占めている。軒瓦は、表9に示したように、総計15点出土した。このうち、軒丸瓦が9点、軒平瓦が6点を数える。大半が平城宮出土軒瓦編年Ⅱ～Ⅲ期の型式で、15点中14点までが遺物包含層から出土した。残りの1点は、トレンチ北端の落ち込みSX5474から出土した6667A型式（Ⅱ－1期）の軒平瓦である。

表9　第202－9次調査出土軒瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	点数	時期	型式	点数	時期
6138－B	1	Ⅱ－2	6663－C	1	Ⅱ－2～Ⅲ－2
6225	1	Ⅱ－2～Ⅲ－2	6667－A	1	Ⅱ－1
6008－Aa	1	Ⅱ－2	6671－A	3	Ⅰ－2～Ⅲ－1
6311－Ba	1	Ⅱ－1	6685－A	1	Ⅱ－1（～Ⅱ－2）
6313－A	2	Ⅱ－1			
6316－Ea	1	Ⅲ－2			
不明	2				
計	9		計	6	

土器類は、既述のように、C期のSB5470柱穴から平城宮土器Ⅱ～Ⅲの土師器・須恵器が出土した。土師器は高杯、須恵器は杯A・杯B蓋・椀A・甕Cなどである。また、D期のSB5471柱穴の掘形からは、やはり平城宮土器Ⅱ～Ⅲの土師器（ⅢA）と須恵器（ⅢB・鉢A）、抜取り穴からは奈良時代後半～末期の土師器（杯B蓋）が出土している。

このほか、トレンチ北壁に近い土坑SX5473から「人米一升五□」と記す木簡が、また、その3m西にある土坑SX5472から「□六□」という墨書のある建築部材の破片が出土した。

4　まとめ

以上、発掘区の狭小さから、遺構変遷等の把握に不十分な点が多いが、出土遺物等から判断すると、上記A～Dの4期は、198次及び204次調査区のA～D期にほぼ対応するものとみてよいだろう。少なくとも、198・204次調査区の遺構と本調査区の遺構が、同じ5坪の宅地内に包含されるものであったことは、まず間違いない。ただ、両者の配置関係を知る手がかりは、今回の調査では得られていない。また、当初期待された5坪と6坪の坪境小路南側溝の有無を確認することもできなかった。この2点は、今後に残された重要な課題といえるだろう。　（浅川滋男）

4　左京三条二坊八坪の調査　　第193次Ｆ区

本調査は、百貨店建設に関連して実施した調査のうち、第193次Ｅ区(『昭和63年度平城宮跡発掘調査概報』参照）の補足調査であり、「長屋王家木簡」溝SD4750（同上概報にいうSD014）の北端を確定し、溝の完掘を目的とした。調査区は第193次Ｅ区に北接し、八坪の東辺部にあたり、面積は約55㎡。調査区の土層は盛土、耕土、床土、灰褐色砂質土、暗灰色粘土の順で、黄褐色粘土の地山に至る。盛土上面から遺構面までは約２ｍある。暗灰色粘質土および地山面上で奈良時代の遺構を検出した。奈良時代の遺構には建物１棟、井戸１基（未掘)、溝２条、土坑４基がある。

木簡溝SD4750は調査区南半で北端を検出し、幅2.4ｍ、深さ0.9ｍあり、総長が27.3ｍと判明し、完掘した。溝の端部は丸くおさまり、やや強い傾斜で立ち上がる。他の溝には注がず、またいずれからも注ぎ込まない。堆積土は４層に分かれ、遺物はおもに第１～３層で出土した。とくに第３層は木簡を大量に含む木屑層で、発掘では埋土ごと採取した。その量はプラスチックコンテナ約400箱にのぼり、木簡溝全体では約1400箱に達した。遺物には土器、瓦、木製品、木簡などがあるが、木簡は今回木札状の形をとどめるものだけでも750点出土し、これまでのところ、木簡溝全体で４万点前後にのぼる。　　（小池伸彦）

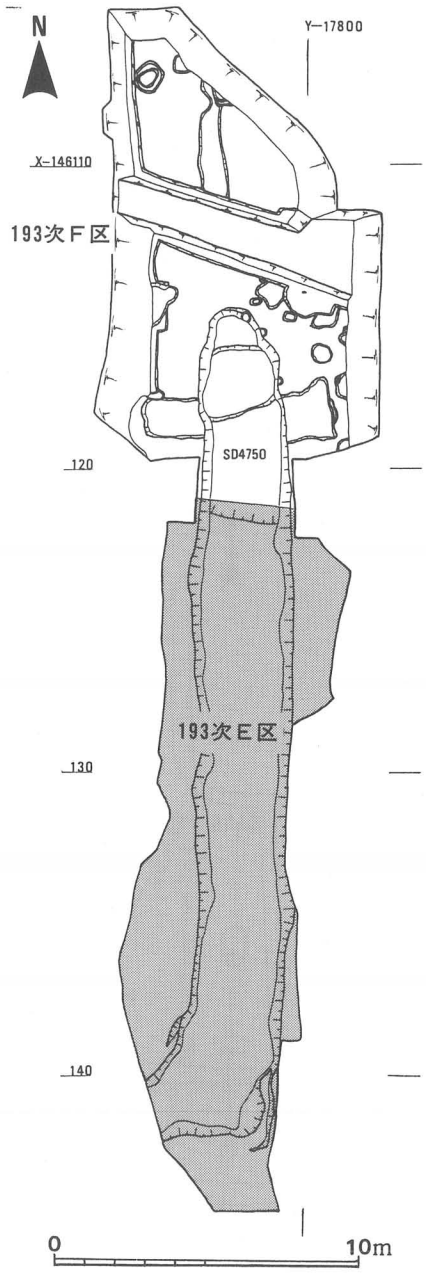


図36　遺構図（１：250）

5　左京三条二坊六坪の調査　　第202－5次

店舗付住宅建設にともなう事前調査として、奈良市三条大路一丁目634－3で発掘を行なった。期間は、1989年6月7日から7月7日までの約1カ月間で、調査面積は、敷地310㎡のうち約210㎡である。

調査地は、平城京左京三条二坊六坪にあたり、東側に隣接する特別史跡「平城京左京三条二坊宮跡庭園」と同一の宅地と考える重要な場所である。

遺構面はきわめて浅く、約25cmの耕土と10cmの床土を除去した直下の暗褐色土（整地層）上面で柱穴が見える。遺構検出は、この整地層をやや削り込み、おもに黄褐色粘土（地山）上面で行なった。

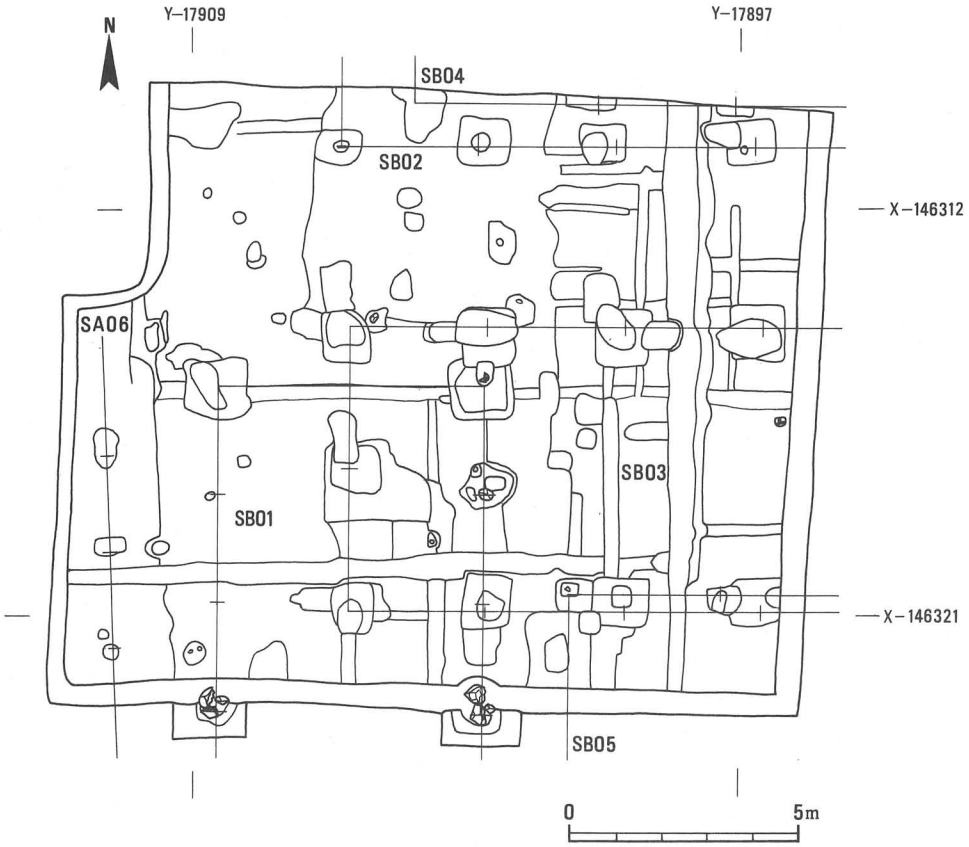


図37　第202－5次調査遺構図

検出した遺構は、礎石建物１棟、掘立柱建物４棟、塀１条、溝７条以上である（図37）。建物は柱穴の切り合い関係などから大別してＡ～Ｃの３時期に分けることができる（図38）。

Ａ期に属す建物は、礎石建物SB01と掘立柱建物SB02である。SB01の柱位置については、礎石の残る個所はなく、根石の残存するところが３カ所と、根石の抜取り穴が辛うじて見つかったもの１カ所で、他は痕跡がなかった。しかし、残存する根石の位置からみると、桁行柱間2.4m、梁行柱間３ｍ（10尺）の南北棟であろう。その規模は、３間以上×２間で、東西に庇はない。根石は、30～50cmと大きい。なお、北妻の両隅柱の一間北には掘立柱の柱穴がそれぞれにある。礎石隅柱との柱間隔は、同じく2.4mで、柱筋もよく通ることからみると、庇か縁などSB01に付随するものと考える。

掘立柱建物SB02は、調査区の北端で検出した柱穴で、東西に３間分ある。これはその位置からみて、宮跡庭園内で検出しているSB1571の南側柱の西延長にあたる。以前の成果と合わせると、SB1571は東西５間となり、東側にあ

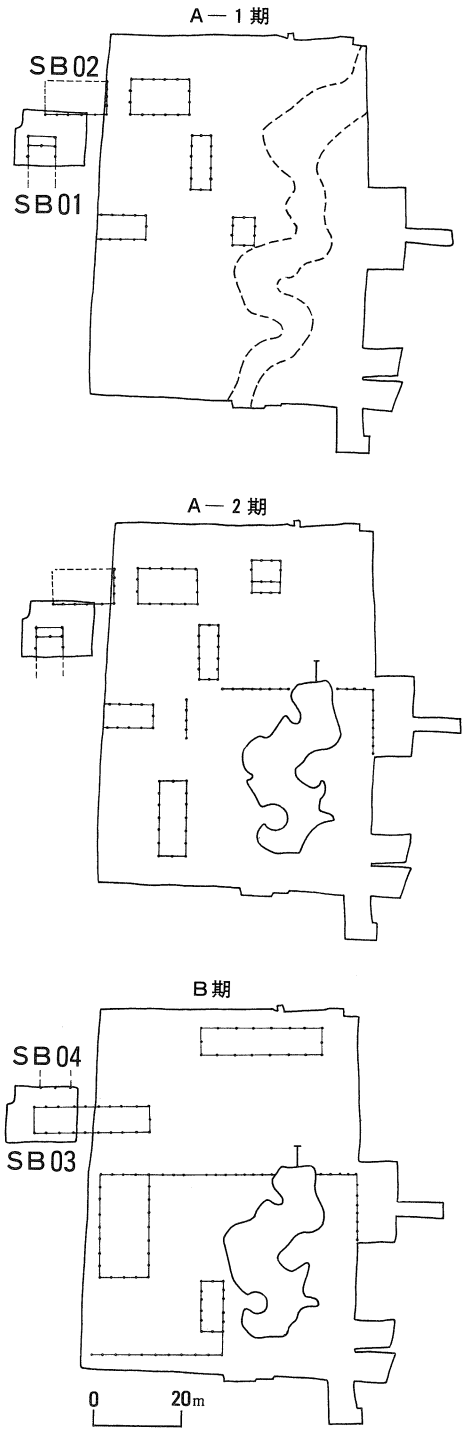


図38　左京三条二坊六坪の遺構変遷図

るSB1570と同規模の建物であることが確定した。柱間寸法は桁行3.0m（10尺）である。

B期に属す建物は、掘立柱建物ＳＢ03である。調査区の中央に検出した東西棟で、調査区内では桁行３間、梁行２間ある。この建物は位置からみて、宮跡庭園で検出しているSB1574の西延長にあたる。これによりSB1574は東西９間の長い建物であることが判明した。柱間寸法は各間とも３ｍである。この建物の北側柱西第２柱穴が礎石建物01の東北隅掘立柱と切り合っており、前後関係がわかる。

C期に属す建物は、掘立柱建物SB05である。調査区東南隅で、２個の柱穴がSB1574と切り合ってみつかっている。規模などは不明であるが、宮跡庭園内でみつけていない点からみて、南北棟の北妻の妻柱と西隅柱であろう。柱間寸法は、3.3m。建物としては他に、調査区北端で辛うじて検出した掘立柱建物SB04があるが、B期に属すか、C期に属すかは不明である。３個並んだ柱穴のうち、西の柱間が広いことからみて、西庇付南北棟の可能性がある。建物以外の塀、溝などについては時期を限定する手がかりもなく、性格も不明である。

遺物は少なく、軒瓦４点（軒丸瓦6284、6134－Ｂ、軒平瓦6675－Ａ、6721）のほか、若干の須恵器、土師器が出土した程度である。

遺構の各時期の年代については、遺物からの直接の手がかりがないので、宮跡庭園の変遷に準拠しておくと、Ａ期は、奈良時代前半（Ａ－１）から後半（Ａ－２）にかけての時期、Ｂ期は、奈良時代後半、Ｃ期は、奈良時代のおわり頃と推定できる。

今回の調査によって、発掘前の予想通り、この一画が特別史跡「平城京左京三条二坊宮跡庭園」遺跡の続きであることが改めて確認でき、遺構の残存状況もきわめて良好であることがわかった。また、奈良時代前半の礎石建物が新たに見つかったことは、庭園を築く以前からこの一帯がきわめて重要な場所であったことをうかがわせるものである。（田辺征夫）

6　右京三条一坊十五坪の調査　　第202－3・4次

1　はじめに

第202－3次調査は集合住宅建設に、第202－4次調査は店舗（ガソリンスタンド）建設に伴う事前調査である。両調査地は奈良市二条大路南5丁目（尼ケ辻北交差点北東）にあって、位置が近接しており、右京三条一坊十五坪の西南部分にあたる（図39）。調査期間は第202－3次調査が1989年5月15日から6月8日、第202－4次調査が同年5月22日から6月29日までである。近接した場所での調査ではあるが、かなり様相を異にしており、これまでのところ遺構の上でまとまらないため、個別に遺構の概要を記すことにする。

2　遺　　構

第202－3次調査

東区は面積が192㎡あり、十五坪の中央やや南より、西区はその西約22mのところに位置し、面積が15㎡である。西区は面積も狭小であり、とくに取り上げる

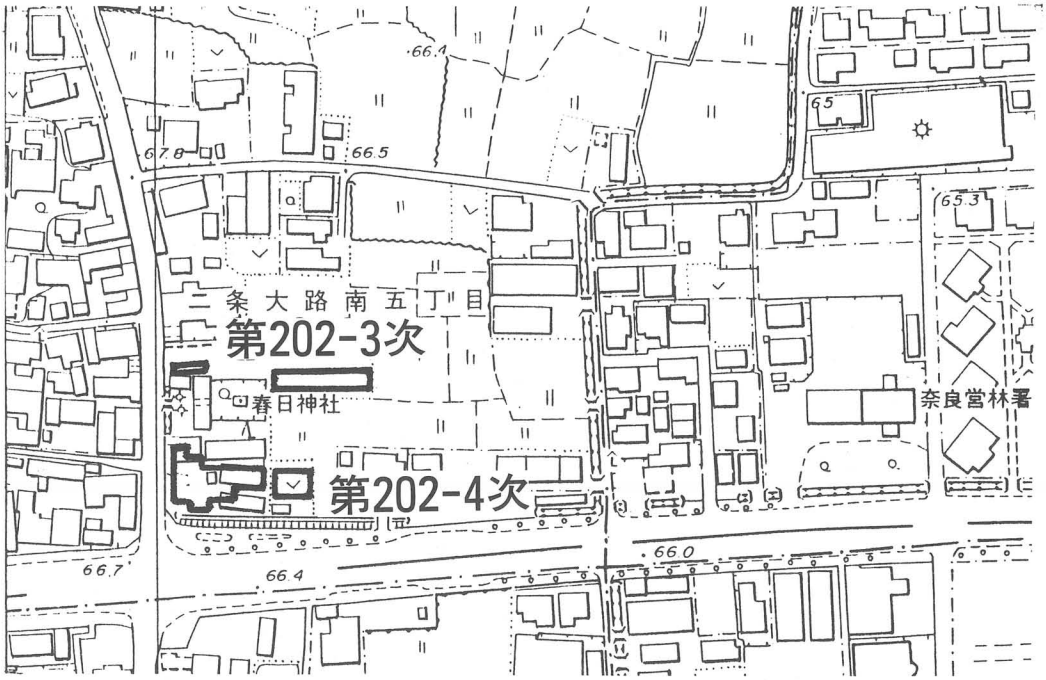


図39　第202－3・4次調査位置図（1：2500）

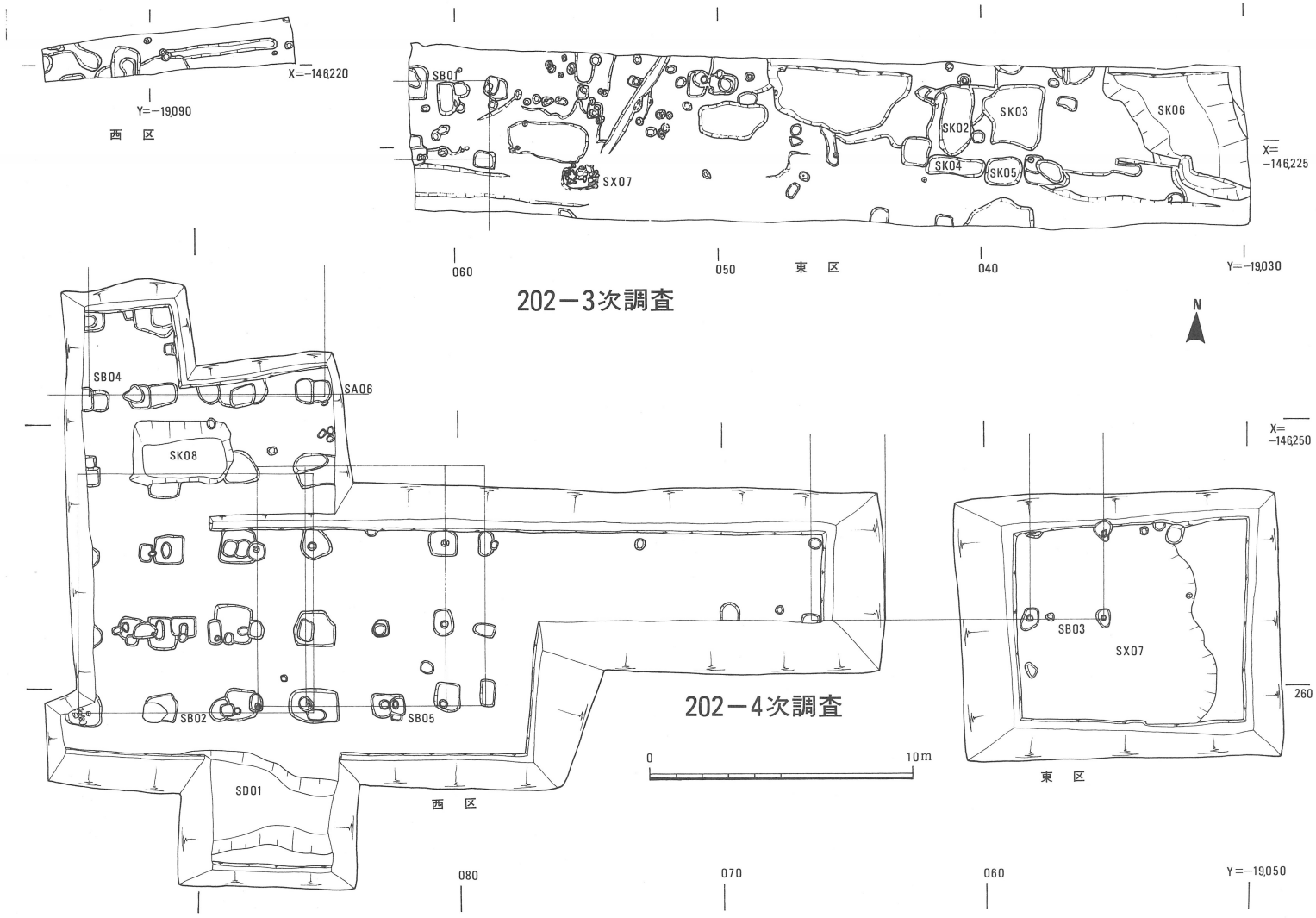


図40　第202－3・4次調査遺構図（1：250）

べき遺構はなかった。したがって、以下東区について述べる。

東区の層序は、盛土、耕土、旧耕土、暗灰褐色砂質土（炭、焼土を多く含む）、黄灰色粘土（地山）であるが、南半部は全体に掘り下げられて室町時代頃の瓦器を含む黄褐色土で埋められている。また、東半部は、西の京をはじめ平城京右京でよくみられる中世の粘土採取穴（SK 02～06）によって攪乱されている。奈良時代の遺構としては西半部で柱穴を7個（調査区南壁西端で断面を検出したもの1個を含む）検出したのみである。このうち西端部の5個の柱穴はおそらく一連のもの（SB 01）と思われるが、これだけでは建物の形状・規模を知りえない。

なお、調査区西半部には多量の鉄滓が出土した小穴群があり、また、その南には鉄砧石を支える根石とみられる石組遺構SX07がある。層位からみて、いずれも近世ないし近代の小鍛冶に関連する遺構である。

第202－4次調査

調査地は十五坪の南西隅にあたる。面積は東区が72㎡、西区が185㎡である。調査以前は水田を埋め立てた住宅地であり、その際の盛土が約70cmにおよぶ。以下、土層は耕土、床土、灰褐色粘質土、灰緑色シルトの順に堆積しいる。遺物包含層（灰褐色粘質土）は削平されてほとんど残っておらず、床土直下の灰褐色粘質土ないし灰緑色シルトの上面で遺構を検出した。盛土上面から遺構面までは約90cmある。なお、灰緑色シルトの下層には、砂礫層が厚く堆積し、この付近が秋篠川の旧流路、ないしは氾濫原であると推定できる。

おもな検出遺構は、奈良時代の掘立建物4棟、掘立柱塀1条、溝1条、流路1条があり、その他に近世以降の土坑1基などがある。奈良時代の遺構は3時期に大別でき、以下、時期別に述べる。

A期　東西溝SD01は調査区の南縁に位置し、幅約3m、深さ約50cmあり、堆積土は上から茶褐色粘土（埋め立て土）、灰色砂、灰褐色粘砂の順である。自然堆積により大部分が埋没した段階で埋め立てられている。地形からみて西流する溝であり、平面形がやや不整形であることから、自然流路であると考えられる。堆積土中からは奈良時代初期の須恵器、土師器が出土しており、その頃に埋めら

れたものである。

B期　SD01を埋め立て、坪を宅地として利用する。建物SB02・03・04がこの期に属し、さらに2時期に細分できる。SB02とSB03は柱筋を揃えており同時期とみてよいが、SB04はSB02よりもわずかに東寄りに位置しており、時期を異にする。ただし、両者の前後関係は不明である。

総柱建物SB02は桁行3間、梁行3間あり、柱間寸法はそれぞれ3.0m等間。柱掘形が大きく、最大のものは1.6×1.5mの規模をもつ。ただし、柱穴の上部は大きく削平を受けており、本来の深さは不明。また、北妻柱の一部が土坑SK08により壊されている。SB03は東区と西区にまたがって検出した南北棟建物で、東西に庇を伴うのであろう。桁行は、全体の規模が不明であるが、柱間寸法が3.3mであり、梁行は4間で、柱間寸法が2.8m。総柱建物SB04は、SB02と同じ柱間寸法をもち、その位置や柱掘形の規模などからみて、SB02と同規模、同構造の建物とみなせる。

C期　SB02・03・04が廃絶し、SB03の跡には流路状の窪地を造る。西側では、建物SB05、SA06を建てる。

SB05は桁行3間、梁行4間の南北棟建物で、東西に庇がつく。柱間寸法は、身舎の梁行が2.7m等間、桁行が3.0m等間、庇の出は東が1.5m、西が1.8mである。ＳＢ05の北妻柱から北へ3.0mの位置に、東西塀SA06がある。柱間はほぼ3.0m等間である。流路状の遺構SD07は、東岸のみ検出した。西岸は東西両区の間にあると推定できる。深さは20～30cmあり、堆積土は灰色粘土を主体としており、常時、滞水状態にあった。出土須恵器から奈良時代後半期に属する。また、東岸付近の粘土層中から平瓦数点がまとまって出土した。

3　遺　　物

遺物には奈良時代の土器、施釉陶器、瓦、14世紀末から15世紀初めの瓦器（202－3次調査区出土）、近世以降の鉄滓などがある。施釉陶器は、流路状遺構SX08底部で二彩壺台脚片が出土した。瓦には、新型式として202－3次調査東区黄褐色土出土の軒丸瓦6320Ac（図41－4）がある。これは6320Abの中房の蓮子

を大きく彫り直したものである。

4　まとめ

以上述べてきたように、202－4次調査では、従来右京域においてあまり例をみない大型の柱掘形をもつ総柱建物を検出し、また、常時滞水状態にあった流路状の遺構を検出するなど、注目すべき成果が得られた。流路状の遺構は曲池などの可能性もあり、今後の調査において注意すべき点である。

また、この付近は「三条小鍛冶」の伝承地であり、近世以降の小鍛冶の遺跡であるとされてきた。今次の調査でも多量の鉄滓が出土し、時期は明確でないが石組遺構など作業場の一画を検出した。これらの遺構は比較的残りがよく、石組遺構の近辺に小鍛冶炉の存在が予想できる。　　（小野健吉、小池伸彦）

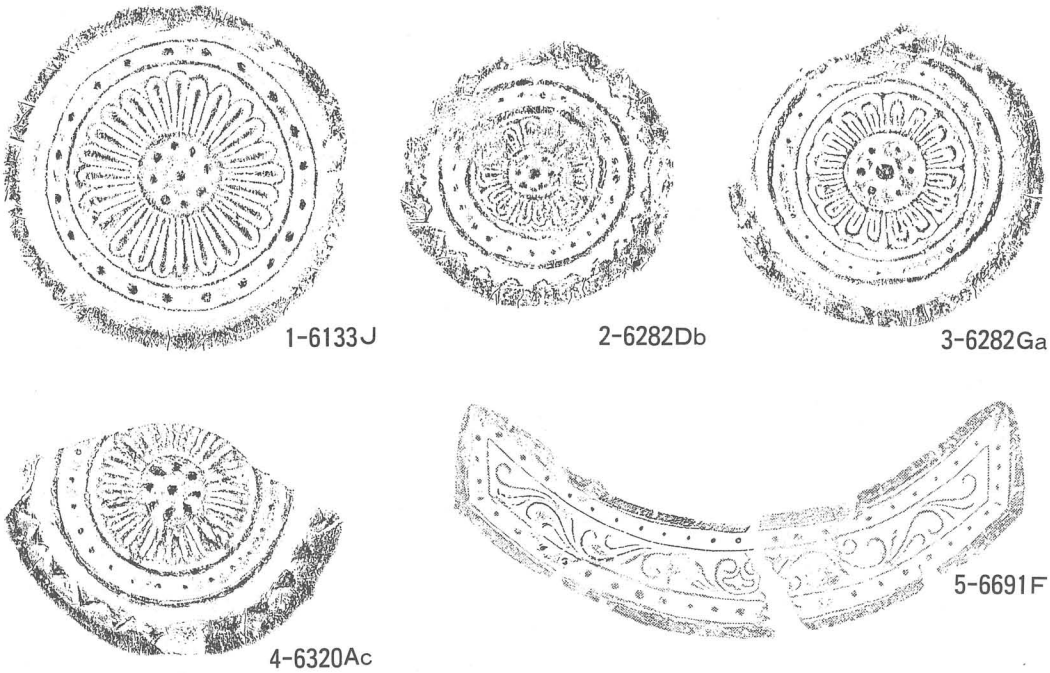


図41　第202－3・4次調査出土軒瓦（1：4）

7　右京三条一坊九坪の調査　　第202－11次

平城宮南辺の水路付け替えにともなう事前調査である。宮の南面西門である若犬養門の西南で、二条大路南側溝と西一坊坊間路の西側溝の合流地点の南に接する位置に発掘区を設定した。基本的な層序は、整備の際の盛土約70cm、耕土約30cm、床土約10cmで、ほぼ発掘区中央を境にして南半は床土直下が灰白シルトの地山となり、北半は床土の下に約40cmの遺物包含層があり、地山にいたる。

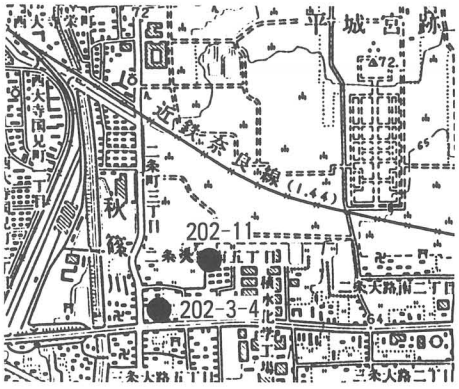


図42　第202－11次調査位置図（1：25000）

検出したおもな遺構は、掘立柱建物1棟、塀3条、南北溝1条、弥生時代の土坑と溝3条などであり、当初想定していた西一坊坊間路西側溝は検出できなかった。

掘立柱建物SA01は掘形が1辺約80cmで、方位がほぼ北に揃うが、建物規模は不明である。SB02は北で東に振れる溝で、溝幅は不明ながら深さは約40cmである。溝の北端は近世以降の池状の落ち込みで確認できない。遺物をほとんど含まず、年代を推定しえない。

発掘区中央の土坑と東半の3条の溝はいずれも弥生時代後期の土器を含む遺構である。SD07を一部掘り下げたところ、溝の深さは遺構面より70cmあり、整理箱2箱分ほどの土器が出土した。平城宮西南隅付近では、弥生時代の集落が発掘されているので、一連の遺構である可能性がある。

西一坊坊間路の側溝はこれまで第141－4次調査（右京三条一坊八坪）で東側溝を、第149次調査（右京八条一坊十坪）で東西両側溝を検出している。第149次調査では道路の幅が溝心心で24.55mあり、その中心と若犬養門の心の座標値から、この道路が北で西に0°21′40″振れていることを確認するとともに、西側溝が幅約10m、深さ約1.5mの規模をもち、西の堀河として機能していた可能性のあることを明かにした。本調査は第149次調査で検出した西側溝の北延長上に

あたる。仮に同じ坊で確認した第141－４次調査の東側溝の心から24.55m西を測れば、Y＝18866.183mとなり、発掘区の東半に溝の心がくるはずである。ところが発掘の結果、同溝がここに存在しないことが明かになったため、今後の周辺の調査によって溝の行方を探ってゆく必要がでてきたと言えよう。（寺崎保広）

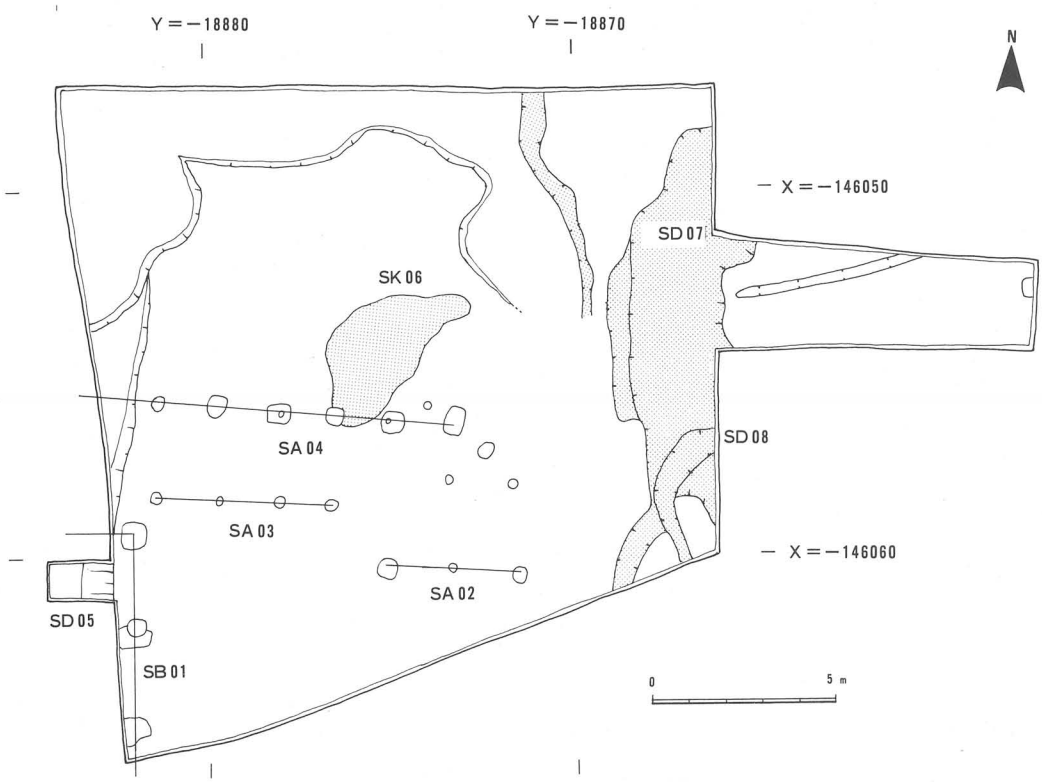


図43　第202－11次調査遺構図

8　薬師寺東面回廊の調査　　第207次

1　はじめに

奈良、西の京に伽藍復興のすすむ薬師寺については、これまでにたび重なる発掘調査が行なわれてきている。1954年の南大門、中門、南面大垣の調査をはじめとして、金堂、食堂、回廊、西塔、僧房、十字廊、経蔵などの中枢部分の伽藍建物の地下遺構を調査することによって、薬師寺の歴史を解明する上で、多くの重要な事実が明らかにされてきている。そのうち、1985年までの成果については、『薬師寺発掘調査報告』にまとめられ、公刊されている。

薬師寺の回廊は、中門から発して、金堂と東西両塔を囲む形で講堂にとりつく。回廊の建物は現在遺存していないが、薬師寺では伽藍復興計画の一環として、金堂、僧房、西塔、中門に続いて、回廊の再建を計画した。

回廊に関しては、表10に示すように、すでに数次にわたる発掘調査が実施されている。その成果にもとづいて回廊全体の規模や構造についての復原が試みられているが、とくに東面回廊の規模については、まだ不確定の部分が残されている。回廊に関するこれまでの成果を要約すると、

①回廊は、当初、単廊で計画され、礎石を据えつける工程まで工事がすすんでいた。単廊の規模は、東、西面回廊については30間で、柱間寸法は桁行、梁行とも12.5尺・3.7mである。

②しかし、単廊は基壇の完成に至る前に計画変更され、同じ位置で複廊が造営される。

③複廊の規模は、南面回廊では桁行13.7尺（13.5尺）、梁行10尺等間である。東面回廊については、

1968・69年の調査……桁行14尺、梁行10尺等間で、東面回廊全体の柱間数は24間である

1985年の調査……桁行13.7尺、梁行10尺等間で、柱間数は25間である

とされ、桁行の柱間数と寸法の所見が変っている。いっぽう、1988年の西面回

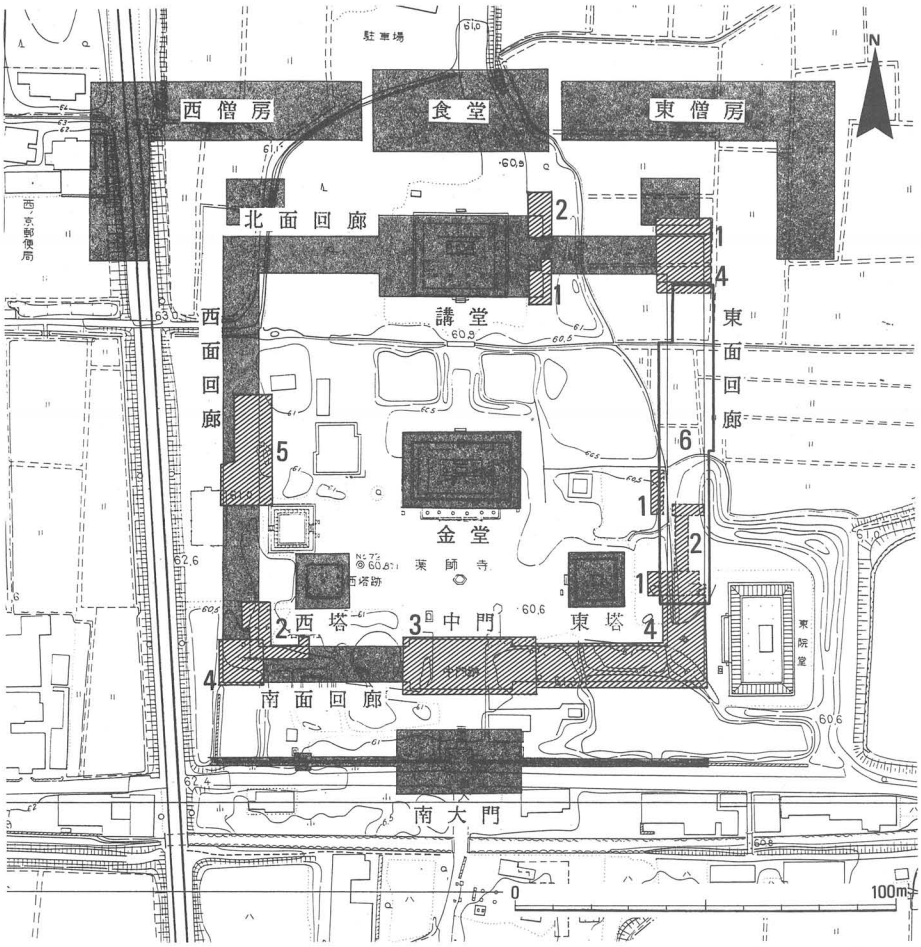


図44　第207次調査位置図（1：2000）

表10　回廊調査一覧表

区	年度	調査場所		文献
1	1968	東面回廊	北面回廊	1）4）
2	1969	東面回廊	北面回廊	1）4）
3	1982	南面回廊	中門	2）4）
4	1985	東面回廊	西面回廊	3）4）
		南面回廊	北面回廊	
5	1988	西面回廊		5）
6	1989	東面回廊		

1）杉山信三・松下正司・阿部義平「薬師寺の最近の発掘調査」（『仏教芸術』74 1970）　2）奈文研「薬師寺中門の調査」（『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983）　3）奈文研「薬師寺回廊の調査」（『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報1985）　4）『薬師寺発掘調査報告』（奈文研学報第45冊　1987）　5）奈文研「薬師寺西面回廊の調査」（『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1989）

廊の調査では、金堂の西方で、桁行14尺、梁行10尺等間という結果が得られている。

あとで詳述するように、『薬師寺縁起』によると、西面回廊25間、東面回廊24間と伝えられており、文献史料の上からは、寺院建築としては異例な、東西で柱間数が異なるという構造であったということになる。『薬師寺発掘調査報告』では、この点に関して、文書の書写に際しての写し誤りであり、東面回廊も25間であったとする見解が示されたのである。

④東面単廊は、隅部を除いて28間、外側柱通りで30間となる。柱間寸法は、単位尺を金堂と同じ0.297cmとすると、桁行、梁行ともに12.5尺。

⑤回廊の建物は、多くの堂舎とともに、天禄4年（973）の大火災で焼失したのち、再建された。『薬師寺縁起』によると、11世紀のはじめには再建が完了したらしい。

⑥西面回廊の調査で出土した軒瓦をみると、平安時代までの瓦に比べ、中世以後の軒瓦が著しく少ない。これは康安元年（1361）の大地震で「中門、回廊ことごとく転倒する」（『中右記』および『嘉元記』）とあるので、そののち再興されなかったことを物語っているものと考えられる。

今回の調査は、これまでの調査で未解決の問題、とくに柱間数や柱間寸法を明らかにすることをおもな目的としており、また、回廊全体が復興される計画であることから、以前の調査地と一部重複させて、東面回廊全域の地下遺構を確認できるように調査範囲を設定した（図44）。

3か月にわたる調査の結果、複廊礎石の抜取り穴のほとんどを検出し、複廊の礎石を据えつけるための穴（掘形）や単廊の礎石据付け掘形の一部も確認した（図45）。基壇の両側には、基壇外装の凝灰岩切石列が残り、その外側には、遺物をまじえた土砂が堆積していた。

2　遺　　構

調査地の南半部は、東塔と東院堂のそばということもあり、長く境内地であり、北半部は1960年代まで水田として利用されていた。調査地全域にわたり、近年の

境内整備にともなう整地土が厚く置かれており、東塔の北東側では松の巨木の切り株が整地土の下に埋没していた。

南北およそ100mの長さの調査区のうち、中ほど3分の1の範囲は、近年まで松林であったこともあってか、遺構の保存状態が比較的良く、遺構検出面は現地表下60cmであった。それに対して、南端近くでは90cm、北3分の1では地表下1m前後であり、回廊の遺構はかなり破壊されていた。

(1) 複　廊

柱間　東面回廊（複廊）の柱位置については、1968・69年および1985年の調査で、回廊東南コーナーの2間を含めて11間分がすでに確認されていた。今回の調査では、東南入隅から3間目の礎石据付け掘形から北東入隅まで、一部削平されて遺存していなかったものの、ほぼすべての柱位置を確かめることができた。このうち、南から15間目までは、基壇の残りが良かったことから、礎石抜取り穴が遺存しており、16間目以北は、礎石据付け掘形を検出した。

礎石抜取り穴は、平面形が不整円形を呈する、直径1～2mのすり鉢状の穴で、多くの場合、底に人頭大の自然石が根石として固定されていた。北半部では、回廊基壇の跡が後世の耕作行為でかなり破壊されており、礎石抜取り穴も削平されて遺存していないが、礎石を設置する際の礎石据付け掘形が確認された。これらの掘形は一辺が1.2～2.0mの隅丸正方形ないし長方形を呈する。掘形の本来の深さは60cmほどと推定され、中は粘質土や砂質土を5～10cmの厚さで互層に埋めている。

今回の調査により、東面回廊（複廊）の柱間数が24間であることが確定した。柱間寸法については、不確定要素が残るが、東南入隅から15間分と、北端5間が14尺（4.14m）等間で、16間目から19間目までの4間は17尺、14尺、16尺、16尺であったと推定され、部分的に広い柱間が設定されているという異例の様相をみせている。柱間寸法の問題に関しては、単廊の計画変更とも関連するので、あとで再論する。なお、梁行の柱間寸法は10尺（2.96m）等間である。

基壇幅は約10.1mあり、34尺の計画寸法であったとみられる。そうすると、基

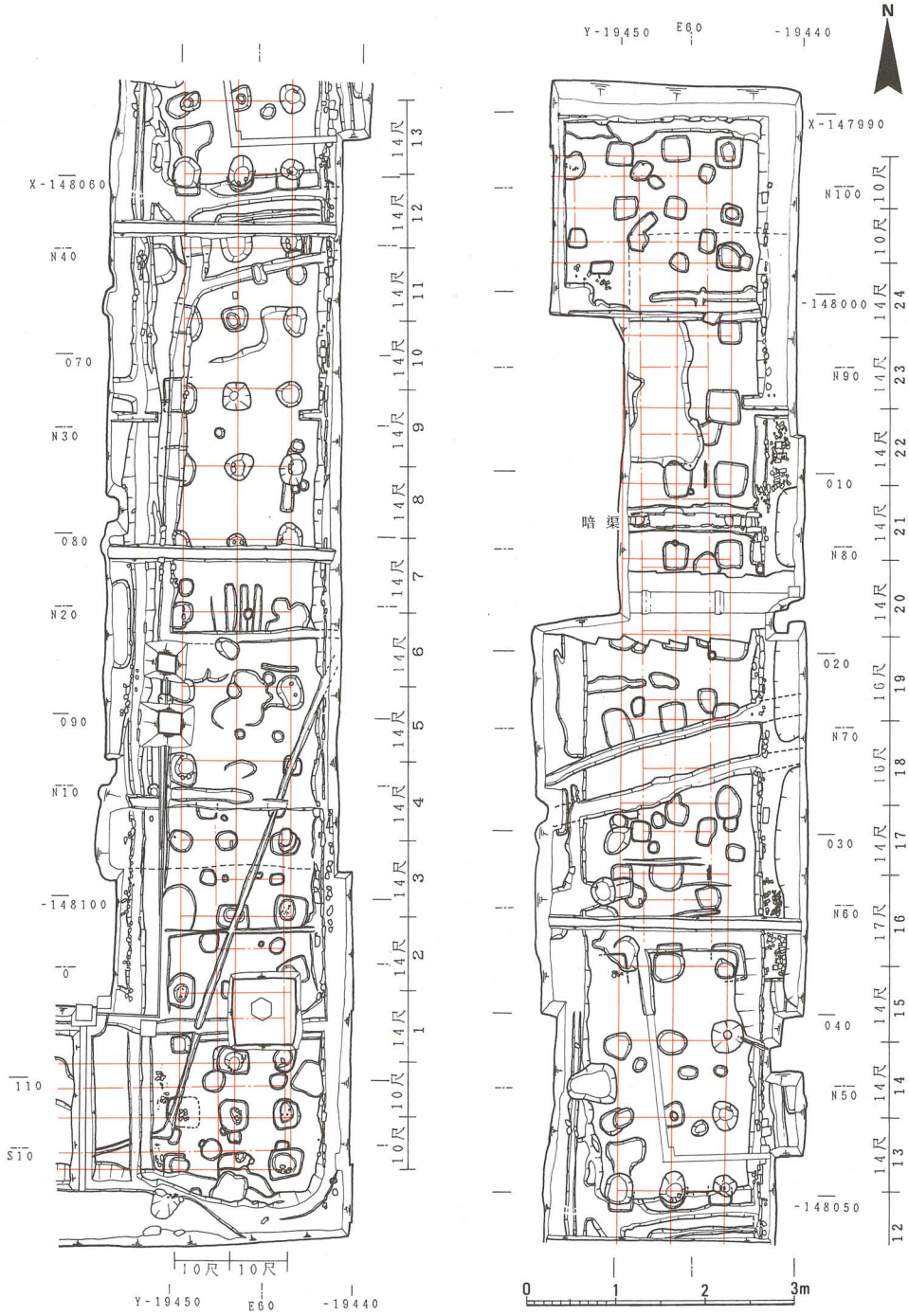


図45　薬師寺東面回廊遺構図（1：400）

壇の出は複廊の東西側柱から７尺であったことになる。

基壇外装　複廊回廊の床面は完全に削平されていた。ただし、南から11間目の、中央の柱筋（棟通り）上に30cmの長方形をした凝灰岩の切石を検出した。複廊棟通りは連子窓・下方腰壁と想定されるので、この切石中央壁下の地覆にかかわるものと判断される。

基壇東縁では、全域にわたって基壇縁辺の外装が遺存していた。基底に偏平な自然石を置き、その上に凝灰岩切石を並べるという構造をとっている。凝灰岩切石は、大半が高さ15～20cmほどで、長さは短いもので30cm、長いものは90cmにおよび、かなり細長い。前面は風蝕のために斜面になっており、この切石の真上に別の切石を重ねたとは考えがたい状況をみせている。基壇西縁では基底部の自然石はなく、複廊の南３間目、５間目それに17～19間目にかけての位置に、じかに据えつけた細長い凝灰岩切石列が遺存していた。これも前面は風蝕により、くぼんだ斜面になっている。

基壇東側の雨落溝の底から、前述した中央壁下の地覆石の上面までを測ると123cm、西側の雨落溝底からでは80cmとなる。また基壇東縁の基底部の自然石からは90cmの高さとなるが、これが造営当初の基壇高と考えられる。基底部とその上の凝灰岩切石の高さは、合せても25cmくらいであり、より上の部分の基壇外装についてはよくわからない。ただ、ところどころに、幅が50～90cm、高さが、大きいもので48cmを測る方形の凝灰岩切石が、基壇縁下に倒れている。この切石の本来の上端とみられる部分も風蝕で丸くなっており、48cm＋αcmの高さであったとすれば、これを羽目石とみることも可能である。しかし、その場合、地覆石としての細長い凝灰岩切石との重なりがほとんどなく、通常の基壇外装の構造とは異なっている（図46）。

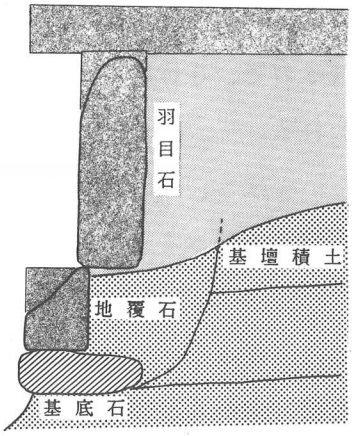


図46　東面回廊基壇外装復原図

雨落溝および基壇造成　基壇の両側には雨落溝がある。西側の雨落溝は浅くしか残っていない。南から

6間目付近では幅1m、深さ20cm前後であるが、この場所に限って、溝底に敷設した敷石が数点残っていた。その中に、軒丸瓦の瓦当部を敷石の替りに利用したものがある。これは丸瓦部をほぼ完全に残している新型式の軒丸瓦で、瓦当面の直上に13～14世紀の瓦器片が堆積していた。この新型式の軒瓦は、11世紀頃のものと考えられる薬師寺軒瓦53型式に似ているものの、瓦当文様はそれよりもしっかりしており、より古い時期の所産と思われる（図48－2）。

複廊の南4～6間目および11間目、13～14間目にかけての基壇西側では、雨落溝の外（西）縁を護岸する玉石列が部分的に残っていた。この玉石列は前記の溝底敷石と一連の施設とみられる。これまでの薬師寺における調査の所見から、造営当初は外側縁石も凝灰岩であったと推定されるので、玉石列の雨落溝は後補のものと考えられる。複廊の南から16間目で確認した土層の断面をみると、造営当初の地盤面は、西（回廊内側）から東（外側）に約40cmの高低差で傾斜していたことがわかる。基壇東側の地盤が低いわけであるが、複廊基壇外装の下端のレベルで比べると、東側が西側より18cm低いだけにすぎず、基壇築成に先立って、傾斜面を緩かにするような整地工事を行なったものと考えられる。

基壇東側には深さ40cm、幅150cm（推定）の雨落溝がある。基壇西側の雨落溝と比較すると、かなり規模が大きく、溝底のレベルは40cmから70cm低くなっている。また、基壇外装の基底部下端よりもさらに30～50cm低い。後述するように、東雨落溝が埋没しはじめるのは10世紀の終りから11世紀にかけての時期と考えられるので、8世紀初頭の造営以後2世紀あまりの間にかなり浸食されたものと思われる。

いっぽう、東回廊基壇の南北方向の高低差は、造営後の浸食作用が比較的微な基壇西側でみると、調査区の南端と、そこから50m北の地点とで、わずかに4～5cmしかない。基壇上面については不明であるが、少なくとも回廊の内側の境内地は、ほぼ水平な地面に造成されていたと推察される。

暗渠　南から21間目のほぼ中間位置で、回廊基壇を横断する暗渠を検出した（図47）。内側の幅は45cmある。凝灰岩切石を組んだもので、底石と側石の一部は遺

存しているが、蓋石は残っていない。これは回廊の廃絶後、基壇部分がかなり削平されたのちも、開渠として利用されていたことによるものと推測される。

構築の方法は、基壇をある程度まで築成した段階で、120～160 cm 幅の掘形を掘削し、その底面に厚さ10 cm弱の凝灰岩切石を置いて底石とし、両側に側石を立てている。側石の内面は流水による浸食のために大きくえぐれている。底面のレベルは、西から東へさがる緩かな傾斜面につくられており、東端の出水口と、そこから西に７ｍの地点とは30 cmの比高差がある。

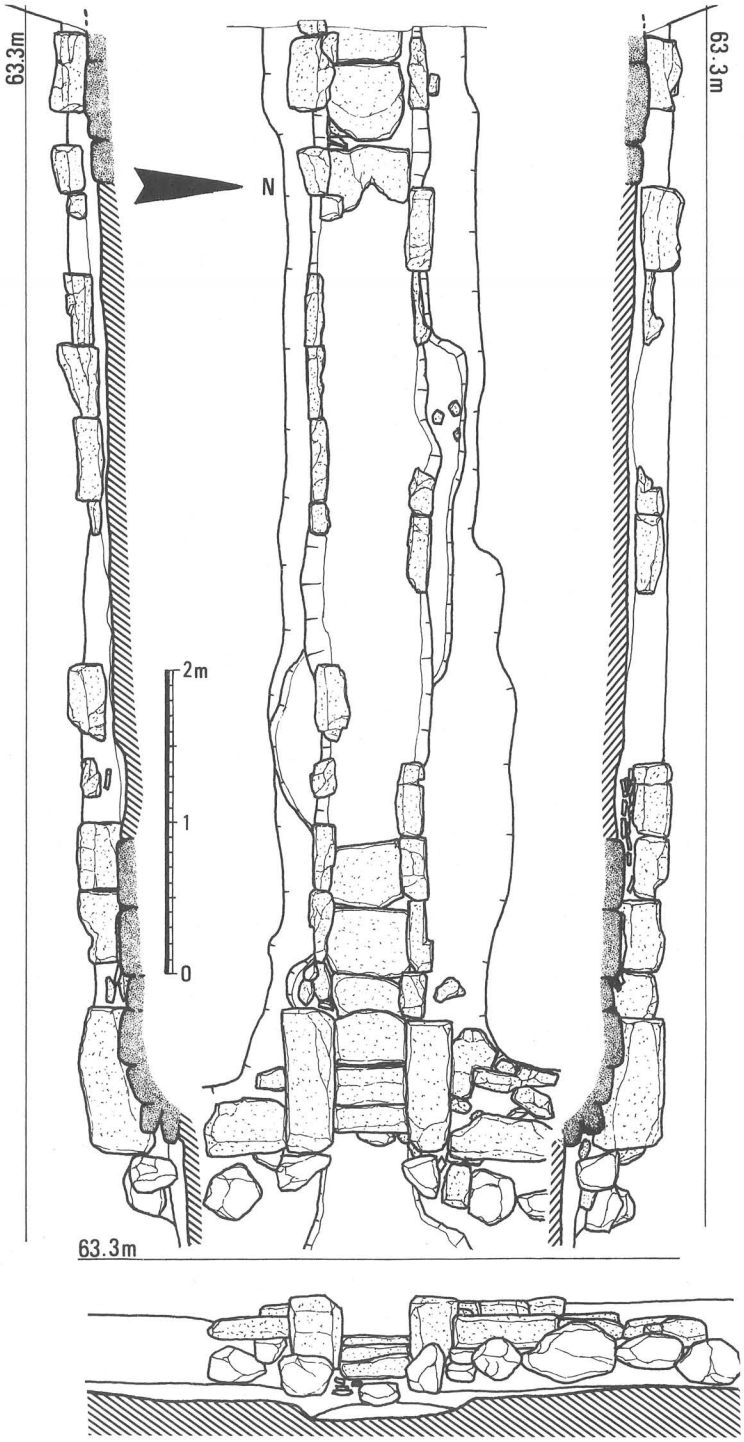


図47　東面回廊基壇の暗渠実測図（１：50）

(2) 単　廊

最初に述べたように、薬師寺の回廊は当初、単廊として計画されていた。造営がかなり進んだ段階で工事は中止され、新たに複廊がつくられることになったのであるが、今回の調査でも単廊にかかわる遺構を検出した。

1985年の調査で明らかにされているように、単廊の基壇は完成しておらず、東西両側縁は斜面のままであり、その上を覆うように複廊の基壇が築成されている。したがって、基壇の遺存状態の良い場所では、単廊の遺構は、さらに下位に埋っており、複廊の遺構の保全を顧慮して、単廊の検出は部分的なものにとどめることにした。南から17間目以北の基壇面の削平の著しい範囲では、単廊の礎石据付け掘形を検出した。掘形の平面形は70×150cm前後の不整楕円形を呈し、複廊の礎石据付け掘形にくらべると、かなり小規模で形状が一定していない。

柱間　『薬師寺発掘調査報告』では、単廊の柱間数、寸法について次のように推定している。

「単廊の東面長さは、棟通りで106.9mある。柱間寸法を12.5尺等間で29間とすると天平尺362.5尺（1尺は29.49cmに当る）、外側柱通りで30間、375尺となる。」

ところが、中門と講堂の位置関係に関する部分では次のように記述されている。

「中門と講堂の心心間は107.6m、ほぼ天平尺360尺（大尺300尺）に近く、回廊の柱間寸法と合わせたとすれば、単廊12.5尺の柱間が29間、362.5尺の計画であったことになり、1尺は29.68cmとなる。」

このように、造営計画上、同一寸法であるはずの中門～講堂心心間距離と東面回廊棟通りの長さとが、実際の遺構の上では106.8mと107.6mと若干異なっていたと報告されている。

今回の調査では、調査区を以前の調査範囲と一部重複させて設定したので、東面回廊の総長を確実に計測することができる。いうまでもなく、直径が1mをこえる礎石抜取り穴や礎石据付け掘形を基準にして、柱心の位置をセンチメートル単位まで確定することは、きわめてむずかしい。したがって、柱間寸法、あるい

は回廊の総長を求めるにあたっては、いくつかの仮定条件を前提としなければならない。

さて、8世紀はじめの頃の尺度には大尺と小尺の2種類があった。このうち大尺は土地測量専用の尺、小尺は建築設計をはじめとする、測地以外のものの計測に使用するように定められていた。平城宮造営当初の小尺の実長は、1尺が29.6cm強であったことが明らかにされているので、薬師寺の創建当初の造営尺あるいは設計寸法も、まずこの長さを基準にして考えていく必要があろう。

南面回廊の東西寸法については、『薬師寺発掘調査報告』では118.4mという測定値があげられている。これはちょうど400尺の計画寸法であり、1尺は29.6cmとされている。今回の調査では東面単廊の棟通り総長は、前記A、Bのうちむしろ B に一致することがわかった。つまり、10cm前後の不確定さはあるものの、ほぼ107.6mであったとみられる。これを1尺＝29.6cmの基準尺で換算すると東面単廊の棟通り総長は363尺であったと復原できる。

単廊の柱位置は、すべてを検出してはいないが、すでに推定されているように、両隅を除いた部分で28間、外側柱間で30間とみてまちがいない。柱間寸法は等間隔であったとみて、遺構の上での矛盾はないので、棟通り総長363尺を等分したものとみられる。その場合、1間分の柱間寸法は12.52尺（約3.71m）となる。

複廊の柱間寸法との関係について　ここで複廊の柱間寸法について再述しておこう。東面回廊では、単廊と複廊の棟通りは一致している。つまり、複廊は単廊の位置を忠実に踏襲して造営されているのであり、複廊の棟通り長さも363尺の計画寸法であったとみられる。『薬師寺発掘調査報告』では、東面回廊は隅部を除いて25間とした上で、13.7尺等間と推定していた。ところが、柱間数が25間ではなく24間であることが確定し、総長も若干長かったという新たな知見が得られた。この事実にもとずいて再検討したところ、大部分の柱間寸法は、1968、69年の調査の所見のように14尺（約4.14m）等間であるが、南から16間目から19間目までの4間分は間隔が大きくとられている。仔細に検討すると、南から17尺、14尺、16尺、16尺の柱間寸法であったとみるのが最も妥当と判断される。

単廊壁下地覆　単廊の、南から20間目と26間目の外側柱通り上に、南北方向の細長い瓦敷を検出した。いずれも10～20cm角に割った丸瓦、平瓦片を平坦に敷き並べたもので、20間目では幅35cm、長さ80cm、26間目では幅30cm、長さ160cmにわたって遺存していた。20間目の場合、単廊礎石据付け掘形を検出した面にあり、その上を複廊基壇築成土が覆っていた。2か所とも単廊の外側柱通りに一致する場所にあることから、壁下の地覆の基礎地業に関係するものと判断される。

(3)　基壇東側の瓦堆積

すでに述べたように、基壇東側には、造営時の形状をとどめていないと考えられる、深さ40cm、幅150cm（推定）の雨落溝がある。埋土は上下2層に分れる。下層は、堅くしまった砂層で、中に10世紀末から11世紀にかけての時期に属する土師器や灰釉陶器の破片がかなりの量含まれていた。

上層はやわらかい粘質土層で、多量の瓦が出土した。とくに複廊の、南から17間目と22間目の周辺では、軒先付近の屋根瓦が落下したままの状態で埋没していた。軒瓦は瓦当面を基壇側に向けて、裏返しになっており、丸瓦、平瓦がそれに重なっているという状況がみられ、屋根からずり落ちる途中で半回転したことを示している。また、これらの瓦の間から若干の瓦器片が出土したが、いずれも12～13世紀に属するものである。注目すべきことに、この瓦堆積層には、焼土や炭化した木材片が顕著にみとめられた。しかし、瓦自体が火熱を受けた形跡はほとんど認められない。

(4)　そのほかの遺構

瓦捨て穴　基壇東側には、回廊建物が倒壊した時の屋根瓦が堆積していたが、その大半の部分は、のちに大きな瓦捨て穴が掘られたことにより、残っていない。この瓦捨て穴には、おびただしい量の瓦片が埋没していた。4か所の瓦捨て穴は、いずれもさらに調査区の東にひろがる。穴はかなり深く、危険防止を配慮して完掘しなかった。出土した瓦は奈良・平安時代のものに限られるが、穴が掘削された年代については、遺構の切り合い関係から判断して、12～13世紀の瓦堆積層よりも新しいということができる。

この種の瓦捨て穴は基壇西側の、東塔の東にあたる場所でも、その一部を検出した。そこからは奈良時代の瓦のほか平安および鎌倉時代の軒瓦が出土している。

道路遺構　複廊の、南から18間目にあたる位置で道路の跡を検出した。調査区内では、ほぼ直線状に通っている。東で北に約17度振れる方向に延びる東西道路で、幅が50～130cmの両側溝をともなう。側溝心心間距離は2.5～2.7mであり、路面幅は、狭いところで1.6m、広い場所では2.0mをはかる。路面の表面は堅くしまっており、もともとの道路面がそのまま残っているものとみられる。

この道路をまっすぐ西のほうに延ばすと、40m足らずで金堂の北東の隅に行きつく。参道、あるいは寺内道路の１つであったと思われる。存続の時期は特定できないが、前記の瓦捨て穴が埋ったあとに設けられたものであり、江戸時代の絵図には描き表わされていない。

浄水用水溜め桶　複廊の南から14間目の北の柱位置とちょうど重なる場所に、長径200cm、短径175cmの平面が楕円形をした掘形を検出した。中央に直径48cmの桶が埋っており、底の深さは、遺構検出面から80cmであった。桶の中の埋土には瓦片が多く含まれ、明治18年発行の「半銭」銅貨が出土した。また、桶のほぼ中央に、廃絶する際に〝息抜き〟として立てられた細い竹筒が一本残っていた。この桶の東側から、直径６cmの竹筒が、東南東方向に埋設されていた。桶との接合部分は、桶も竹筒も腐蝕しており、つまびらかでない。井戸かとも考えられたが、枠内にはほとんど自然湧水がない。

地元の古老の談話によると、西方から水を桶に引きいれて、しばらく浄化させてから、東方の集落に上水を送っていた水道施設がかつてこの近辺にあったらしい。そうしたことから、この桶と竹筒をともなう遺構は上水施設であったと考えられる。

近世の排水用溝　複廊の、南から５～11間目の基壇上の西縁に沿って、幅50cm前後の南北溝があり、６間目と10間目および11間目で東方に分流している。７間目の位置では、溝の両側壁を、さしわたし30～50cmの自然石で護岸している。この溝は基壇外側が完全に埋没したあとに、また、基壇面が現状まで削平されてから

設けられたもので、溝の堆積土からは磁器片や「寛永通宝」銭が出土した。近世に機能していた境内の排水にかかわる溝と考えられる。

3　遺　　物

調査区の全域から大量の瓦が出土した。これらの多くは東面回廊に使用されていたものと推察されるが、調査区の一部が東塔に接近した位置にあることや、基壇周辺に多くの瓦捨て穴が掘削されているので、ほかの堂塔で使用されていた瓦も少なくあるまい。瓦のほかには若干の土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器などの土器類があり、金属製品にはいくつかの鉄釘や、瓦捨て穴の一つから出土した2点の垂木先飾金具がある。

軒　瓦　出土した軒瓦は、軒丸瓦257点、軒平瓦256点におよぶ（図48）。そのほかに鬼瓦7点、隅切瓦1点、面戸瓦1点、鳥衾3点がある。軒瓦の内わけは表11に示したとおりであるが、薬師寺創建の軒丸瓦6276Aa・Ab型式、軒平瓦6641G・H・I型式が多数を占める。

1988年の西面回廊の調査区と比べると、中世以降の軒瓦の比率が高い。

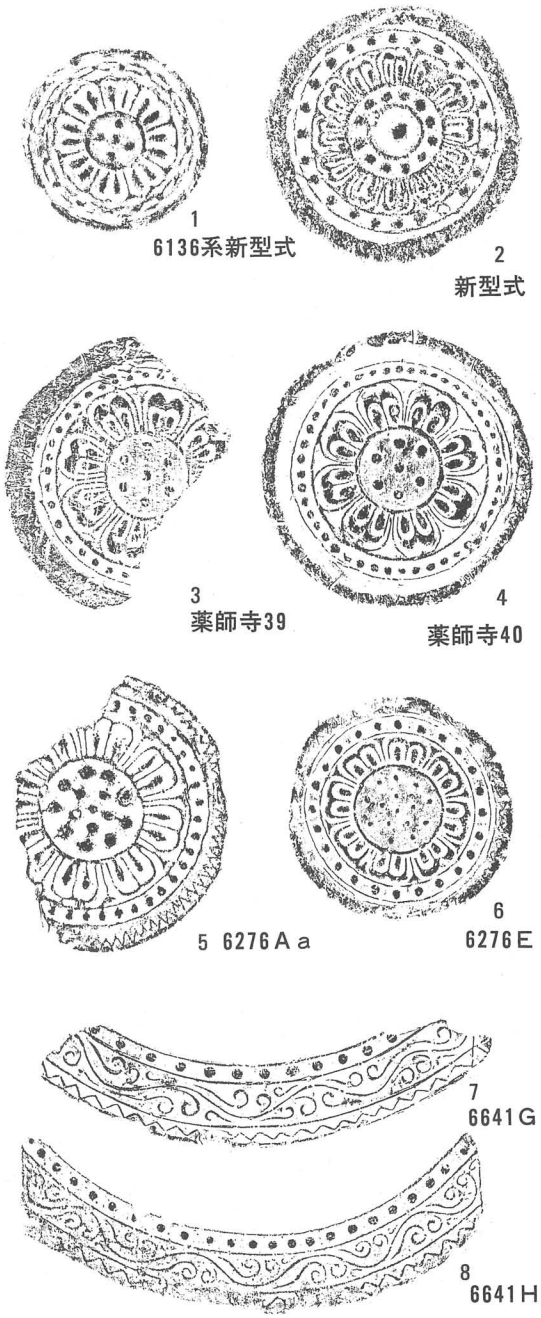


図48　第207次調査出土軒瓦（1：5）

表11　時期別軒瓦集計表

時　期	軒丸瓦	軒平瓦
創建瓦	45 (17.5％)	133 (52.0％)
奈良時代～973年	42 (16.3％)	29 (11.3％)
天禄再建瓦	29 (11.3％)	14 (5.5％)
11世紀～平安末	23 (8.9％)	11 (4.3％)
鎌倉時代室町時代	58 (22.7％)	31 (12.1％)
近世～現代	31 (12.1％)	35 (13.7％)
その他不　明	29 (11.3％)	3 (1.2％)
合　　計	257 (100％)	256 (100％)

西面回廊の調査場所が金堂の西方にあり、ほかの堂塔から離れていたのに対して、今回の東面回廊の調査範囲は、創建以来今日まで維持されてきている東塔に近接している。東塔は中世以後も繰り返し修理が施されているので、その折々に差し替えられ廃棄された瓦は少なくなかっただろう。中、近世および近現代の軒瓦の大半は基壇上の堆積土中から出土したものであり、複廊礎石抜取り穴からは、奈良、平安時代の瓦に加え、中世の軒瓦がいくつか出土した。このような状況のために、西面回廊周辺との出土瓦の様相の相違が生じたものと考えられる。

基壇東側では屋根瓦が落下したままの状態で埋没していたが、その軒瓦をみると、ほとんどが創建時のもので、奈良時代の軒瓦が少しある。また、数点ではあるが、天禄火災後の再建時に作られた軒丸瓦、軒平瓦が含まれている。（図48－3、4）なお、図48－1の軒丸瓦は、基壇東側の瓦捨て穴から出土したもので、軒丸瓦6136型式系の新型式である。

金銅製垂木先飾金具　基壇東側に掘られた瓦捨て穴の中から、大小2点の垂木先金具が出土した（図49）。いずれも方形の金具で、飛檐垂木の木口を飾っていたものである。1は小型品で、タテ9.7cm、ヨコ9.4cm、厚さ0.15cm。2はタテ13.9cm、ヨコ12.9cm、厚さ0.25～0.33cmあり、1、2とも鍍金はおもて面にのみ施され、裏面は鋳放し面のままである。文様は両者ともに対葉形唐草文の意匠をとっている。1では、方形枠の内の上下、左右に4個の対葉形を配し、対角線上の隅に蕾状の栓形を置く。対葉形は、従来の薬師寺出土品の中で祖形とみなされるものに比べると、簡略化した様相をみせている。これらの対葉形と栓形、それに中心の円孔は、毛彫りによる輪郭線と、その内外に施された透彫りで表現されている。2は1の対葉形、栓形に相当する文様が、どちらも両端の尖りぎみな瓢

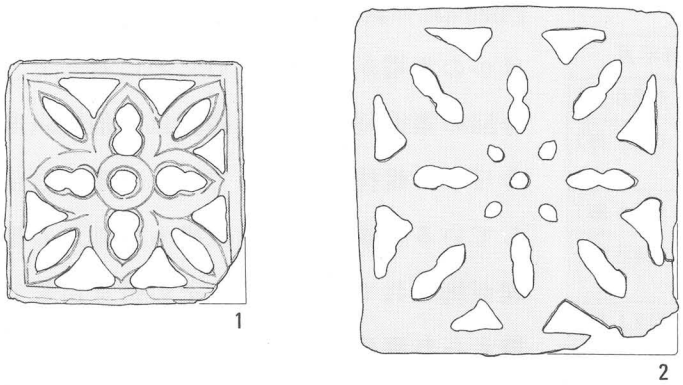


図49　金銅製垂木先飾金具（1：3）

形になり、中心の小円孔の周囲の対角線上に小さな猪目形が4個配される。輪郭線はなく、透彫りだけで文様が表現されている。この2点の垂木先飾金具の法量は、主屋の飛檐垂木の木口と裳階の飛檐垂木の木口の大きさによく対応している。

4　まとめ

薬師寺東面回廊については、今回の調査で地下遺構のほぼ全域を明らかにしたことになる。遺構の遺存状態が良くない部分もあり、必ずしもすべてが解明されたわけではないが、いくつかの重要な事実が明らかになった。また、これまでの見解に修正を加えるべき点や、新たに検討を行う必要のある問題点も生じてきた。そこで、まとめにかえて、東面回廊の柱間の問題と、廃絶の時期に関する問題とをとりあげておこう。

柱間について　今回の調査で、東面回廊の柱間が24間であったことが確定したことにより、かねてからの懸案が解決されたのであるが、同時にまた別の検討課題を提起することにもなった。

973年（天禄4）2月27日夜、十字廊から出火した火災で、金堂と塔以外の中心伽藍はことごとく焼失したと『薬師寺縁起』は伝える。被災後ただちに朝廷がのりだして復興が開始された。諸国に造営を割り当てるなどしたが、おもに薬師寺自身の尽力により、11世紀はじめには再建が完成したと考えられている。『薬師寺縁起』は1015年（長和4）に復興の完了を記念して書かれたものとされており、薬師寺創建の由来や、焼失する以前の伽藍の規模などが詳しくしるされている。この中の回廊についての項目をみると、南面20間、北面16間、東面24間、西面25間として、西面が東面より1間多く書かれている（図50）。『薬師寺発掘調

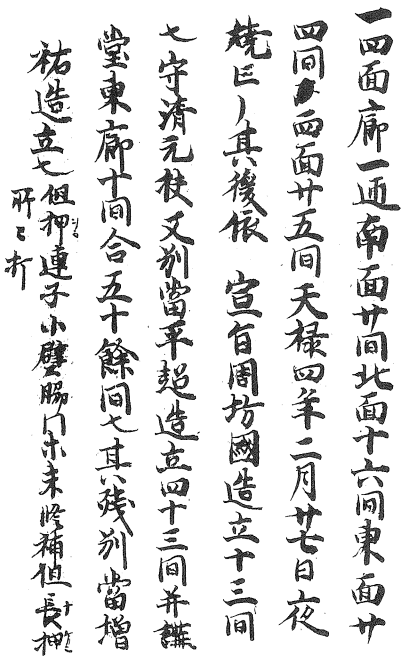

一四面廊一通南面廿間北面十六間東面廿
四間西面廿五間天禄四年二月廿七日夜
燒亡其後依宣旨周防國造立十三間
七守清元秩又別當平超造立四十三間并鐘
堂東廊十間合五十餘間七其殘別當增
祐造立七但柳連子小壁脇門未終補但長柳
所ニ折

図50　『薬師寺縁起より』

査報告』では「東面は転写の誤記」とし、その理由を次のようにのべている。

「この柱間の数は内側の柱列で数え、中門及び講堂の両脇を除いた柱間数である。天禄火災後の造営の割り当ては『縁起』によると、大門が大和、中門と回廊30間が備前、30間が備後、22間が安芸、14間と食堂は播磨に割り当てられた。（中略）この割り当ては合わせて96間になるが、これは中門・講堂の両脇をふくめ、南面は東端まで13間ずつ、北面は東端まで10間ずつ、東西回廊は南北面回廊内側柱通り柱間25間として数えた合計にあたる。」

上記の説明のうち、南面回廊が東端（および西端）まで13間ずつとあるのは、中門への取り付き部分も１間としてかぞえた数である。いっぽう、北面回廊の10間ずつあるのは、「講堂両脇をふくめ」てかぞえると、正しくは11間になるのである。とすれば、東面よりもむしろ「西面回廊25間」が誤写であり、東西回廊はいずれも24間であった可能性が強い。

1988年の西面回廊の調査では、複廊の、南11間目から16間目までの６間分の範囲が確認されており、桁行寸法が14尺等間であるという所見が得られている。西面回廊の南11間分は発掘していないが、南面回廊内側柱西端の柱位置から14尺（約4.15ｍ）等間で割りつけると、ちょうどおさまる。つまり、西面回廊は、少なくとも南16間分は14尺等間であったと判断されるのである。それに対して、東面回廊の南16間目の柱間は17尺と、広く設定されているものの、南15間目までは14尺等間であり、西面回廊と同じ規格である。かりに西面回廊の総長が東面回廊と同じ363尺で、柱間数が25間であったとすると、17間以北の９間分が119尺と

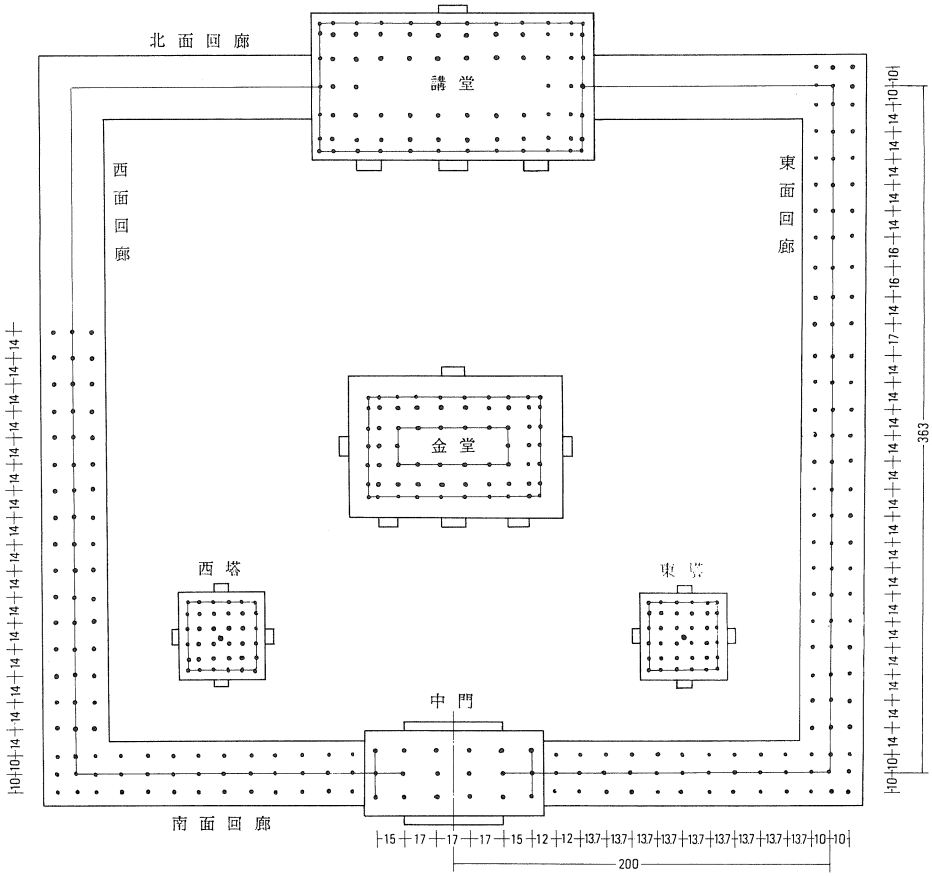


図51　薬師寺複廊計画図（単位は令小尺　1尺＝0.296cm）

なり、1間平均13.2尺となる。柱間寸法が完数尺であったとすると、14尺×2間＋13尺×7間となり、東面回廊との相違はますます大きかったことになろう。最終的な解答は、西面回廊の、とくに北端周辺の地下遺構を確認しなければ得られないともいえるが、現時点では、『薬師寺発掘調査報告』の見解に反して、むしろ西面、東面回廊とも24間であったと判断すべきと考える（図50）。

南面回廊の柱間寸法について　『薬師寺発掘調査報告』では、東面回廊を桁行13.7尺で25間と考えた。その所見をふまえて、南面回廊の柱間寸法について、東半分の長さは「中門桁行柱間寸法（23.98m）の半分を差引いて棟通りで46.49

m（中略）これを単廊同様１尺を29.6cmとすると157尺となる。この場合、中門脇２間は発掘調査によって各12尺であり、これと東端間10尺を差引き残る123尺を９間とすると、１間13.67尺となって端数が残る。１間を東西（面回廊）同様13.7尺として（中略）合わせて棟通りで一方の長さ157.3尺（中略）とみるのが適当あろう」（Ｐ206）。ただし、同報告書では、また別に「複廊は単位尺0.299cmとして南面複廊では桁行13.5尺、東面複廊では桁行13.7尺と考えるのが遺構によく一致する」と記述されており、単位尺、総長および桁行寸法に関して異同がみられる。

いずれにしても、南面回廊では大半の柱位置が遺構として確認されていないこと、それに東面回廊の柱間寸法が13.7尺等間ではないことが明らかになったことなどにより、南面回廊の柱間寸法については再考の余地が生じたと言えよう。検討に当って留意すべき点としては、①東面回廊では、柱間隔を設定する際に、桁行総長を等分しておらず、完数尺で割りふっている。余剰寸法は、いくつかの柱間を広くすることにより解消している。②その不規則に設定された部分は、東面回廊の北半部にある。そこはちょうど金堂よりも背後に位置している、という二つの点を指摘することができる。かりに南面回廊の柱間寸法を完数で割りつけると、14尺６間＋13尺３間という案や、完数ではないが、14尺３間＋13.5尺６間などの案が想定できる。現段階では、いずれも推論の域を出るものではなく、南面回廊の柱間規模については、近いうちに予想される北面回廊の発掘調査の成果を待って再度検討をおこなう必要があると考える。

東面回廊の廃絶について　『薬師寺縁起』によれば、973（天禄４）の大火で四面廊は焼亡したとあるので、東面回廊も焼け落ちたのであろうが、今回の調査では火災の直接的な形跡はみとめられなかった。ただし、落下した屋根瓦をみると、もっとも多い創建瓦のほかに、10世紀末の火災後の再建のために新たに作られた軒瓦も、少ないながらも混っている。基壇東側の雨落溝の埋土のうち、下層の砂層からは10世紀末から11世紀にかけての時期の土師器などが出土したが、これがちょうど再建の時期に一致することは注意される。土器片はいずれも細かいもの

であり、再建後ほどなく雨落溝の堆積がはじまり、その際に流されてきたものが埋没したものと推察される。

雨落溝上層の瓦堆積層に含まれている軒瓦には、天禄再建瓦より新しいものはない。また、伴出する瓦器が12～13世紀のものに限られるので、この年代を大きく隔たらない時期に堆積したものと考えていいだろう。屋根瓦が落下した状況をそのままとどめていることから、回廊建物の倒壊にともなうものであり、焼土や炭化材をまじえていることを考えると、火災のために建物が崩れ落ちた可能性が大きい。

史料に残る天禄火災後の再建以降の回廊に関する記録をみると、1096年（永長１）と1361年（康安１）に地震により倒れたという記事を拾うことができる（『中右記』および『嘉元記』）。ここで問題となる12～13世紀頃に回廊が火災にあったという記録はなく、ほかの主要伽藍についてもこの時期に火災の記事はみられない。回廊に関する最後の史料である1361年の地震による倒壊が、四面回廊全体に及んだものであったのであれば、東面回廊の12～13世紀の焼失とは、くい違いをきたすことになる。回廊の廃絶については、現在得られているデータだけでは結論を出しがたいが、一応次のように推定しておこう。

①奈良時代のはじめに複廊として完成した回廊は973年（天禄４）の火災後、再建された。

②東面回廊は12～13世紀頃に火災で焼け落ちた。

③そのほかの焼け残った回廊建物は14世紀半ばの地震で倒壊し、以後、回廊が再建されることはなかった。

（井上和人）

9　西大寺境内の調査　　第208次

1　はじめに

1989年度の防災工事に伴う発掘調査である。調査は西塔跡北東部をⅠ区とし、ここから北の本坊、東の愛染堂、さらには東塔跡近くに至るトレンチ（幅約1.5m）をそれぞれⅢ区、Ⅱ・Ⅳ区として実施した（図52）。

調査地の基本層序は表土・置土下に灰褐土・茶灰土・淡褐土があり、以下は西大寺創建時の整地土が3～4層（0.3～0.8m）あり、東西両塔付近では地山の黄褐粘質土、中間地区は沼地となる。地山および沼地の上面は地表から約1.1～1.6mである。

2　遺　　構

検出した主な遺構は、西大寺造営以前の平城京および古墳時代の遺構と、西大寺創建期および平安時代から近世に至る遺構である（図53）。

古墳時代の遺構は斜行溝SD02（Ⅰ区）で、遺物は出土していないが、1987年度に東塔東辺で検出した古墳時代のSD18につながるものであろう。

西大寺造営以前の平城京の遺構には掘立柱建物SB25（Ⅱ区）、素掘りの溝SD07（Ⅱ・Ⅳ区）・37（Ⅰ区）、井戸SE36（Ⅰ区）、沼地SG03（Ⅳ区）の他、小ピット（Ⅳ区）がいくつかある。SB25は推定3×3間の東西棟。柱間は桁行10尺、梁行7.5尺等間であろう。SD37はSB25の北4.1mにある東西溝。SE36は西塔の地業下で検出した大きな土坑で、西塔の造営に伴って人頭大の石を敷いて埋め戻していた。井戸であろう。SG03はⅣ区から北のⅡ区に谷状に入り組む沼地である。沼地の上層からは奈良時代後半の遺物が出土しており、西大寺造営直前まで整地が行なわれなかったことがわかる。SD07は沼状の縁辺に掘られた幅約1.0m、深さ約0.9mの南北溝で、人為的に埋戻している。おそらく、西大寺造営にともなう沼地の排水溝であろう。

西大寺創建時の遺構は西塔SB35の掘込み地業（Ⅰ区）である。この地区の調査は昭和30年に実施しており、今回はその一部を再発掘したことになる。地業は

八角形で、北東辺が深く（残存部深さ約0.9m）、底に人頭大の石をならべその上を版築している。北、東辺はほとんど削平されており、縁辺に溝状の凹みを検出したにとどまる。なお、既掘の成果では地業の径を約26.7mに復原している。

平安時代の遺構には掘立柱建物SB14（梁行6尺等間）、南北溝SD01・05・06・13、東西溝SD23などがある（Ⅱ～Ⅳ区）。伽藍の中軸線がSD04とSD13のほぼセンターにあたり、これらは参道の両側溝であったのかもしれない。

中世の遺構には、溝SD16・29・30・38・39・40（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区）、池状遺構SG24（Ⅱ区）がある。SD04は昨度年検出したSD05と一連のもので、1987年度検出した東塔東辺のSD09とともに、東塔と鎌倉時代に叡尊によって復興された本堂の東西両辺を区画する濠状の大溝である。池状遺構SG24は素掘りの池で、多量の瓦で埋め戻していた。SD16・29・30・38・39・40は西塔付近でH状に連結する溝で、伽藍内西辺の水を西に集め南に排水したものと推測する。

近世の遺構は大きく3時期に区分できる。A期には溝SD09A・15・28・34（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区）があるが、建物は確認していない。SD08・09Aは宝暦12年（1762）に移建された愛染堂の下にも及び、それ以前に遡ぼる。B期には溝SD09B・10・17・18・21・22、礎石建物SB27・41、便所SX33、土坑SK33（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区）などがある。SD09B・21・22は愛染堂の東・南辺を画すように改修したものであろう。SB41は梁行2間（柱間7尺）以上、桁行5間（8尺等間）の南北棟で、SX33は瓦を用いた便所。SB27は棟の方向が不明だが、柱間8尺。土坑SK33からは江戸から発送された西大寺龍池院荷物の付札が出土しており、これらの一連の建物は寛政6年（1794）には存在が知られる龍池院と考える。C期にはSD09AをSD09Bに改修して新設のSD10と連結し、龍池院には礎石建物SB26（7尺等間）・32・41（7尺等間）を設ける（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区）。なお、C期には改修もあり、SD09Bの西には丸瓦を用いた暗渠SX08、SD10の上には石垣SX12を設け、愛染堂と龍池院の間には築地垣SA19と東雨落溝SA20を設ける。Ⅲ区の門SB43と北雨落溝SD44は、上述のSA19に連結して、龍池院の北辺を画したものであろう。龍池院は天保2（1831）の古図に記載があり、過

図52　第208次調査位置図（1：2000）

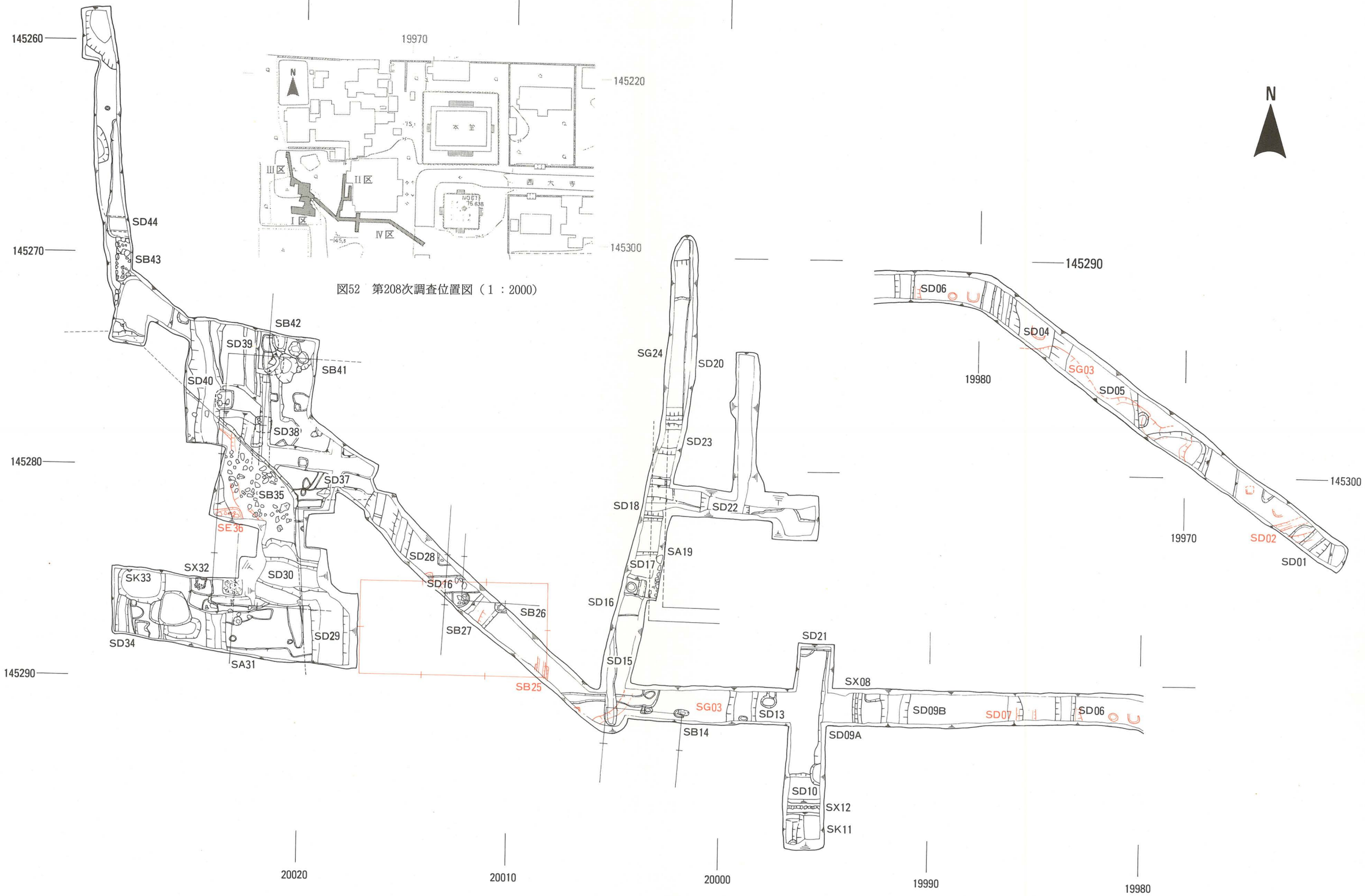


図53　第208次調査遺構図（1：200）

去帳から明治まで存在したことがわかる。

3　遺　　物

出土遺物の大半は瓦塼類（図54）で、とくにSD05とSG24からは軒瓦を含む中世の多量の瓦類が出土した。奈良時代の瓦は西塔跡が再発掘であるため、比較は量が少ないが、創建期の軒瓦6236Ａ・Ｈ－6732Ｎとこれに後続する6139Ａ－6732Ｑの出土がやや目立つ。なお、塑像の台座と思われるもの２点のほか、三彩の棰先瓦が10数点出土した。西大寺造営直前の沼池からは奈良時代後半（平城宮出土軒瓦編年第Ⅳ－１期）の軒丸瓦6316Ｇが出土した。土器は西大寺造営に伴う整地土及び沼地から、良好な資料が出土した。　　（毛利光俊彦）

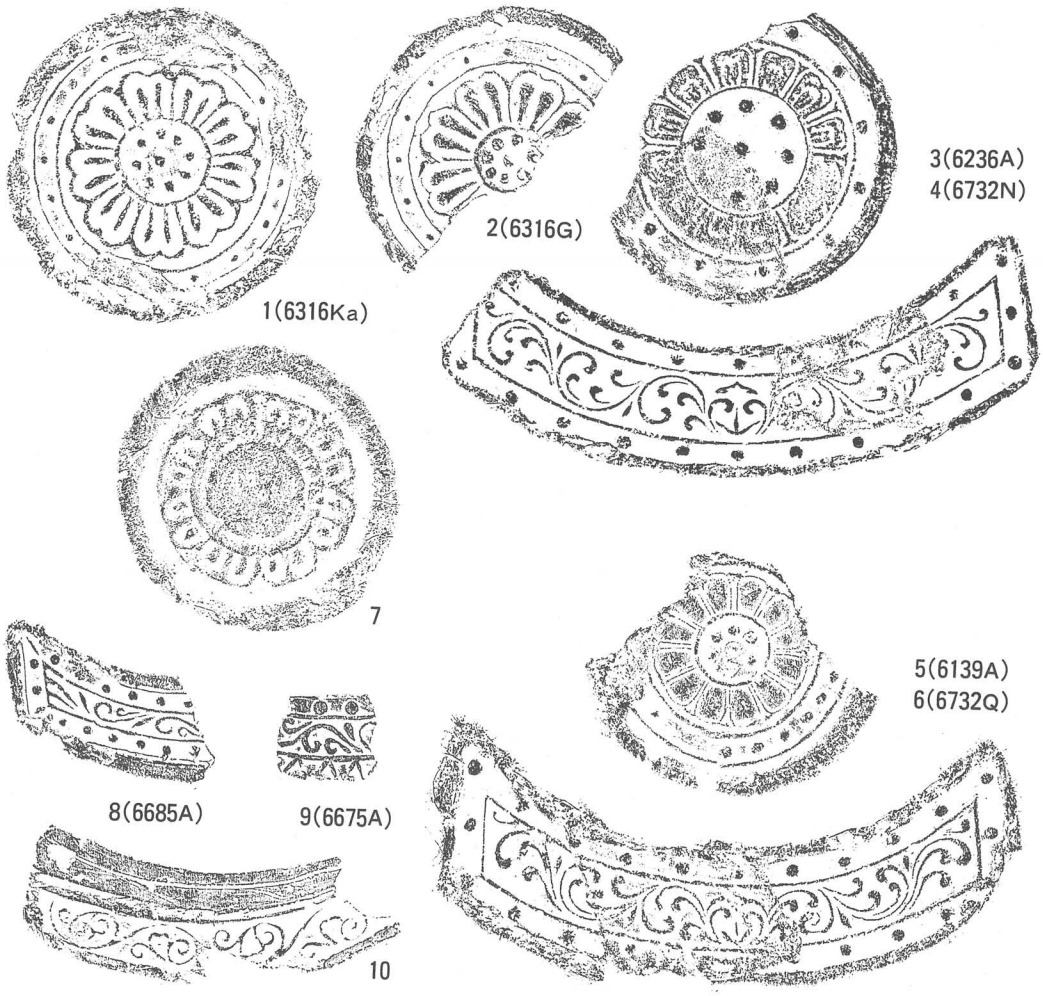


図54　第208次調査出土軒瓦（１：４）

10　西隆寺旧境内の調査（1）　　第209次

1　はじめに

本調査は百貨店改築にともなう事前調査である。調査は平成元年10月２日に開始し、同年11月29日に終了した。調査面積は約1800㎡である。

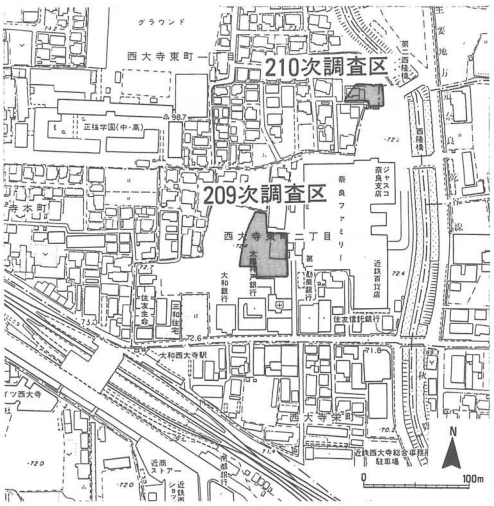


図55　第209・210次調査位置図

調査区は、奈良時代後半に造営された西隆寺旧境内に位置する（図55）。西隆寺は右京一条二坊九・十・十五・十六坪の４町を占め、調査地は十坪に位置する。西隆寺境内では、かつて、昭和46年から昭和48年にかけて奈良国立文化財研究所が発掘調査を行っている。この調査では、西隆寺の遺構として、金堂、塔、東門、南面築地を検出し、西隆寺に先行する奈良時代前半の掘立柱建物を検出している（『西隆寺調査報告書』）。また、昭和57年に奈良大学文化財学科が講堂推定地北方の調査を行い、東西掘立柱塀を検出している。本調査の調査区は金堂の東側に位置し、西隆寺の東面回廊推定位置にあたり、調査では推定どおり東面回廊を検出した（図56）。また、西隆寺の下層遺構として、奈良時代前半の掘立柱建物11棟、掘立柱塀２条、井戸２基を検出し、古墳時代の遺構として斜行する溝を検出した。

2　遺　　構

A期　古墳時代の遺構

発掘区を斜めに横断する大溝ＳＤ350をはじめとする数条の斜行溝を検出した。ＳＤ350は幅３ｍ、深さ45cmで（図57）、ＳＤ340はＳＤ350に直行して流れ込むと推定される。これらの溝と並行または直行する細い溝はほぼ20ｍ～24ｍの間隔で、調査地周辺を区画している。調査区西南では２本の細い溝が約40cmの間隔をおいて平行しており、田圃の畦の可能性があり、これら斜行溝は水田に関わる

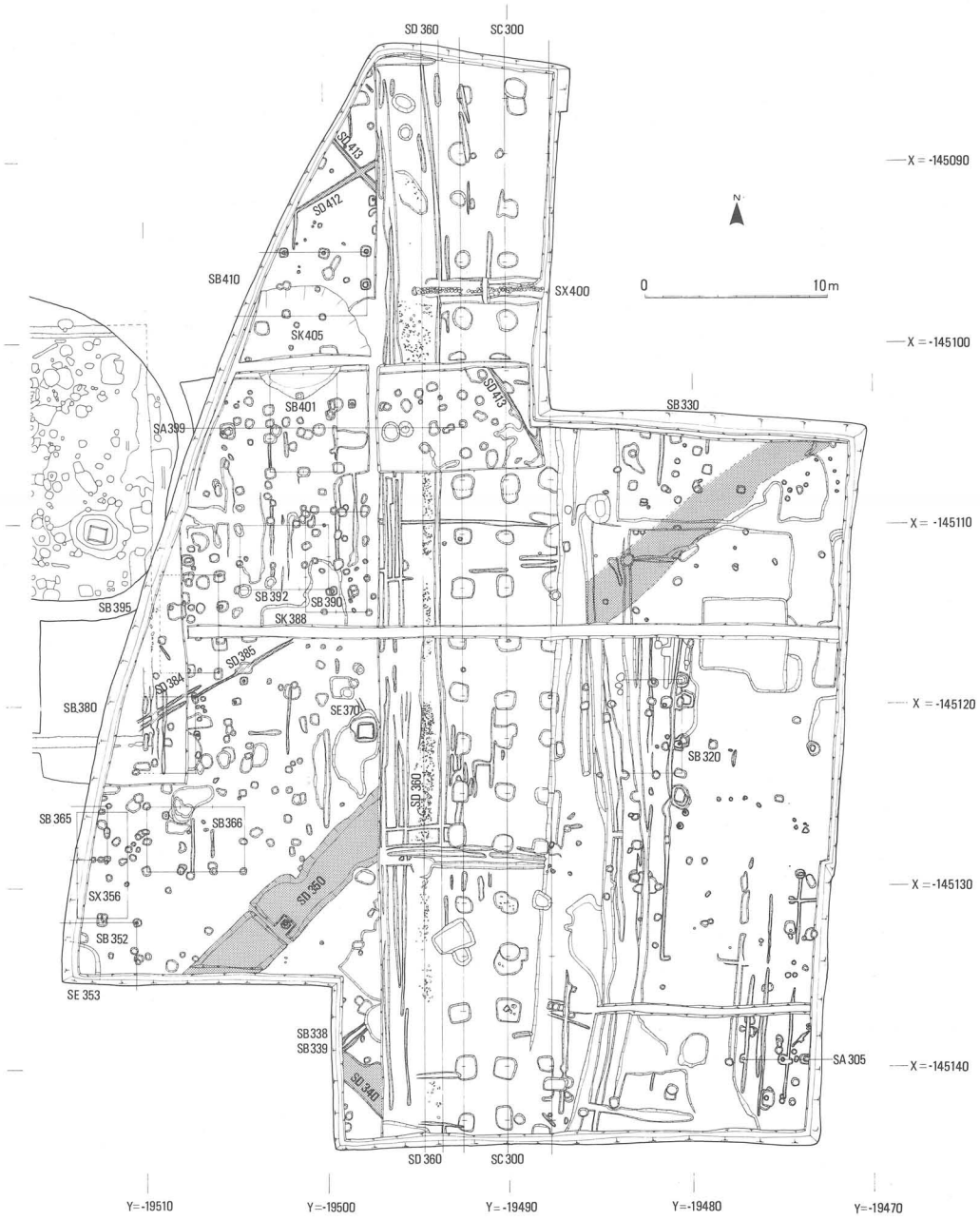


図56　第209次調査遺構図（1：400）

灌概施設と推定される。平城京内で畦は未確認であり、今後の調査に注意を要する。

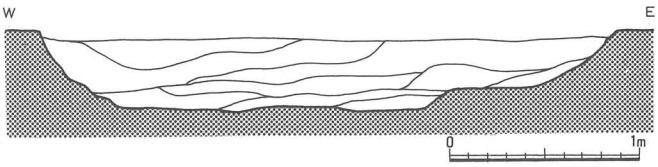


図57　大溝SD350断面図（1：40）

B期　奈良時代前半の遺構

今回検出した掘立柱建物はいずれも小規模である。桁行柱間数を3間とするものがほとんどで、柱間寸法は6尺前後で、柱穴も小さい。

2基の井戸のうち、西南隅のＳＥ353は井戸枠が抜き取られているが、発掘区中央部のＳＥ370は井戸枠を残している。ＳＥ370の井戸枠は東西90cm、南北80cmの長方形で、四隅に柱をたて、横桟を通して、桟の外側に縦板を張る（図58）。昭和46年の調査成果によって、西隆寺造営前は坪境小路が通り、十坪が1町占地以下であったことが判明している。十坪のほぼ中央の塔下層では桁行7間、梁行2間、南庇付きの大規模な建物を検出している。今回の調査では坪内を分割するような施設は検出しておらず、十坪が1町占地で、今回検出した建物は、塔下層の建物を中心とした敷地の雑舎群と考えられる。しかしながら、今回の調査区と昭和46年に調査した金堂の下層では、井戸が近接して存在しており、小規模な敷地単位であった可能性も否定できない。

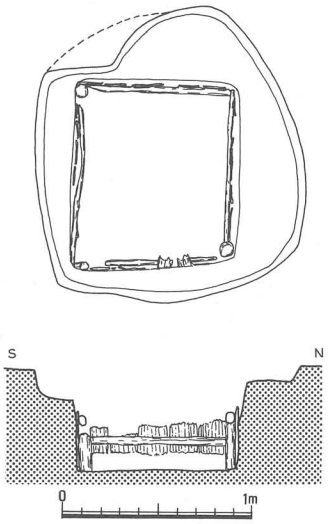


図58　井戸SE370（1：40）

C期　西隆寺の遺構

西隆寺造営時の整地層で東面回廊を検出した。基壇土は削平されて残存せず、掘り込み地業も認められなかった。回廊に関わる遺構は、礎石抜取り穴、西雨落溝底の瓦堆積、暗渠である。なお、回廊の東側柱列より東は、後世に田圃にするときに一段下げているため、西隆寺時期の遺構はすべて削平されている。

礎石抜取り穴は、南北に3列にならび、回廊は複廊であった。桁行方向（南北方向）に19間分を検出し、桁行柱間寸法は10尺等間であるが、南から8間目のみ

8尺と狭い。回廊全体計画の上からこの部分のみを縮めたのか、狭い部分がなんらかの施設として意味をもつかは不明である。梁行方向の柱間寸法は8尺等間である。礎石抜取り穴は1mから1.2mの隅丸方形もしくは円形を呈し、断面は深さ10cmほどのレンズ状で、抜取り穴の底が微かに残る状況である（図59）。西雨落溝はほぼ底面まで削平されていたが、底面に雨落溝の化粧材を抜取った後に投棄されたと考えられる瓦が、幅0.5～1mにわたり帯状に堆積していた。堆積した瓦には完形品がなく、細かく割れた瓦が多く、再利用不可能な廃品が投棄されたと考えられる。

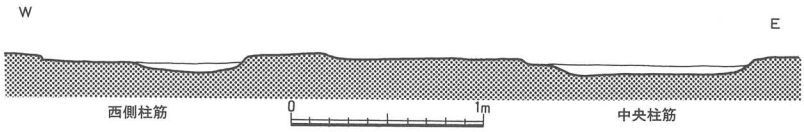


図59　西隆寺東面回廊SC300断面図（1：40）

暗渠は底石に拳大の偏平な川原石を並べ、側石に凝灰岩を立て、底面は東へ向かって傾斜する。そして、西端に川原石の底石と上面を揃えて、凝灰岩を据える。底石の並びを仔細にみると、回廊西側柱から西へ4尺の位置で並び方が変わっている。その位置より東では川原石がほぼ2列に並んでいるのに対して、西では川原石がほぼ3列に並んでいる。この石の並びが変わる位置が基壇端と推定される。すなわち、西側柱心からの基壇の出が4尺である。そして、暗渠西端が西雨落溝の西端と考えられ、雨落溝西肩は暗渠西端の凝灰岩上に凝灰岩の側石を立てたと推定できる。回廊西側柱心から暗渠西端の凝灰岩の内側まで7尺、基壇西端から西雨落溝西肩まで3尺である。3尺幅の雨落溝もしくは、3尺幅に犬走りと雨落溝を想定できる。暗渠底石のレベルは雨落溝抜取り跡の底面より深く、雨落溝と暗渠が交錯する部分では、暗渠を雨落溝より一段深くし、暗渠より北からの排水は、暗渠によって強制的に回廊外へ流していたと推定される。暗渠側石に凝灰岩を使用していることから、基壇化粧も凝灰岩であったと考えられる。

3　遺　　物

出土した軒瓦の大半は、平城宮出土軒瓦編年Ⅳ期に属する（図60）。軒丸瓦では6235C型式、軒平瓦では6761Aと6775A型式の瓦の出土量が目立つ。また、東面回廊付近から鬼瓦片が出土した。土器は、土師器・須恵器の他に緑釉片・青磁

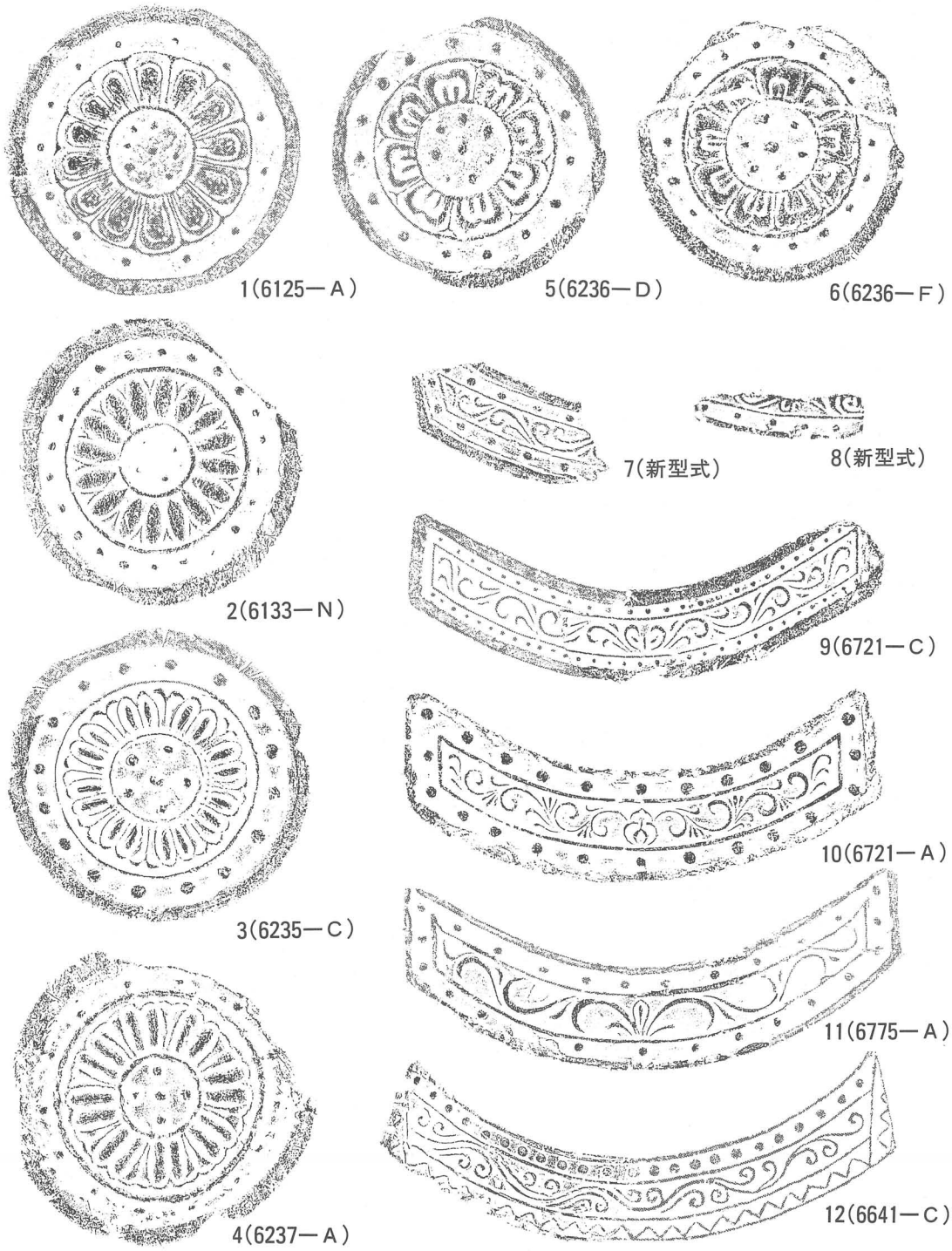


図60　第209次調査出土の軒瓦（1：4）

片・白磁片も出土し、ＳＫ388からは、灯芯位置にすすが付着する灯明皿として使用された奈良時代末期の土師器が出土した。

4　まとめ

今回の調査により、西隆寺の中心伽藍の規模がほぼ判明した（図61）。金堂の中心から東回廊の中心までは38.55ｍで、１尺を29.7cmとすれば、130尺となる。したがって、東西回廊の心心距離は260尺で計画されている。

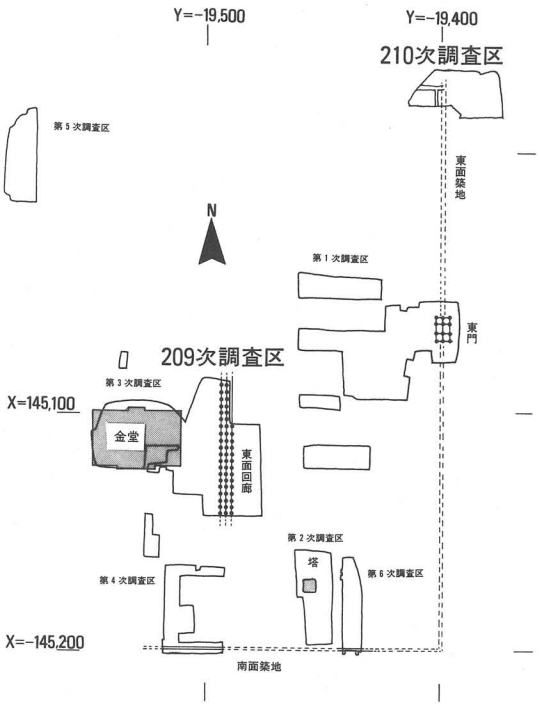


図61　今まで検出された西隆寺の遺構

今回の調査区内では東面回廊が西へ曲がる地点は検出しておらず、回廊は金堂には取り付かず講堂に取り付いていたと推定される。西隆寺の伽藍を知る資料として、宝亀11年の絵図流記を模写したと伝える元禄11年の「西大寺伽藍絵図」がある（図63）。絵図には西大寺の伽藍に加えて西隆寺伽藍が描かれており、金堂・塔の発掘成果から、絵図はほぼ真実を伝えていると考えられている。絵図では回廊が金堂に取り付かずに、講堂に取り付いており、今回の発掘成果と一致し、絵図は回廊についても真実を伝えている可能性が高い。

なお、絵図によると東面回廊・西面回廊のほぼ中央部に楽門が描かれているが、今回の調査では門位置を確定することはできなかった。回廊に門が付く場合、桁行柱間寸法や梁行柱間寸法を回廊より広くする場合があるが、西隆寺回廊の桁行柱間寸法は一定で、梁行寸法もとくに広くなる部分はない。また、西雨落溝も、瓦の堆積状況から、まっすぐに通っており、張り出し部分はない。したがって、絵図にあるように楽門が存在していたとしても、柱間寸法は回廊と同じとし、屋根だけを切り上げた門であったと推定される。　（島田敏男）

11　西隆寺旧境内の調査（2）　　第210次

1　はじめに

本調査は、第209次調査同様に百貨店改築工事にともなう事前調査である。建設予定地は、西隆寺旧境内の東北隅の一角と西二坊々間路と北一条大路が交差する位置にあたる。西隆寺の寺域は、敷地のほんの一部しかかからず、そのため、条坊遺構の検出に重点を置くことにし、敷地全域を発掘する方針で臨んだ。

しかし、この周辺の従前の調査成果や地形の情況から、遺構が秋篠川の氾濫で破壊されている可能性が十分に考えられた。それに、排土置場・車の搬入路などの事情で敷地を一度に掘れないこともあり、まず調査区東半で西二坊々間路の検出状況を確認のうえで、全域を調査するか否かの判断をすることにした。

調査の結果、予想通り秋篠川の氾濫で遺構はまったく失われており、北側部分については調査を断念した。

2　遺　　構

調査区の北側と東側は、秋篠川の旧流路にあたり、奈良時代の遺構面を大きく浸食し、東南方向に流れている。旧水路の堆積は厚さ約1.3mで、大きく3層に分れる。上層は暗灰色粘質土、中層は黒灰色粘質土、下層は厚さ0.8mにも達する灰褐色粗砂であり、中層からは江戸時代の遺物が出土している。

奈良時代の遺構が残るのは西南の170㎡に満たない範囲であり、検出した遺構は、掘立柱建物3棟、溝2条、築地1条、井戸1基にすぎない（図62）。このうち、井戸はつい最近まで使用されていたものである。当調査地には第209次調査地のような寺造営時に伴う整地土は認められず、遺構はすべて茶褐色の地山面で検出した。建物は調査区に納まらず、棟の方向・規模は確定できない。

ＳＢ425は、梁行2間（柱間9尺等間）、桁行2間（柱間9尺）以上の東西棟の可能性がある。ＳＢ426はＳＢ425に切られる建物で、東西方向に一間分（柱間10尺）を検出したにとどまる。ＳＢ428も東西・南北にそれぞれ1間づつ検出したにすぎない。前述の2棟とは方位を異にする。

ＳＡ420は、西隆寺の東を画す築地塀で、西側雨落溝ＳＤ421と推定築地基壇土を検出した。基壇土とみた黄灰粘土は、東へ下降する地山の上にあり、築地東半部が浸食されているため定かでないが、東側一帯の整地土の可能性もある。

西側雨落溝ＳＤ421は、幅約0.7m、深さ0.4m。後述する東西溝ＳＤ429と鍵の手状にとり付き、北には延びない。

東西溝ＳＤ429は、横断面Ｖ字状の溝で、上端幅2.1m、深さ1.0m。築地部分は石組の暗渠となる。築地付近は何度も冠水したらしく、溝の肩が大きく広がる。暗渠もその度に修復されたらしく、現存の暗渠は壊れた凝灰岩側石の上に自然石を積み、蓋には凝灰岩の切石と自然石を使っている。溝底のレベルは、ＳＤ421のそれよりも約0.5m程低い。

3　遺　　物

出土遺物の大半は、土器と瓦であり、土器は主として築地雨落溝ＳＤ421と東西溝ＳＤ429から出土した。いずれも西隆寺造営以後の時期に属す。

軒瓦は旧流路の埋土から３点（6664－Ｃ、6752、6710－Ａ）が出土した。また築地雨落溝ＳＤ421、東西溝ＳＤ429からは大量の丸・平瓦が出土したが、軒瓦は１点もなく、築地は丸・平瓦だけで葺いていた可能性がある。

4　まとめ

秋篠川の氾濫の傷跡は予想以上に深く、条坊に関する情報はえられなかったが、西隆寺の東北隅の状況が何とか把握できたことは不幸中の幸いであった。

掘形の大きい掘立柱建物ＳＢ426については、「西大寺伽藍絵図」に描かれた西隆寺伽藍の東北隅に描かれている「殿」と墨書された南北棟建物の可能性が高い（図63）。ＳＢ426を切るＳＢ425は、掘形から平安時代前期の土器が出土しており、西隆寺に関連する建物（ＳＢ426の後身）、あるいは西隆寺廃絶後の建物と目される。

東西溝ＳＤ429は、従前の調査で検出している東門の芯から北に105.8m離れた位置にあたり、その値は１町分の長さに近い。また、東面築地回廊の西雨落溝ＳＤ421は、ＳＤ429の北には延びず、それと鍵の手にとり付く。したがって、

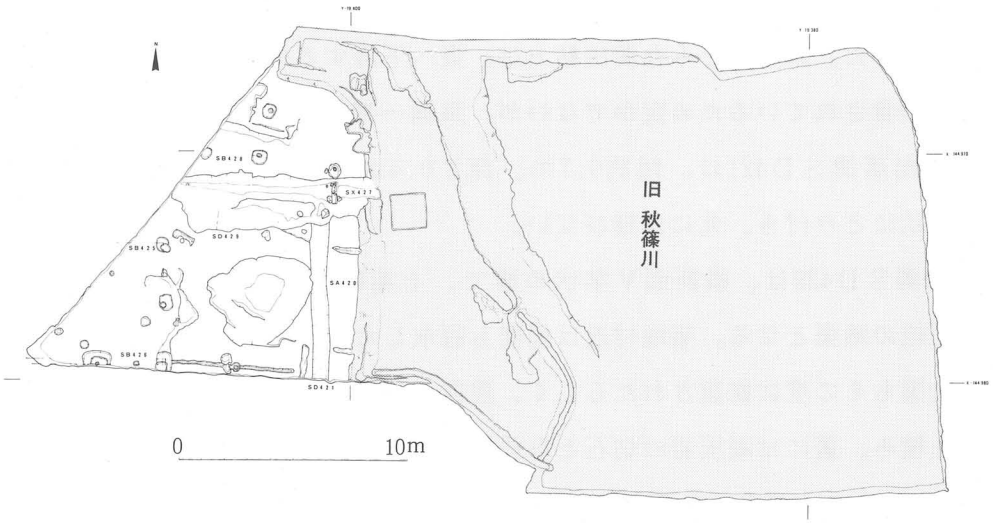


図62　第210次調査遺構図

築地本体は検出していないが、SD429は北面築地の南雨落溝の可能性が極めて高いといえよう。SB426、SD429の比定の当否については、今後引き続き行われる百貨店改築や都計道路建設にともなう調査で検討されることを望む。

（巽淳一郎）

図63　西大寺伽藍絵図に描かれた西隆寺

12　法華寺旧境内の調査　　第202－12次

この調査は住宅建設に先立つ事前調査で、調査地は法華寺旧境内の西北隅にあたる。寺域西限の施設の存在も予想されたので、東西7.2m、南北1.8mの調査区とその西南方に東西3.8m、南北0.5mの調査区を設定した。

調査地は現状では東から西に向けて緩やかに傾斜している。基本的な層序は、約30cmの厚さの置き土と灰褐土（旧耕土）の下に黄灰褐砂質土の整地土があり、その下は黄褐砂礫土、黄灰白砂質土となっている。

遺構は整地土上面で、南北溝１条と掘立柱建物１棟、その他、柱穴３個、土坑などを検出した。

南北溝ＳＤ01は、前年度実施した平城宮第191－12次調査などの成果から、推定東二坊坊間路東側の坪の築地東雨落溝の位置に近く、幅約2.2m、深さ約0.7m。出土遺物から奈良時代後半以降に掘られたと推定され、法華寺の西を限る可能性が考えられる。掘立柱建物ＳＢ01は、1.95m（6.5尺）間隔で東西にならぶ３個の柱穴で、南北棟の妻柱列と考えられる。柱掘形は一辺約0.8m、深さ約0.9mで、いずれも柱を抜き取った痕跡が認められる。調査区が限られているため、北妻か南妻かは不明。掘立柱建物は妻柱列西端の柱抜取り穴と南北溝の重複関係から、奈良時代中頃以前にさかのぼるものである。土坑ＳＫ01は井戸の可能性もある。なお、南北溝心の国土方眼座標は、Ｘ＝－145290.00、Ｙ＝－17776.08である。　　（小林謙一）

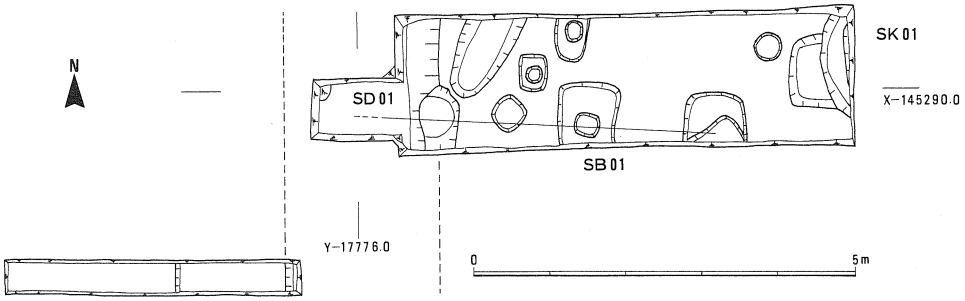


図64　第202－12次調査遺構図（１：100）

13　東大寺南大門の調査　　第202－16次

1　はじめに

1989年から1990年にかけて、文化庁美術工芸課と奈良県文化財保存課の指導のもとに、日本美術院国宝修理所が東大寺南大門金剛力士像のうち吽形像（図65、65）の解体修理を行うこととなり、去る１月16日から延べ10日間で像搬出後の地下調査を実施した。調査面積は約15㎡である。

今回の地下調査の最大の目的は、修理された像を再び南大門に安置した後の基壇上面の整備方法を検討する資料を得ることにあった。しかし、金剛力士像は建仁３（1203）年の南大門再建と同時に造立されて以来、

図65 東大寺南大門吽形金剛力士像

図66　東南から見た吽形金剛力士像左足元（日本美術院国宝修理所提供）

部分的な修理が施されてはいるものの、他所へ移されることもなく原位置をそのまま保持し続けてきたと伝えられている。したがって、このたびの全解体修理および地下調査は史上初めて実施されたという点で大きな意義があり、鎌倉時代の立像技術の全容を解明するうえで極めて重要な意味を持つ。今回の調査では、整備のための検討資料を得ること以外に、総重量約６～７ｔにもおよぶ像の基礎構造を把握するとともに、南大門創建以来の基壇の築成状況を明らかにすることも目的とした。

2　調査前の状況

地下調査を実施する直前の状況は、吽形像を支える直径約70～80cmの４個の円形の台石の周囲に、直径約40～50cmの上面の平らな自然石が計７石とりまき、さらにこれらを連結するように人頭大の玉石が多数存在した。前者は像の足元を化粧する岩座の台石で、後者は像の爪先を補助的に支える木材を下から受ける機能を持つ。いづれも石の上端がわずかに見えるだけで、台石と周囲の石列は厚さ約２～３cmの褐色砂質土の中にほとんど埋没していた。この砂質土のさらに外周は、三和土の破砕片を多量に含む白色砂質土が門脇間のほぼ全域にわたって堆積していた。ただ、台石や石列の存在する脇間中央から、門板壁の地覆に向かって緩やかな勾配で下がっており、上記の褐色砂質土、白色砂質土が、後世の像足元周辺の舗装材や盛土であることを想像させた。この直上には、１円硬貨や10円銅貨をはじめとする現代の通貨が多数散在していた。なおこれらの状況は、写真測量によって資料保存した。

3　遺　　構

（１）基本層位（図67）

遺跡の基本層位はおよそ４つに分けることができる。上面から第１層は厚さ約２～３cmの三和土あるいは漆喰の破砕片を多量に含む白色砂質土で、現代の通貨を含む。第２層は厚さ約５～10cmで近世初頭の瓦片や寛永通宝等を含む江戸時代の褐色砂質土のたたき層。吽形像台石やこれをとりまく自然石の目地に深く食い込んでいる。台石より東側にはよく残るが、西側には明瞭に遺存しない。第３層

は厚さ約５cmの褐色土で、非常に固く締め固められている。脇間全面によく残っており、ある時期の基壇上面をなすものと考えられる。この層の上面には、基壇築成時の版築工法による圧痕である径約５～７cmの凹凸が無数に存在する。層中からは奈良時代をはじめとする古代の瓦片が少量出土した。なおこの層の上面で岩座の台石７石のうち３石の据え付け掘形と、台石をつなぐ中央の人頭大の石列の据え付け掘形を検出した。第４層以下は、基壇築成時に順次版築工法によって積み上げられた土層で、互層をなす。現基壇上面から約120cm下層に基壇の基礎地業として径約10～30cm大の自然石を敷き詰め、この上に厚さは一定しないが砂質土を版築工法によって交互に積み上げ、基壇を造成している。第４層から下層のいづれの版築層からも遺物は出土しなかった。なお、従来の研究によれば、東大寺南大門は応和２（962）年、永祚１（989）年の２度の大風によって倒壊したのをはじめ、治承４（1180）年には平家の南都焼討ちに合って焼失した可能性が指摘されてきた。しかし今回の調査では、これらの痕跡を示す焼土層などの堆積を確認することはできなかった。

（２）遺　　構（図67）

検出した遺構は、吽形像の台石４石（SX001、002）と、これをとりまく岩座の台石７石（SX003、004）、像の足元を連結するように遺存する人頭大の石列（SX005）およびその直下の円礫敷（SX006）、基壇基底部の石敷（SX009）、そして門の創建か解体修理に伴う足場穴（SS008、009、010）等である。以下にそれらの概要を解説する。

SX001　吽形像の左足元の台石で、２石並んで検出した。中心はやや東の台石が北へ偏る。直径約70～80cm、成約35～40cmの不整球形で、２石とも上面に直径約50～60cm、成約６～７cmの平らな円形作り出しがある。据え付け掘形は、第３層の固く締まった褐色土層の直下から掘削されており、褐色土の上面では掘形は検出できない。掘形は断割り調査区において部分的に検出したにとどまるが、２石の平面形に合わせて不整形な掘形に復原できる。掘形底部に台石を安定させる径約20～25cm大の根石を据え、この上に２石を同時に据え付けたものとみられる。

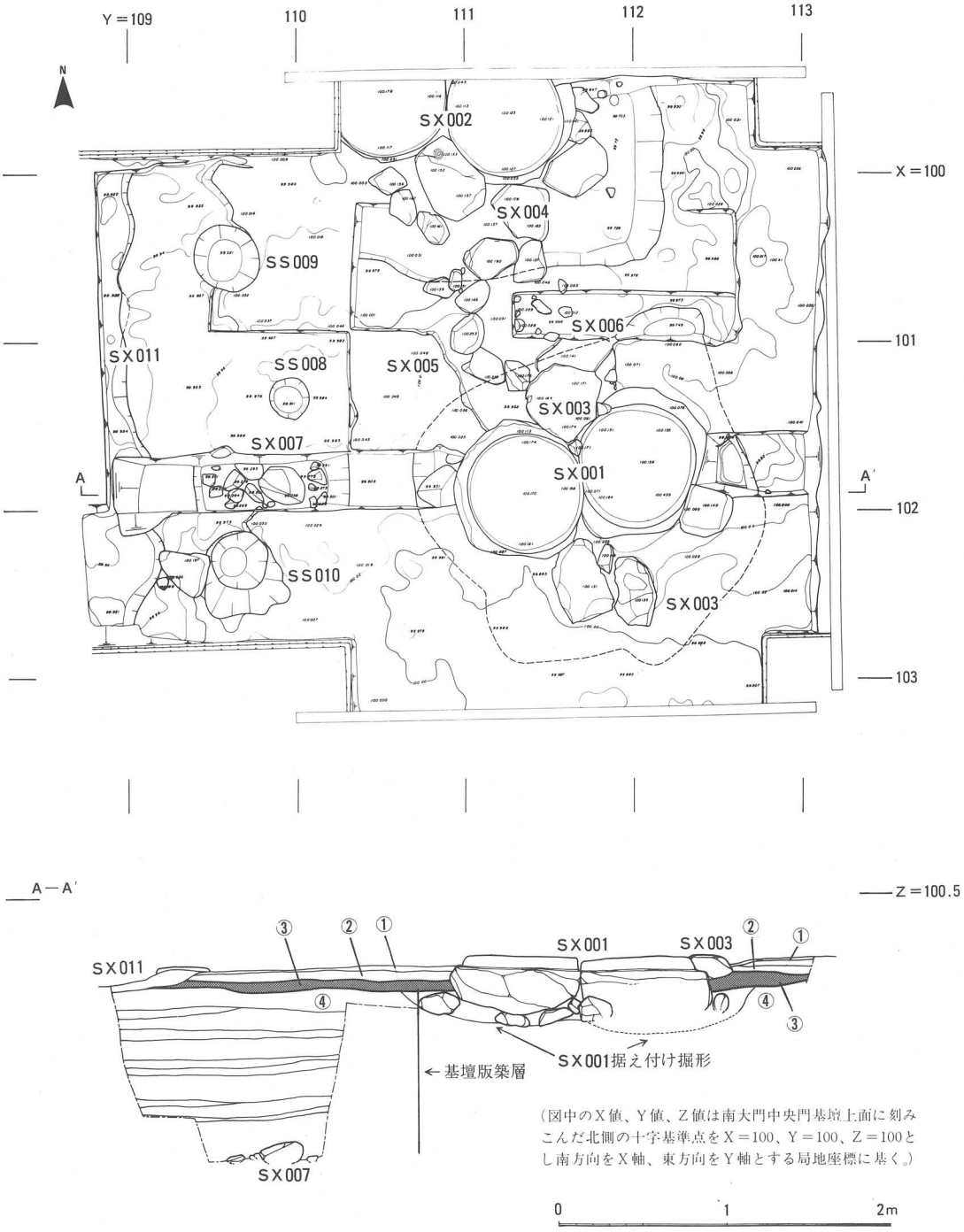


図67　東大寺南大門基壇および吽形金剛力士像台石平面図・断面図（1：40）

掘形埋土からの出土遺物はない。

SX002　吽形像右足元の台石。SX001と同様に2石並んでおり、東の台石が北へずれる。大きさ、形状ともにSX001と似ている。据え付け掘形は2石を同時に据え付けるために楕円形としており、深さ約50cmで底面は平坦である。また、据え付け掘形の検出面も、SX001と同様に第3層の直下である。掘形埋土からの出土遺物はない。

SX003　SX001をとりまく4石の上面の平坦な自然石。上面の高さをほぼSX001に合わせる。4石のうちSX001の南に遺存する3石は、掘形を第3層上面で検出できなかった。とりわけ最も東端に遺存する石を土層断面において観察したところ、石そのものが第3層中に含まれていることが明らかになった。したがって、これらの3石は、第3層築成と同時に据え付けられていることが指摘できる。これに対してSX001の北側の1石は第3層の上面で掘形を検出したため、石を取り上げて掘形を精査したところ、石の直下から寛永通宝が5枚出土した。また、埋土がかなり軟弱な砂質土であるため、掘形底面が空洞化していることも判明した。おそらく、もともと存在した石を江戸時代以降に据えなおしたものと考えられる。

SX004　SX002をとりまく3石の上面の平らな自然石。3石はSX002の台石とともに、目地深く第2層のたたき層が入り込んでいる。この第2層を剥して第3層上面を精査したところ、東側の2石については掘形を検出したが、西側の1石については掘形を検出できなかった。東側の2石の掘形は、2石の平面形に合わせて掘削されており、埋土は軟弱な褐色砂質土である。さらに第3層を剥したところ像右足台石（SX002）の掘形を検出し、この掘形がSX004東側2石の掘形と南縁辺部を揃えることを確認した。つまり、SX004は、直下のSX002掘形埋土のうち軟弱な部分が落ち込んでSX004の浮動沈下をきたしたため、北側2石を後世に据えなおしたものとみられる。SX004の掘形埋土からの出土遺物はないが、おそらくSX003と同様に江戸時代の修復であろう。また、西側の1石は、SX006の南側3石と同じく第3層中に含み込まれており、第3層築

成と同時に据えられていることがわかる。

SX005　SX001、003とSX002、004とを連結するように帯状に散在する人頭大の石列。各石の上面の高さは不揃いで、かなり乱雑に据えられた様相を呈する。SX005の据え付け掘形は、第3層上面において深さ約3～7cm、南北約0.9m、東西約0.9mの範囲にわたって検出した。各石ごとに個々の掘形を掘削して据えるのではなく、大きな掘形に多数の石を一括して据えている。これらの石の直下から、寛永通宝3枚、文久永宝2枚が出土した。SX005の石列の上には、吽形像両足爪先を支える角材が2段重ねてのる。しかし、この角材は部分的に楔を用いて爪先の下に噛まされているだけで、随時簡単にとりはずすことのできるものである。像の総重量の大半は踵の下から足と一体に作り出された支柱とその下の台石（SX001、SX002）にかかっているのであり、上記の2本の角材は像をより安定させるという補助的な機能しか持たない。したがって、SX005は、SX001、002等の台石掘形埋土の軟弱な部分に影響されて浮動沈下を起こした箇所を、江戸時代末期から明治時代にかけて人頭大の石を積めて安定させたものと考えられる。

SX006　SX005直下の第3層上面で検出した円礫敷。SX001とSX002の据え付け掘形に挟まれて、掘形相互を結ぶように存在する。SX006は、第3層築成の過程で敷かれている。SX005と同様に、像の重量負荷による基壇上面の浮動沈下を防ぐために施された地業であろう。

SX007　SX001の西の断割調査区底部において検出した玉石敷。現基壇上面から約1.2m下層にあたり、玉石の大きさは約10～25cmである。調査区が南北約1.5m、東西約0.3mと狭く、検出範囲が限られているが、おそらく基壇基底部全域におよんでいるものと推定される。南大門基壇築成にともなって施された地業であろう。SX007直上から第3層直下まで、粘質土と砂質土を交互に版築工法によって積み上げる。各層の厚さは5～20cmと一定しない。

SS008　調査区中央やや西よりの地点で検出した、直径約20cmの円形掘形。南大門の建造あるいは修造に関わる足場穴である可能性がある。また、吽形像の立

像に関わる足場穴である可能性も否定できない。遺物が出土しなかったので時期については不明である。

SS009、010　調査区西端で検出した2個の足場穴。第1層の白色砂質土直下の第2層上面で検出した。両者ともに直径約35cm、深さ約50cmである。埋土は非常に軟弱な砂質土で、比較的新しいと思われる木材の削り屑を多量に含む。南大門は1930年に解体修理が行われており、その時の足場穴と思われる。

SX011　調査区西端で検出した、西へ向かって落ちる比高約5～10cmの南北方向の段差。検出面は第1層上面で、埋土から現代の通貨が多数出土した。南大門脇間中央の高まりの西端に、さらに盛土したのであろう。施工時期は第二次大戦後と思われる。

3　遺　　物

瓦片の出土量は調査面積が狭小な割には比較的多い。とりわけ第2層からは近世の瓦片、第3層からは奈良時代を中心とする古代の瓦片が出土した。土器の出土量はごくわずかである。また、SX003の補修に伴う掘形埋土、あるいはSX005据え付け掘形埋土から、寛永通宝計14枚、文久永宝2枚が出土した。なお、冒頭にも触れたとおり、本調査の最大の目的は解体修理後の像周辺整備手法の検討資料を得ることにあったため、SX001、SX002等像基底部を深く掘り下げて詳しい調査を実施することができなかった。したがって、門基壇造成時、あるいは吽形像立像時の地鎮に関する遺構は検出していないし、またこれに関連する遺物も出土していない。

4　まとめ

今回の調査によって、吽形像立像における基底部の工法と補修の過程、そして、南大門の基壇築成過程の一端を把握することができた。調査の成果をまとめると以下のようになる。

(1)　SX001、SX002の吽形像台石は、第4層以下の基壇版築層の築成後に掘形を掘削し根石で安定させて据え付けている。そして、その後に第3層を石際まで敷均して版築工法によって締め固め、基壇上面としている。

(2) 像足元周囲の岩座を支える台石（SX 003、SX 004）7石のうち、4石は第3層築成と同時に据えられているが、他の3石は据え直しなどの補修を受けていることが判明した。これは、SX001、SX002掘形埋土の軟弱な部分が落盤して、SX003、SX004の浮動沈下を招いたためと理解できる。補修の時期は、補修時の掘形埋土から出土した寛永通宝によって江戸時代以降に比定できる。

(3) SX005は、浮動沈下した基壇上面と、像両足の爪先を支える角材下面との間に噛まされた玉石であることが判明した。石直下の掘形埋土から文久永宝が出土したため、施工時期を江戸末期から明治時代に比定することができる。

(4) SX001の南に約1.5×0.3mの断割り調査区を設けて掘り下げたところ、南大門基壇基底部の地業をなすと考えられる玉石敷を検出した。この玉石敷の上層に、厚さ5～10cmの砂質土と粘質土とが互層を為す明確な基壇版築層を確認することができた。

最後に本調査成果を踏まえて、南大門創建および再建にかかわる基壇の造成と修造の過程、そしてそれらと吽形像立像との関係について付言しておく。

今回の調査では、SX001、002は第4層上面で掘形を掘削し、台石を据え付けた後に第3層を敷均して基壇上面を形成していることが判明した。第3層から出土した瓦片はいづれも古代のものだが、第3層が非常に固く締め固められた均質な層であるのに対し、第4層以下は互層をなす版築層であるとはいえ、やや軟弱な層である。したがって、両者は同時に施工されたとみるよりも、異なる時期の造成とみるのが妥当であろう。1930年に実施された南大門解体修理にともなう地下調査では、南大門基壇と門棟通から東西に延びる築地基底部との接点において、奈良時代の南大門の凝灰岩製基壇外装を検出している。同時に、奈良時代の基壇が現在の基壇とほぼ同規模であったことも明らかとなった。この調査成果を考慮するなら、今回検出した第4層以下の版築層を奈良時代の南大門基壇築成土、第3層を建仁3（1203）年の門再建に伴う築成土に比定することが可能である。『正倉院文書』によれば、奈良時代の南大門は少なくとも天平宝字6（762)年に

は完成していたことが想像されるが、このときの門基壇は玉石敷地業の上に版築工法によって築成された基壇本体を凝灰岩で外装したものであった。その後、鎌倉時代の再建に際しては、基壇上面を全面的に清掃し、金剛力士像台石を据え付けた後に第3層によって新たな基壇上面を造成したものと考えられる。

さて以上のように考えれば、SX001、002の吽形像台石は鎌倉時代の門再建時に据え付けられたものとなり、それ以前の像は如何なる基礎構造を持つものであったのかという疑問が残る。奈良時代の門に安置された像基底部の調査例として、薬師寺中門を挙げることができる。1982年の発掘調査では、5×2間の中門両脇間に2対の仁王像台石が発見された。この各台石の平坦な上面中央には、直径約25cm、深さ約30cmの仁王像両足の心木を受ける枘穴を検出し、この内部から天禄4（973）年に火災で焼失した仁王像の断片と思われる塑像の破片約200個体が出土した。また、法隆寺中門に現在もなお安置されている仁王像も塑像である。したがって、奈良時代の門両脇間に安置された像は木彫ではなく塑像であるのが一般的で、これらの基礎を為す台石には塑像の構造ゆえに心木を受ける枘穴が必要不可欠である。ところが今回の調査で検出した台石上面には、いづれも円形の造り出しが存在するのみで枘穴は存在しない。奈良時代の東大寺南大門に像が存在したとするなら、それは塑像である可能性が高いのであるが、SX001、002はそれらの基礎として形状の上で極めて不適格であるといわざるを得ない。したがって、現状では奈良時代の南大門に安置されていた像がどのような構造を持ち、また、如何なる基礎構造を持つものであったのかは不明というほかない。おそらく奈良時代の像台石は門再建に伴って抜き取られ、その抜取り痕跡を利用してSX001、002が据え付けられた可能性がある。また、SX001、002は形状から判断して、鎌倉時代の立像に際して、それ以前の建物の礎石を転用している可能性も否定できない。なお、上記の課題の解明は、阿形像の解体修理に伴う地下調査に待ちたい。

（本中　真）